

## 川渡温泉史料

著者	高橋 陽一
雑誌名	東北文化資料叢書 ； 第2集 ． 近世地方史料陸奥国 玉造郡大口村
発行年	2007-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/46120">http://hdl.handle.net/10097/46120</a>

東北文化資料叢書第二集

近世地方史料

陸奥国玉造郡大口村

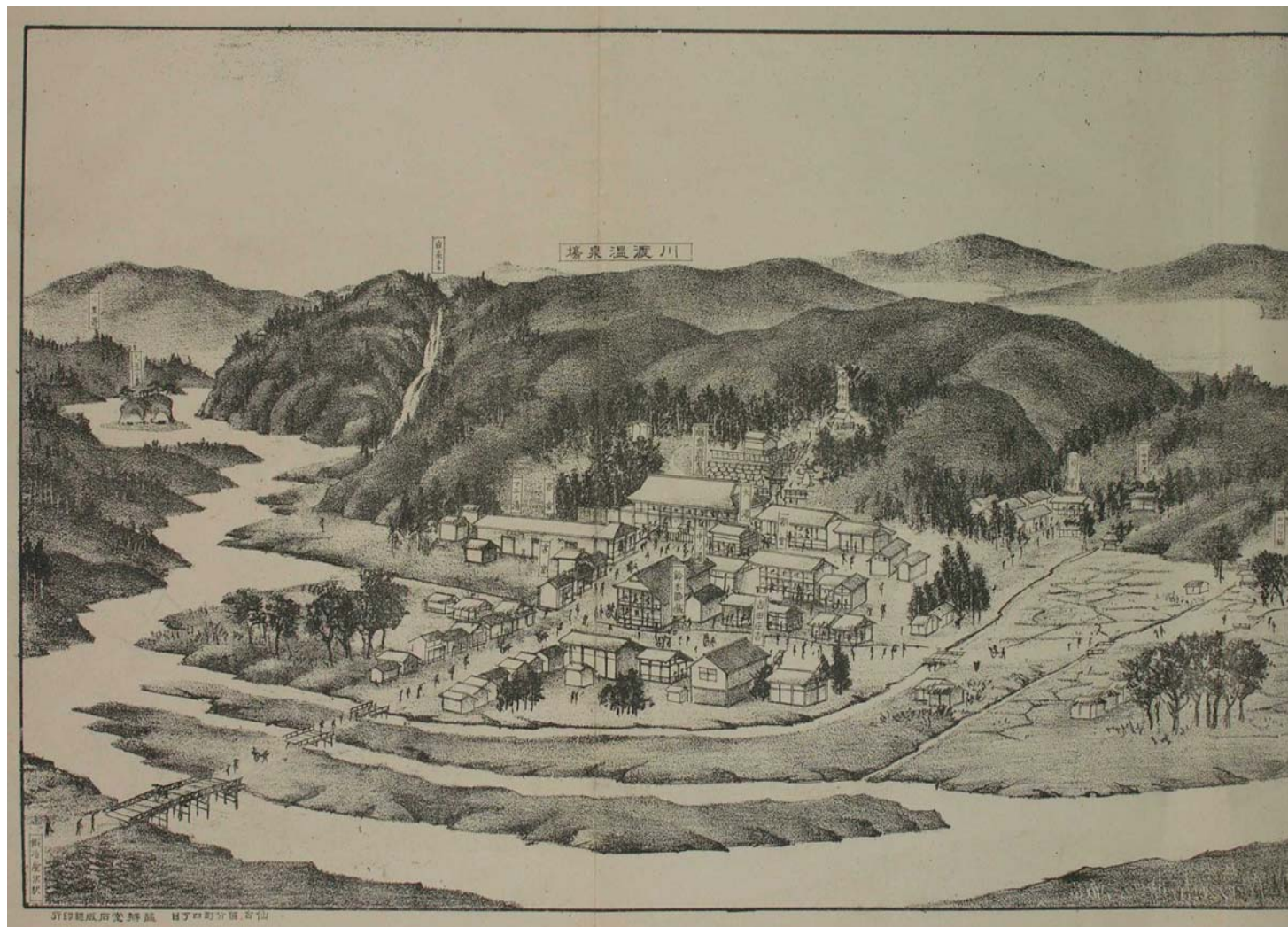
# 川渡温泉史料

東北大学大学院文学研究科東北文化研究室

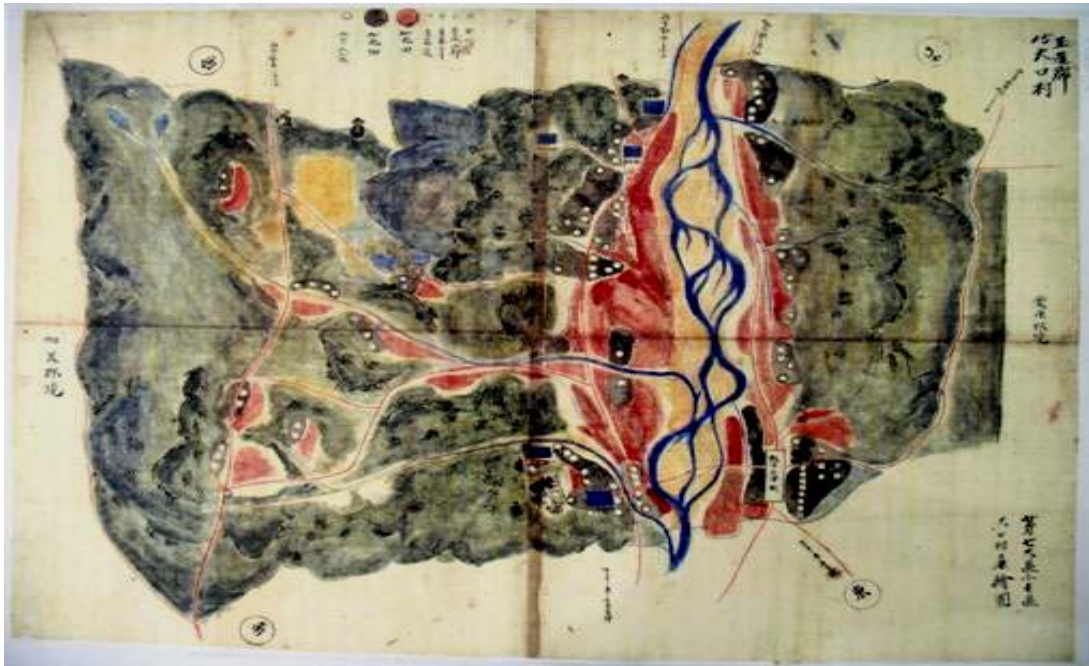
二〇〇七年三月



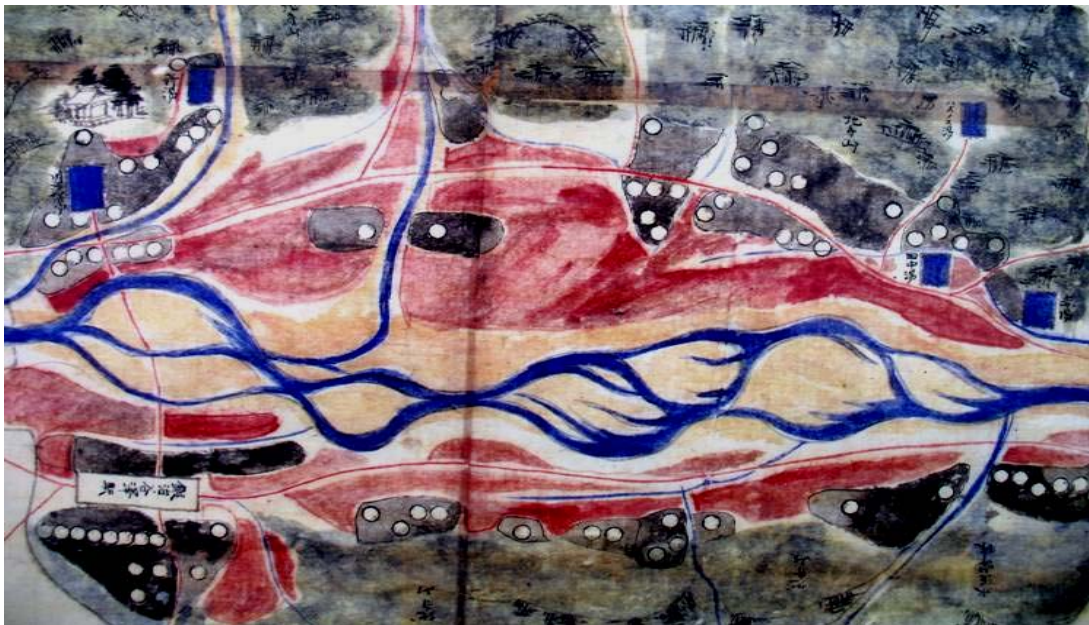
1. 明治前期の川渡温泉絵図（永澤小兵衛編著『宮城県鉱泉志』（二八九一年、宮城県図書館蔵）より）橋を渡って直進したつきあたりが藤島吉郎右衛門家（藤島旅館）である。周辺には客室のほか、「大湯」・「マユノ湯」・「中ノ湯」といった外湯（共同浴場）が確認できる。



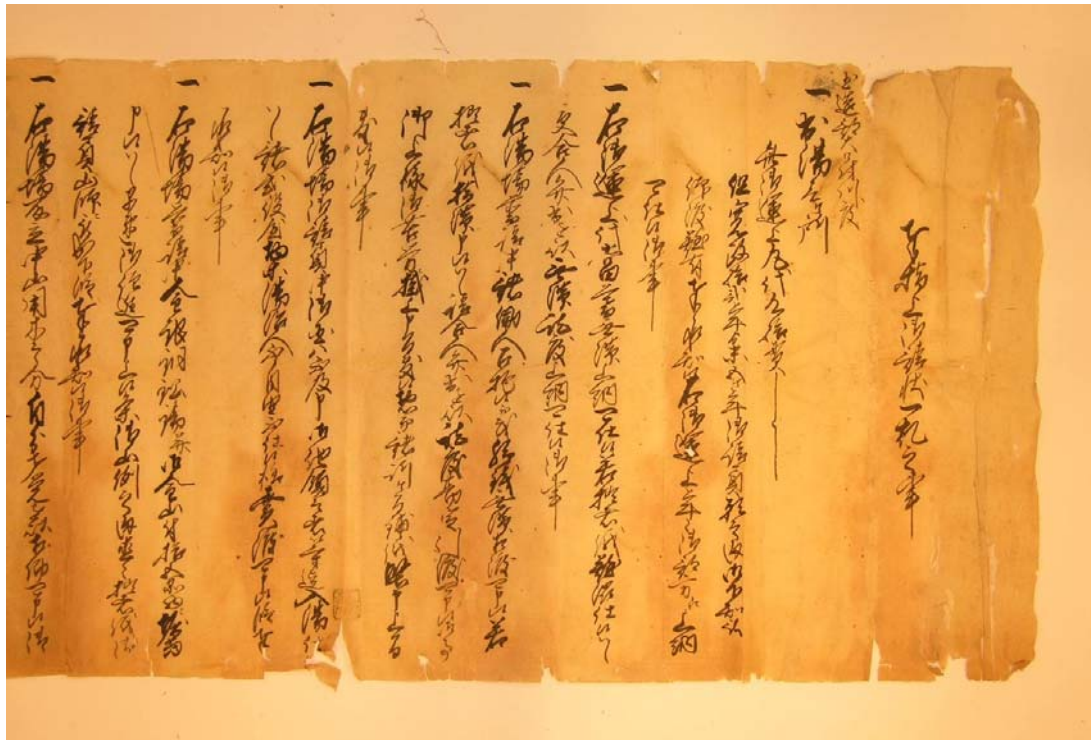




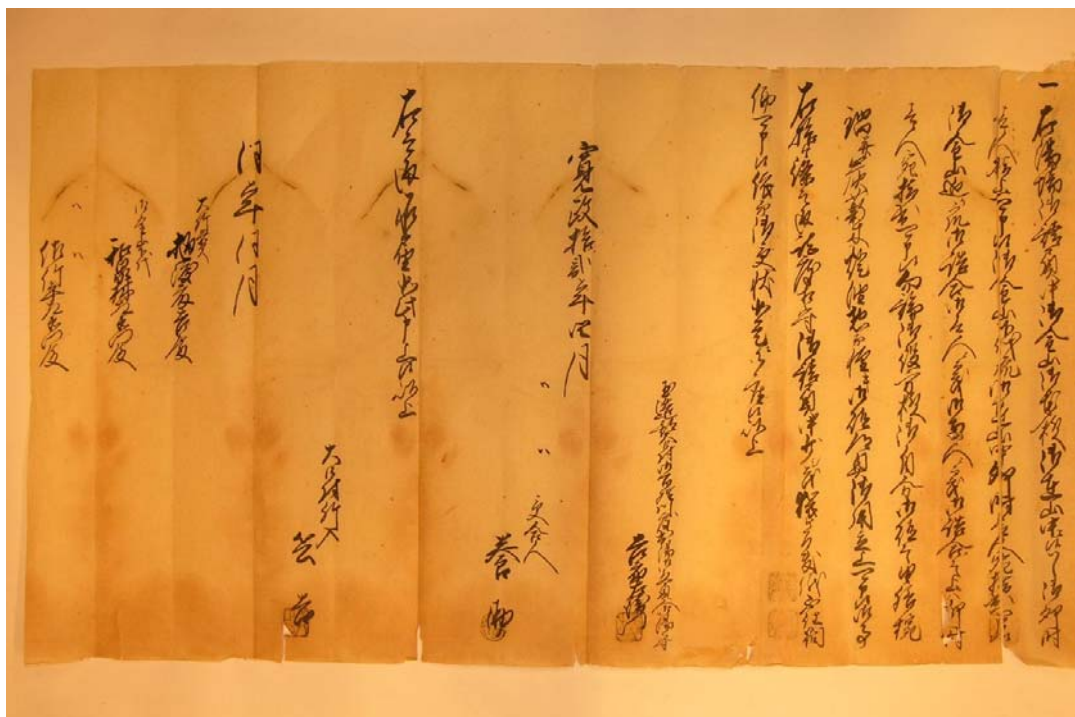
2. 明治初期の大口村絵図（「第七大区小巻区大口村絵図」〈宮城県公文書館蔵〉より）  
大区小区制が施行されていた明治5～11年頃のものと思われる。



3. 明治初期の大口村絵図（同上図を拡大）  
四角で囲った青色の部分に温泉。右が鳴子、左が岩出山方面。「川渡湯」（左上）のほか、「新湯」（左上）・「ハスノス湯」（鶯の巣湯/右上）・「田中湯」（右上）・「赤湯」（右上）が確認できる。

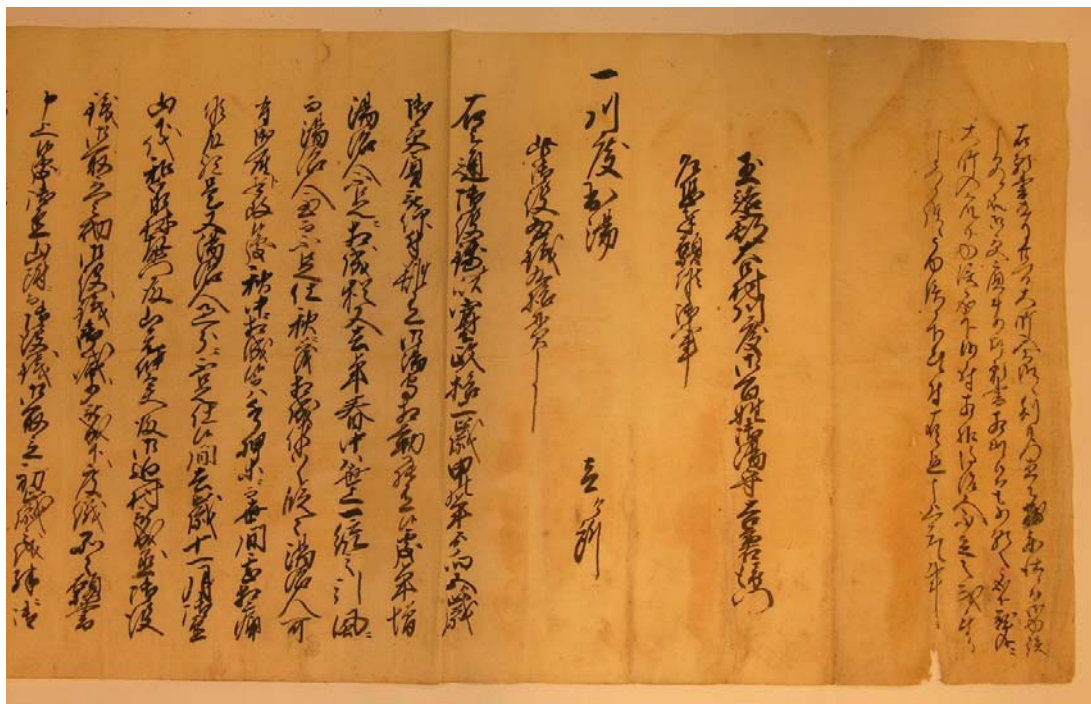


4. 吉郎右衛門請状（本書史料番号【1】/上巻・目録番号 92）

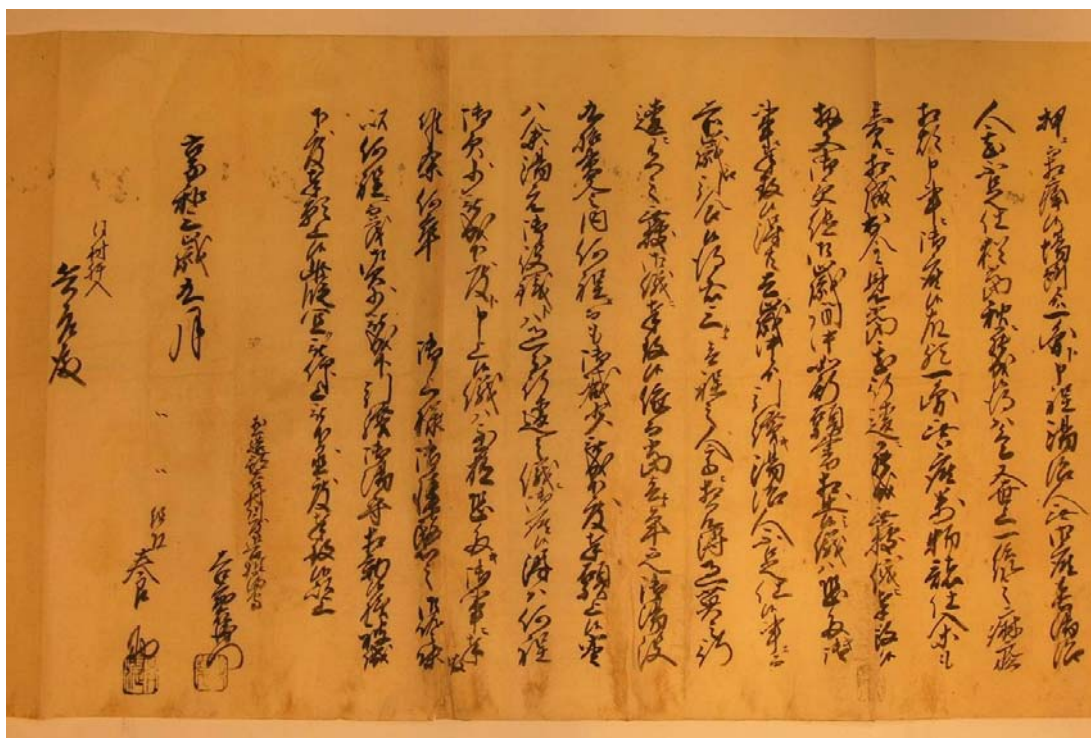


5. 同上（後半部分）

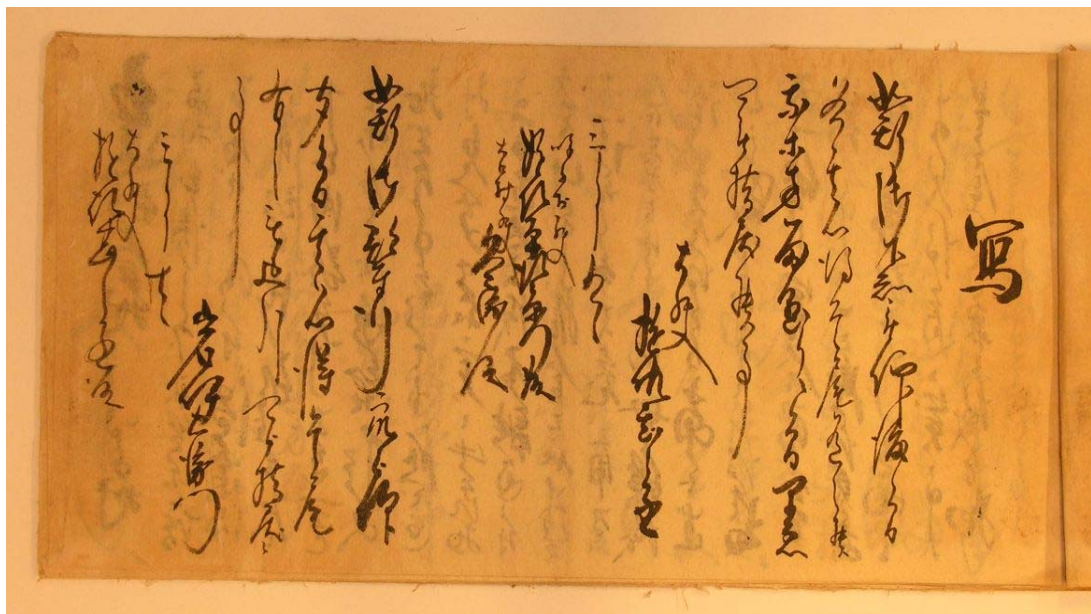




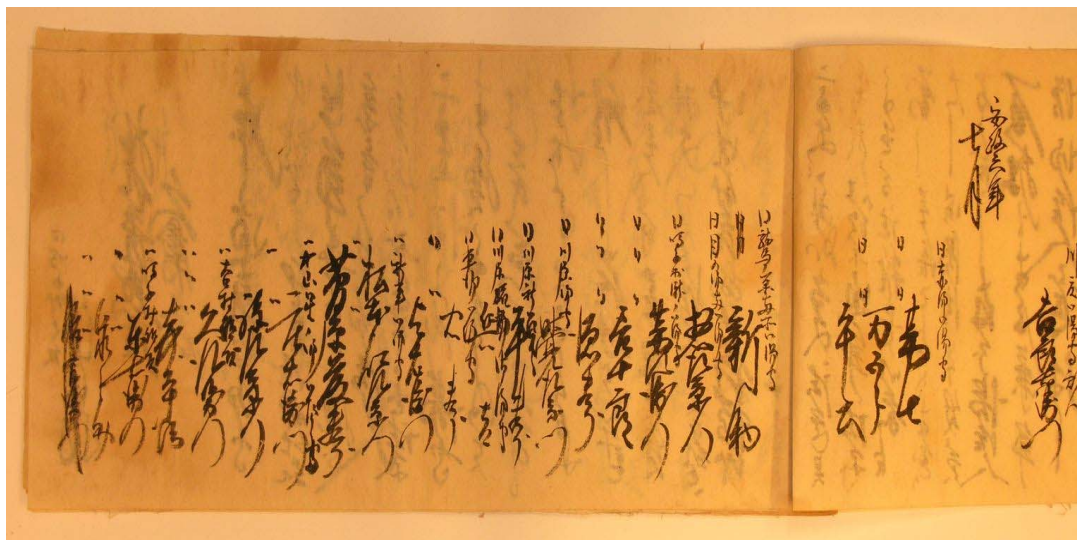
6. 吉郎右衛門御役代減額請願書 (本書史料番号【7】/下巻分・目録番号 95)



7. 同上 (途中部分)

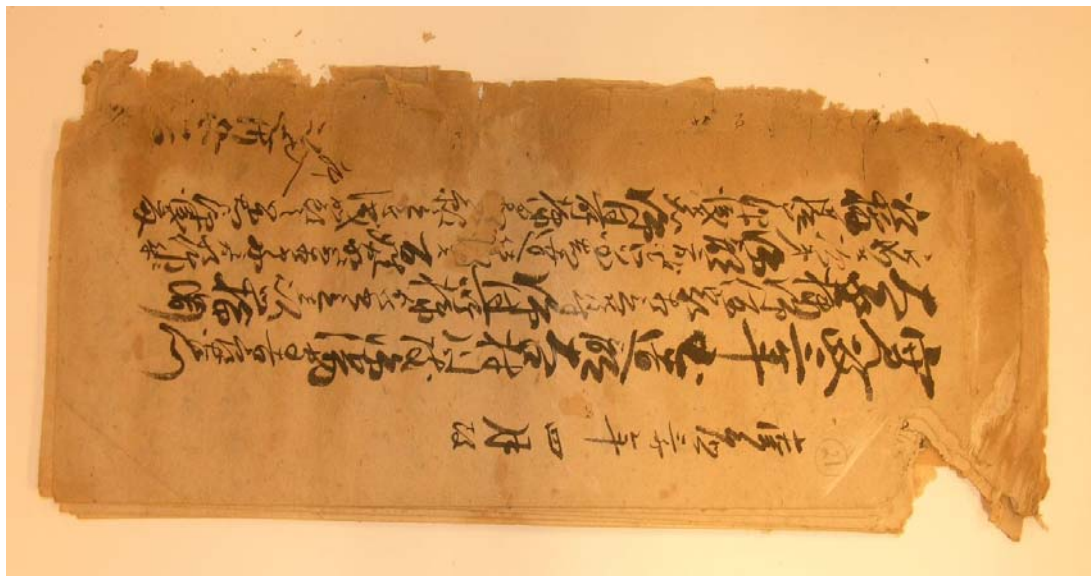


8. 大口村鳴子村湯守共湯銭変更請願書及達書 (本書史料番号【21】/下巻分・目録番号 188)



9. 同上 (途中部分)





10. 仮屋普請につき御下知留（本書史料番号【23】/下巻分・目録番号 21）



11. 現在の藤島旅館



東北文化資料叢書第二集 近世地方史料 陸奥国玉造郡大口村

# 川渡温泉史料

東北大学大学院文学研究科東北文化研究室

二〇〇七年三月

川渡温泉史料

目次

凡例	3
川渡温泉史料解題	5
I 支配関係	
【1】吉郎右衛門請状（上・92寛政二年）	12
【2】御役代の件達書（上・150年未詳）	14
【3】出湯方御用留帳（上・41嘉永六年）	18
II 御役代関係	
【4】岩出山衆温泉請負請願書（上・174寛政二年）	28
【5】吉郎右衛門永久湯守請願書（下・91寛政二年）	28
【6】吉郎右衛門御役代減額請願書（上・94享和二年）	33
【7】吉郎右衛門御役代減額請願書（下・95享和二年）	35
【8】吉郎右衛門御役代減額請願書（下・96享和二年）	37
【9】吉郎右衛門御役代減額受継請願書（下・98文化元年）	38
【10】吉郎右衛門御役代受継請願書（下・107文化一三年）	40
【11】吉郎右衛門御役代受継請願書（下・111文政五年）	40
【12】吉郎右衛門御役代増額受継請願書（下・113文政五年）	42
【13】吉郎右衛門御役代減額受継請願書（下・117天保七年）	43



【14】吉郎右衛門御役代減額受継請願書（下・120）天保一〇年）

．．． 44

【15】吉郎右衛門御役代減額受継請願書（下・185）嘉永六年）

．．． 45

【16】川渡御役代増欠調（下・189）（1）嘉永七年）

．．． 46

【17】出湯方御用留帳（上・41）嘉永六年）

．．． 48

### III 湯銭関係

【18】吉郎右衛門湯銭変更請願書（下・109）文化一四年）

．．． 56

【19】吉郎右衛門湯銭変更請願書（下・182）文化一四年）

．．． 57

【20】大口村鳴子村湯守共湯銭変更請願書（下・187）安政六年）

．．． 57

【21】大口村鳴子村湯守共湯銭変更請願書及達書（下・188）安

政六年）

．．． 60

### IV 御殿・仮屋普請関係

【22】御中奥様御入湯につき吉郎右衛門請願書（下・166）寛政

三年）

．．． 65

【23】仮屋普請につき御下知留（下・21）慶應三年内容は寛政三

年）

．．． 65

【24】奥筋御出馬につき補理等調（不明）（宮城県公文書館蔵）文

政五年）

．．． 75

【25】藩主居所の件吉郎右衛門申上（下・189）（2）慶應三年）

．．． 88

【26】御仮屋建方の件吉郎右衛門請願書（下・190）（1）慶應三

年）

．．． 89

『上巻』及び『下巻』分目録凡例

．．． 91

『上巻』目録

．．． 92

『下巻』分目録

．．． 113

## 凡 例

一、『東北文化資料叢書』は、東北大学大学院文学研究科東北文化研究室が、東北地方の文化と歴史の研究に資するための資料を逐次刊行するものであり、本書は同叢書の第二集に当たる。

二、本書は、陸奥国玉造郡大口村川渡温泉の藤島家に伝存する文書（藤島家文書と称する）を翻刻したものである。これまで、この文書の一部は、『川度温泉史 上巻 玉造郡大口村川度御湯守 藤嶋吉郎右衛門文書』（『上巻』と称す）として刊行されており、この他に同『下巻』（未刊・カード目録のみ作成）として収載される予定であったもの、さらには筆写され『宮城県史写本資料二八』として宮城県公文書館に所蔵されているもの等が同家の文書として存在する。本書では、『下巻』分の史料翻刻を中心としつつも、『上巻』収載史料の中で、途中の筆写が省略されているもの、或いは『下巻』分史料の不足部分を内容的に補足できるものもいくつか翻刻し、さらに『宮城県史写本資料二八』収載史料の一部も翻刻している。

三、解題においては、藤島家文書の史料性格や本書収載史料の概

要について説明した。本書の末尾には、翻刻していない史料も含めて『上巻』・『下巻』分の全体像を把握できるよう、目録を収載した。

四、史料表題の【 】は史料番号を表し、（ ）内には末尾収載の目録の番号等を記した。「上」は『上巻』を、「下」は同『下巻』分を表し、漢数字は末尾の目録の番号を表している。表題及び史料番号は、目録とは別に、本書をまとめるにあたって翻刻者（高橋）が付したものである。

五、解読文においては、読解に便利のように、適宜読点（・）を補った。

六、漢字の旧字体や異体、仮名の変体等については、原則としてこれを避け、今日通行の字体に改めた。例えば、「者」は「は」、「禮」は「礼」などとしている。ただし、助詞の「茂」、「江」、「而」や「老」、「廿」等の漢数字はそのままとした。

七、無苗字記載で苗字の判明するものなど、解読者の傍注はすべて括弧（ ）内に記している。

八、敬語の平出、欠字は原典のままとした。



九、虫食い、解読不能等の箇所は、字数を推算して□を挿入し、字数が詳らかでない箇所は「」をもつて示し、「(破損)」と注記した。

十、本資料叢書の解題執筆と史料の解読・翻刻・目録作成・校正作業は、東北大学大学院文学研究科博士後期課程歴史科学専攻・日本史専攻分野の高橋陽一が担当した。

## 川渡温泉史料 解題

高橋 陽一

### 一 藤島家文書及び藤島家について

本書で紹介するのは、仙台藩領の陸奥国玉造郡大口村（現在の宮城県大崎市）内にある川渡温泉<sup>かわたひ</sup>で、遅くとも近世前期から現在に至るまで温泉旅館を営んでいる藤島家に伝存する文書（藤島家文書）である。同家では、二〇〇四年六月から筆者（高橋）ら東北大学文学部日本史研究室の室員によって文書の調査が行われてきたが、御当主藤島孝雄氏の御教示や史料の残存形態などからこれ以前に少なくとも二度、文書の調査と整理が行われていることが判明した。

一度目は『宮城県史』編纂事業の中で実施されたもので、一部の史料が一九五五年に、『川渡温泉史 上 玉造郡大口村川渡御湯守藤嶋吉郎右衛門文書』（宮城県史編纂委員会編、以下『上巻』と称す）としてまとめられている（「A期」とする）。また、『上巻』に全文が載っていない御用留など一部の史料がほぼ同時期に筆写され、宮城県公文書館に『宮城県史写本資料二八』として所蔵されている。なお、『下巻』についても逐次編纂される予定であったが、担当者の死

去等により、未完のままとなった。

二度目は一九八三年頃のこと、劣化が進んだ文書に補修が施されると共に、『上巻』の収載分と『下巻』収載予定分の文書のカード目録などが作成されている（「B期」とする）。そして、今回の調査では、主に『上巻』・『下巻』収載分文書の中性紙整理封筒への移し替えと写真撮影を行った。同家の文書は、これら『上巻』・『宮城県史写本資料二八』・『下巻』分以外にも存在するが、現時点では翻刻、目録化は進んでいない。

『上巻』及び『下巻』分の史料性格について説明すると、まず『上巻』は、カード目録によると、枝番を含めた総点数二六二点のうち半分近くの一二六点が欠番となっている。これは、既にB期の時点でそれらの欠番が発生していたことによるもので、A期以降史料の劣化が進み、B期までの間に処分されたようである。なお、欠番とならなかった一三六点のうち、実際に写真撮影を行い、画像として現在目に行うことができるのは八五点である。目録は、『上巻』とカード目録の記載、さらに撮影分の画像をもとにして作成したが、原文書を確認できなかったものについてはやや特異な表記法を取ら



ざるを得なかった（目録凡例参照）。

『上巻』収載史料の中で、最も古い史料は寛文一三（一六七三）年から寛保三（一七四三）年までの御用留の一部（但し撮影不可）、最も新しい史料は明治一七（一八八四）年（撮影不可）であるが、収載されている史料の大半は一八世紀のものである。家系図は残っておらず、過去帳の写しや史料の記載から、歴代当主の名（表）と限られた家族構成は判明するが、詳細な家内構成は明らかにできない。川渡温泉では、一八世紀中に五度、湯守請負をめぐる争論が起こっているが、『上巻』は、内容的にこうした争論に関する史料が多く、当時

【表】 藤島家歴代当主（12代が現当主孝雄氏）

代	名前	生没年
1	張蔵	?～元禄16年
2	嘉左衛門	?～正徳2年
3	重助	?～享保16年
4	重助	?～宝暦4年
5	不明	?～明和2年
6	吉郎右衛門敏匡	明和4年～文化3年
7	吉郎右衛門慶明	享和1年～明治6年
8	吉郎右衛門兼明	文政8年～明治2年
9	吉郎右衛門義重	弘化4年～明治19年
10	吉郎右衛門武三郎	明治10年～昭和33年
11	嘉孝	明治31年～昭和62年

の温泉とその周囲で何が問題として顕在化していたのかをある程度知ることができる。

また、『下巻』分に関しては、目録化した文書の総点数二五六点のうち一三三点が欠番であり、残る一三三点の中で調査によって撮影することができたのは一一九点であった。欠番が生じた理由としては、『上巻』のケースと同様、目録カード作成以前に劣化の著しい文書が処分されたことが考えられる。史料の中で作成年代が最も古いものは宝暦一四（一七六四）年、新しいものは明治三〇年であり、一九世紀初頭から幕末にかけての史料が中心である。『上巻』収載文書の中心が一八世紀であったことからすると、『上巻』・『下巻』は川渡温泉の編年史としてまとめられることになっていたのであろう。

目録から史料の内容を概観してみると、藩に対して湯守の継続を申し出た願書類（二六六点）が多いことに気がつく。この他には、木賃・湯銭代の変更に關する文書（願書・達書など）や領主ら来訪の際の仮屋建設についての文書等があり、これらを中心として『下巻』が構成される予定であったことがわかる。『上巻』に紹介されている『下巻』の目次には、「御召夕栄枳栗毛一件」・「牛馬方壺巻」という

項目があるが、これらに該当する文書は殆ど発見できなかった。欠番文書の中に含まれていたのか、正確なところは定かでない。

藤島家がいつごろから川渡温泉で宿屋を営業していたのかは定かではないが、遅くとも史料の残存する一七世紀後半からは湯守として温泉の運営に当たっていたようである。湯守は、温泉の傍らで宿屋を営業し、温泉を管理して入湯客の利用の便を図ると同時に、彼らから「湯銭」（入湯料）を徴収してその一部を「御役代」（運上金）として藩に上納することを主な任務としていた。藤島家は、この湯守を近世期を通して請け負っていたようである。同家の持高は八九四文（仙台藩は貫高制を採用しており、一貫文（＝一〇〇文）は一〇石に相当する）、家内人数は、享保二二（一七三六）年時点で一八人であった。なお、一八世紀中、藤島家が大口村の村役人を務めていた形跡はないが、『下巻』分文書からは、文化二一（一八一四）年、慶応三、四（一八六七、八）年時点で組頭を務めていたことが判明する。

## 二 川渡温泉及び温泉史料の現状について

川渡温泉が属する大口村は、安永年間（一七七二～八二）の村明細帳である「安永風土記」によれば、田九七貫七三〇文、畑一八貫五八五文、人頭（本百姓）八五人、家数一一八などとなっており、全ての高が仙台藩大身給人の岩出山伊達家の知行地であった。村内の鍛冶谷沢宿は吉岡宿から岩出山宿、尿前関を経て出羽堺田へと通じる出羽街道（中山越出羽道）上の宿駅であったが、温泉自体は街道からやや離れた位置にあった。村内には川渡のほか、鷲ノ巣、赤湯、目ノ湯の温泉があり、鳴子、鬼首荒湯といった当時の仙台藩領内を代表する温泉ともそれほど遠くない位置関係にある。本書巻頭の写真1・2・3は川渡温泉及び大口村の絵図であり、明治期のものではあるが、温泉の様子や他の温泉との位置関係を確認できる。入湯客は、主に春先から秋にかけて多く来訪し、雪の降る冬はごく僅かであった。藤島家を始めとして、宿屋は基本的に木賃宿で、入湯客は自炊しながら一廻り（一週間）以上滞在することが通常であったとみられる。

ところで、今日国内旅行の目的地の定番となっている温泉は、江

戸時代においても庶民から高い関心を集めており、近世後期以降には温泉の見立番付「諸国温泉功能鑑」が度々出版されていた。それによると、東西の最上位である大関は草津と有馬で、仙台藩では鳴子の東前頭五枚目が筆頭であったが、川渡も東三段目右から六枚目にランクされている。川渡温泉は、当時から全国的にも名の知れた温泉であったのである。

ただし、こうした関心の高さに反して、現在の我々が近世の温泉について知りうる情報は、それほど多くないのが実状である。温泉の歴史は、観光地理学等で観光地への発展過程として述べられることが多いが、その際、観光地化の契機が近代以降に見出されるため、近世の温泉に関しては、大抵概説的に触れられる程度に留められてしまうのである。歴史学、特に近世史研究においては、具体的に史料を活用して温泉の実態を説明しようとする試みは、近年本格的に開始されたばかりである。

このような状況が生み出されたのは、そもそも前近代の温泉に対して興味関心の眼差しがそれほど向けられてこなかったこと、温泉に関する文献史料の発掘が遅れ、我々が目にし、分析する対象とな

る素材が限られていること等が背景にあるように思われる。温泉に関する単独の史料集としては、『上巻』の他に、渡邊慶一『赤倉温泉沿革史』（赤倉温泉組合、一九五五年）が古いものとしてあげられ、北條浩氏編著による『旧慣温泉権史料集』（宗文館書店、一九六三年）、『下呂温泉史料集』（日本温泉協会、一九六七年）、『城崎温泉史料集』（湯島財産区、一九六八年）などがまとまった成果としてあげられる。これら以外では、番付最上位の草津、有馬に関して、『温泉草津史料』第一巻（中沢温泉研究所、一九七五年）、風早恂編『有馬温泉史料』上・下巻（名著出版、一九八一・八八年）、東北地方では庄司吉之助監修『史料 常磐湯本温泉史』（常磐湯本温泉史料編纂会編、一九七九年）などが得られるが、有効に活用されているとは言い難い状況である。この他の中小の温泉についても個別の史料集や自治体史の中での紹介があるが、総じてみれば、史料の全体量は未だ不足している感は否めない。本書が、こうした素材の層を積み上げる僅かな一助にでもなれば幸いである。

### 三 本書所収史料の概要

本書は本来、既刊の『上巻』を受けて、未刊である『下巻』収載予定分の史料を網羅して完成させる予定であった。しかし、『下巻』分の文書は思いのほか保存状態が芳しくなく、部分部分を読み取れる史料は多いものの、全文を解説、復元し、史料集に収載できるものは少なかった。従って、『下巻』分と中心としつつも、巷間には流布していない宮城県公文書館蔵の史料や、『上巻』史料の中で、目録にはあるが『上巻』書中での筆写は省略されているもの、或いは『下巻』分史料の不足を内容的に補足できるものも収集して本書を構成することにした（原文書に照らして筆写に誤りがある場合は、適宜訂正している）。以下、項目ごとに収載史料について若干の説明を行っておきたい。

「Ⅰ 支配関係」では、温泉（特に湯守）と藩側の関係や温泉に対する藩側の政策決定の過程が明らかになる史料を取り上げた。仙台藩領内の温泉は寛政一〇（一七九八）年より、それまでの郡奉行―代官に加え、金山<sup>かなやま</sup>方の支配を受けることとなった（温泉の「金山付」）。藩側が領内の温泉に本格的に介入しようとする動きを見せるように

なったのは、金・銀・銅山などの鉱山を管轄するこの金山方に温泉の支配の一端を担わせるようになってからのことである。【1】は、寛政一二年に湯守吉郎右衛門が提出した請状であるが、温泉の運営に関して様々な項目が設定されており、また文書が大肝入と金山方役人下代に提出されていることがわかる。『下巻』分にも同様の書式の請状が存在する（目録番号一〇六）が、加筆・修正された箇所が多くあり、多少の破損もあることから『上巻』の史料を翻刻した。

【2】は年未詳であるが、御役代の額からみて温泉が新たに金山方の支配に入る寛政一〇年の史料であると思われる。御役代年額二六貫文での湯守継続を請願する吉郎右衛門に対する藩側の審議過程の一端が窺い知れる史料で、金山方のほか、郡奉行木村孝七や出入司なども吟味に加わっていることがわかる。【3】の「出湯方御用留帳」は、湯守の集団請願の動きや吉郎右衛門の「湯場御取締制道役」への任命など、幕末期にかけての温泉と藩側の動きが判明する史料である。この御用留うち御役代に関するものは、「Ⅱ 御役代関係」の項目に分類して収載した。なお、本史料は、『上巻』のほうにはごく一部しか紹介されておらず、調査での原文書の撮影も叶わなかった



が、筆写されたものが宮城県公文書館に『宮城県史写本資料一八』として所蔵されている。

「Ⅱ 御役代関係」には、主に湯守側が藩に対して御役代額の変更を求める際の請願書を収載している。【4】・【5】は、岩出山町の者が川渡温泉の御役代を請け負いたいと藩に願い出た請願書と、それに反対し、岩出山側と同条件での請負を申し出た湯守吉郎右衛門の請願書である(結局は吉郎右衛門の請負継続が認められた)。岩出山側の請願書は大肝入・代官宛にも出されており、『上巻』で筆写されているので、本書では金山方宛のものを翻刻した。「金山付」以降、御役代の額は数年おきに吟味されることになっており、湯守はその度に請負継続を請願しなければならなかった。他の請願書をみれば明らかなように、湯守としては少しでも御役代を減額したいというのが本音であり、【13】の下書のように、御役代額をいくらにして請願するかを試行錯誤することもあったようである。御役代額は、【16】によると岩出山側による請負請願以来、年額九〇貫文であつたとされるが、実際には微妙に変動があつたとも推測され、一〇〇貫文を越える時期もあれば【11】・【12】、凶作と来客不足に

より減額されていた時期もあつた(【13】・【14】)可能性がある。

「Ⅲ 湯銭関係」では、吉郎右衛門や他の温泉の湯守が木賃代及び入湯料である湯銭の変更を請願した史料を紹介している。【18】・【19】は同時期の請願書であるが、【19】のほうは下書で、「右之通二願書指上候而は如何力可仕哉」などと文面について(恐らくは村役人あたりに)伺を立てており、やはり請願書の内容にはかなりの気配りがなされていたようである。また、近世後期以降、木賃・湯銭の額は領内の温泉で統一されており、【20】・【21】のような湯守共の連名による藩への請願行動は、当該期にみられる特有の事例で大変興味深い。こちらも【20】・【21】ともにほぼ同時期であるが、【21】のほうは藩による吟味過程も若干明らかにできることから収載した。

「Ⅳ 御殿・仮屋普請関係」に収載したのは、主に、藩主や知行主の岩出山伊達家の者が入湯に訪れた際の御殿や仮屋の普請方法に関する藩と吉郎右衛門の交渉の様子などがわかる史料である。【22】は、湯小屋等の普請に際して付近からの資材の提供を願い出たものであり、【23】は、寛政三年の岩出山伊達家からの指図による御仮

屋建設に対して、藩側から差し止めるよう命令があり、再度の吟味の結果、特別に建設が認められた顛末を後にまとめたものである。

【24】は、先の御用留と同じく宮城県公文書館に所蔵されていたもので、『下巻』に収載される予定であった史料とも推察されるが定かではない。前藩主斉義の奥筋御出馬に際し、御殿の普請方法に関して、以前の藩主来訪時の例を持ち出して、畳、襖など室内の細部は勿論、厩、風呂場等に至るまで事細かな指示が出されている。また

【25】は、郡奉行が来訪した折「御上座」ではなく「御次之間」に宿泊させた理由が述べられており、【26】は、御仮屋普請の経緯を誤認していた吉郎右衛門が、事実を改めて申し上げたものである。

以上が、本書に収載した史料の概略である。請願書類などから、当時の温泉で起こっていた問題や藩側との関係、他の温泉との横のつながりがある程度明らかにすることはできようが、温泉の内部他の宿屋や店の軒数、商いの状況等や入湯客の状況(具体的な宿泊者数や出身地、温泉での過ごし方等)が判明する史料に関しては、紹介できるほどまとまったものは発見できていない。こうした史料が発掘されれば、温泉の歴史をさらに豊かに描き出すことが可能になる

であろう。なお、本書をまとめるにあたっては、日本史研究室の今泉隆雄・大藤修の両先生にご助言をいただいた。また調査の際は、日本史研究室の院生の皆様にご協力いただき、宮城県公文書館の職員の方々には史料の閲覧・利用の便を図っていただいた。原文書の撮影・使用に関しては、御当主藤島孝雄様をはじめ、旅館の皆様に格別の御理解と御配慮を賜っている。末尾ながら記して御礼申し上げます。

#### 《参考文献》(本文中で紹介したものを除く)

山本英二「日本近世温泉史研究の現状と課題―観光と地域の視点から―」『民衆史研究』六七、二〇〇四年

高橋陽一「近世の温泉史料にみる争論―史料紹介―陸奥国玉造郡大口村・藤島家文書(上)」『東北文化研究室紀要』四六、二〇〇五年

同「近世後期の川渡温泉―史料紹介―陸奥国玉造郡大口村・藤島家文書(下)」『東北文化研究室紀要』四七、二〇〇六年

川渡温泉史料 翻刻

I 支配関係

【1】吉郎右衛門請狀(上・92)

奉指上御請狀一札之事

玉造郡大口村川度

一出湯壺ヶ所

此御運上丸代九拾貫文

但寛政拾貳年より末五ヶ年御請負願之通御下知被 仰渡難有

奉承知候、右御運上年々御郡方江上納可仕候御事

一右御運上代当暮無滯上納可仕候、若拙者儀難渋仕候ハ、受合人弁出を以無滯訖度上納可仕候御事

一右湯場普請中諸働人召抱候而茂給錢無滯相渡可申候、若拙者儀指滯申候ハ、請合人弁出を以訖度勘定引渡可申候御事

御上様御苦勞ニ掛上申間敷候、惣而諸訴ヶ間敷儀堅申上間敷候御事

一右湯場御請負中御国ハ不及申御他領之者等迄入湯仕候ハ、諸式役

屋物等湯治人不自由不仕候様禿渡可申候段奉承知候御事

一右湯場普請中金銀銅鉛錫并御金山付拾五品物ニ掘当申候ハ、早速御注進可申上候条、御山例之内直々拙者儀御請負山師ニ被成下段奉承知候御事

一右湯場取立中山用木之分自分才覺を以相働可申候、御百姓自分林たりとも御留木之分堅伐方申間敷候御事

一右湯場取立中御上御尋之者ハ不及申難敷隣山ニ而品有之者堅召抱申間敷候御事

一右湯場普請中拙者ハ不及申諸働人共ニ御役人様中江堅慮外申上間敷候、万一慮外申上候ハ、御山法ニ被相行候共異儀申間敷候、惣而一統之御山例ハ不及申御国例共ニ相守可申候御事

一右湯場取立御請負中盛湯ニ茂罷成申候ハ、御年限中ニ御座候共御役増被仰渡候而茂異儀申上間敷候御事

一右湯場御請負中御金山御本々様御在山中ニ候ハ、御卯時老人指上可申候、御金山下代衆御在山中卯時老人宛指出可申候、御金山廻り衆御詰合御老人ニ而茂御両人ニ而茂御詰合之上ハ卯時老人宛指出可申候、勿論御役方様御自分御賄之由膳碗鍋并炭薪木燈油惣而

輕キ賄道具御用立上可申候御事

右拾ヶ條之通訖度相守御請負中少シ茂猥ヶ間敷儀不仕相働可申候、  
依而御受状如是ニ御座候、以上

玉造郡大口村御百姓川度出湯

御受負人御湯守

吉郎右衛門(印)

寛政拾貳年四月

同 同 受合人

養助(印)

右之通承届如此申上候、以上

大口村肝入

兵吉(印)

同年同月

大肝煎

樋渡藤吉殿

御金山下代

和泉林左衛門殿

同 同

佐竹平左衛門殿

(付紙①)

「右之通御受状申出候間指上申候、御運上代之義ハ当暮より大肝入  
手前ニ而取立上納可仕候、以上

御金山下代

佐竹平左衛門

同年同月

同

和泉林左衛門

大肝入

樋渡藤吉

伊右衛門様

軍左衛門様

丈助様

長八郎様」



(付紙②・肝入兵吉から大肝入樋渡藤吉らへの文言か)

「右之通御受状申出候間指上申候、御首尾被成下度奉存候、以上」

(付紙③・請状八番目の条文に類似)

「右湯場普請中拙者は不及申諸働人共ニ御役人様中江堅慮外申上間敷候、万一慮外申上候ハ、御山法ニ被相行候共異義申上間敷候、惣而一統之御山例ハ不及申御国例共ニ相守可申候、万一不用事御山例相破候ハ、是又御山法之趣被相行候共異義申上間敷候御事」

【2】御役代の件達書(上・150)

玉造郡川度湯之儀当年計式拾六ヅ文運上相済候間其心得首尾有之、  
来年之儀ハ猶入湯人等吟味有之相増候様首尾可有之候、以上

(鈴木)  
鈴木 軍左衛門

十月十八日

御金山下代

和泉林左衛門殿

同

佐竹平左衛門殿

尚以此卷巻首尾合已後指戻候様可有之候、以上

左之通追々共被御申聞候に付末右之通相達候处、如御付札之新左衛門殿被仰聞候間、当年之儀ハ丸代式拾六ヅ文之御役代ヲ以受継被成下旨首尾可有之候、来年より之儀ハ入湯人高多少ニも寄御役増之儀は不令吟味候得は相当不致事ニ候間、猶此段ハ出入司衆御紙面之趣江も取合折入吟味別而可被御申聞候、以上

木村孝七

拝

十月十八日

鈴木軍左衛門殿

齊藤丈助殿

玉造郡川度出湯御役銭当ヶ年式拾六ヅ文ヲ以湯守引請願申出候ニ  
付御金山下代申聞候間相達候处、同所ハ諸分領一ノ湯場ニて入湯人

不少之儀ハ各様御初取扱候役ニハ猶相心得可居義場所対し候而ハ  
繞々之御役代ニ有之、荒湯御役代ハ四拾ベ文之由右へ引競候得は不  
相応之事ニ候間別而吟味不仕候而ハ実事へ行届兼可申候条、今一応  
吟味仕相応之御役代罷成候様広吟味可被相達之由出入司衆より被仰  
渡候之条、折入吟味仕相達候被仰下承知仕候、仍而御金山下代共へ  
申渡候而押返吟味も為仕候处、当年之儀ハ全躰湯治人不足仕最初拾  
三ベ文相増候節も押而吟味仕、前々御吟味へ足合式拾六ベ文運上相  
納可申候由相達候事ニ御座候而、其後秋中入湯人も□右之通ニ可有  
御座と見当仕候处、存知之外不足仕七月中よ八月始迄ハ入湯人も多  
ク御座候处、八月半頃より不足罷成九月至り候得は至而不足仕候而  
拙者共廻村之節駅場所ニて承候处相違も無之事ニ相聞得申候条、当  
老ヶ年計り式拾六ベ文ヲ以御請繼仕候様仕度候、荒湯之儀ハ四拾ベ  
文之御役代ニて右へ引合候而ハ盛不盛へも相当不仕儀ハ至極無御余  
儀御事ニ奉存候得共、乍再応当年之儀ハ入湯人不足ニて幾応吟味仕  
候仕候而も拾三ベ文之増御役代ニ被成下度旨申出候条、前々御役代  
へ取合式拾六ベ文当老ヶ年ハ被召上候様被成下度候、来年之儀ハ別  
而御吟味相成御役増ニ相成候様当冬中より来春迄之内盛不盛聊と

相様申出候様御金山下代共へ首尾可仕候条、右之品々御取合御吟味  
被成下度老巻指添相達申候、以上

鈴木軍左衛門

十月

斎藤丈助

右之通御金山下方本ベ申聞候間猶又直々も承届吟味仕候处、於本ベ  
方ニも色々吟味相尽候得共御役代相増可申様無之品々申聞全躰湯元  
之儀ハ入湯人高へ応吟味も不仕不罷成事ニ御座候处、当年之儀ハ入  
湯人も不足之事ニ相聞得本ベ共申聞候趣無余儀相見得候間、当年之  
儀ハ先書申達候通丸銭式拾六ベ之御役代ヲ以受継被仰渡候方と吟味  
仕候、明年より之儀ハ別而吟味仕御役増之儀ハ猶本ベ共へも申渡シ  
入湯人高之儀も折入吟味為仕候様首尾可仕候条被御取合御吟味罷成  
無異儀候ハ、早速御下知被成下度老巻差添相達申候、以上

十月十二日

木村孝七

御付札

令承知委細先書被渡候通場所ニ対し候而ハ不都合之御役少ニ有之候

得共、彼是と吟味之内最はや当年も間無之様相成候間、先以当年之儀ハ吟味之通無異儀候、其心得首尾有之来年より之儀ハ年内中吟味有之、若又御役錢難相増都合ニ候ハ、如何様ニ令吟味候ハ、実事江令相当候形ニ可相成との儀別而吟味有之可被御申聞候事

十月十四日

(大内)  
大 新左衛門

木村孝七殿

小崎甚兵衛殿

木村孝七様

(脇坂)  
脇 治平

(大内)  
大 新左衛門

玉造郡川度出湯御役錢壹ヶ年丸錢貳拾ハヅ文ヲ以湯守引受之願指出別紙之通被御申聞候、同所之儀ハ御領内一二之湯治場ニて入湯人も不少之儀ハ段々唱ニも承知可有之取扱候役々ハ猶可心得居義場所ニ対し候而ハ続之御役錢有之、荒湯御役錢四拾ハヅ文之由ニ候得ハ是等へ引合候而も不相応之儀別而吟味無之候ハ、実事江行届兼候方と存候条、今一応吟味有之相応之御役錢ニ相成候様広クも吟味有之可被

御申聞候、去年中申渡置候儀ニ有之甚延引有之此上延引ハ難相成事ニ候条、其御心得指急可被御申聞候、以上

六月廿四日

尚以全躰是迄不相応之御役錢出劣り有之取扱候役々油断之方と存候、折入吟味有之一躰ニて相応之御役錢ニ相成候様吟味可被御申聞候、以上

御付札

如是出入司衆被仰聞候間委曲御紙面之趣ヲ以急速吟味可被御申聞候事

木村孝七

六月廿五日

斎藤丈助殿

御分領中ニて往古より取立之出湯拾七ヶ所自今已後入湯人盛不盛ニ随ひ御運上増御吟味仕、壹ヶ年とか貳三ヶ年ニても湯守望次第請継願為指出吟味可申達旨、尤右拾七ヶ所之内鎌崎并川度両湯元之儀ハ

御領内随一之盛湯ニ有之候間別段折入吟味仕御連上仕格別為相増可

門脇新右衛門

申趣共委曲被仰渡承知仕、拙者共折合一同段々相廻り御連上増方吟味仕受繼願為指出候之處、右之内川度湯元之儀ハ村肝入并御金山廻り太左衛門共立合之上吟味仕候處、壹ヶ年入湯之もの貳千人くらひ其外無之由右に付過分相増可申様無御座候得共、御時節柄品々被仰含候間是迄之御役錢丸代拾三<sup>ノ</sup>文江同錢拾三<sup>ノ</sup>文相増取合貳拾六<sup>ノ</sup>文之御連上ヲ以御受繼仕度旨別紙之通湯守吉郎右衛門儀願申出候間、指出候条御吟味御首尾罷成候様仕度拙者共手前ニて折入吟味仕候へ共、此上相増候へハ入湯人貳千人位宛之見詰ニ有之出錢不足ニて相痛候躰ニて相増可申様無之品々及再応申出為相増可申様無御座候處、荒湯元之儀ハ此度も丸代四拾<sup>ノ</sup>文ヲ以請繼願申出、仍而ハ川度之御連上代荒湯へも相応不仕躰ニ相見得、拙者共手前ニて押極メ可申達様無之候間彼是被御取合御吟味御首尾罷成候様仕度別紙願書迄通指添右之段相達申候、以上

御金山下代

六月二日

和泉林左衛門

同

尚以鎌崎湯元之儀ハ今以相廻不申奥筋廻村等仕廻此節登仙仕候間、彼は相廻吟味仕跡より可申達候、且右之外拾五ヶ所之儀ハ願書取揃一紙ヲ以指出候様可仕候、此段共相達置申候、以上

右之通御金山下代申聞候間吟味仕候處、貳千人ほと外入湯治人無之品々肝入始申出候儀ニ相見得、此上押而吟味可為仕様も無御座候間当年連上之儀ハ貳拾六<sup>ノ</sup>文被召上来年連上之儀ハ当秋入湯人高等も見聞為仕、右へ引当吟味仕候ハ、自ら御連上も相増可申出事と吟味仕候、湯守共ハ只入湯人無之と計申出御吟味可被成置様も有之間敷、扱又入湯人高睨と見詰も無之儀ヲ口連上致り相増申出候處、押而吟味可仕様も無之、品々御金山下代共口上ニても申受無余儀訳ニ奉存候間、当秋入湯人高見聞為仕<sup>(破損)</sup>御連上之儀ハ別而相達候様可仕候、無御異儀候ハ、当壹ヶ年貳拾六<sup>ノ</sup>文ヲ以御連上被召上候様仕度候、猶御取合御吟味罷成候様仕度別紙面共二指添相達申候、以上

六月

斎藤文助



右之通御金山本へ申聞候間吟味仕候処、吟味之趣無余儀相見得候間  
先以当年之儀ハ丸銭式拾六へ文も御運上被召上、来年之儀ハ当秋入  
湯人高へも取合吟味為仕候様可仕候、前書之趣御取合御吟味罷成り  
無異儀候ハ、早速御下知被成下度別紙指添相達申候、以上

六月廿日

木村孝七

外湯守吉郎右衛門願書有り

【3】出湯方御用留帳（上・41）

（表紙）

「 嘉永六丑年

川渡御湯守

出湯方御用留帳

十二月改

吉郎右衛門扣」

（中略）

南御郡温泉場国分作並より刈田郡小原村温泉迄七ヶ所向三拾ヶ年迄  
ヶ年金式拾両ツ、別紙調書之通り為家作手入等之備金仕度儀ニ付湯

守申出御金山下代伊藤宗五郎儀別紙未書之通り吟味申出候間吟味仕  
候処、委細ハ湯守共申出候通り近年湯治人不足往々之事勘弁仕候へ  
ハ指当家作手入等ニ至迄懸増末行届之儀不尋常之儀節合勘弁申出之  
儀ハ尤之義、壹ヶ年ニ金式拾両ツ、と申せハ三拾ヶ年にて元金計り  
も六百両右江利足相加江候は不少之儀手入所ニ無之追々年積たまり

広大之義、左候得は是迄と違家作手入計ニ無之由湯治人保養ニ相成  
候之様撮当振りも在之、右行届候得は盛湯ニも振趣旁ニ両金之吟味  
ニ而ヶ様まで押付候儀ハ係り下代速ニ心懸候儀ハ一段之義ニ候条倍  
合締之義尚又吟味仕候処、半高は御金山方へ為相納倍合之義ハ夫々  
吟味首尾可仕候、湯守共半高倍合之義ハ年番相立倍合之首尾可仕候、  
右取締之義ハ春秋廻村之砌係り主立御役人見届係り本へ引合勘定見  
届仕候へハ取締も相立可申と吟味仕候条、右之趣御承知罷成御金山  
方可係り両替所御役人連名被仰渡候様仕度指添此段相達申候、已上

子ノ四月

曾根惣太郎

奈良坂喜右衛門

右之通り御金山方係両替所本へ申聞候所、此節柄自分備金新倍合之  
上近々温泉場家作入料等ニ仕度由之義ハ至極宜敷勘弁ニ口之得候間、

右備金取扱振之儀右役等吟味之通りを以為取扱年々願之通り備金為致候方と致吟味候処、一応御承知之上首尾仕此段相達申候、已上

子ノ四月

三好監物

同 八日

土佐方

同 十日

監物方

本々衆

御金山方

主立役人衆

南御郡温泉国分作並より刈田小原温泉迄七ヶ所別紙金高割合之通り  
当子ノ年より向三拾ヶ年壹ヶ年金貳拾兩ツ、備金仕、温泉場家作等  
諸手入は勿論万二不時入用之節拝借被成下候様仕度方より右指備金  
上納振之義は七月半高年暮半金御金山方江上納仕候間倍金被<sup>(成下)</sup>成  
候様御吟味被<sup>(成下)</sup>成度候、右備金半高は御利足付ヲ以拙者共年番相  
立置候間、御利足相加江拝借被成下度候様御吟味被成下度此段如斯  
奉願上候、已上

文久四年二月

上下

要之助

遠刈田

勘十郎

同永

源兵衛

小原同

太郎兵衛

作並

奥山伊三郎

同永

喜藏

青根

仁右衛門

鎌先永

市兵衛

秋保永

寿右衛門

伊藤宗五郎殿

覺

一金貳両貳歩三朱也

寿右衛門

一金四両也

喜藏

一金壹両貳歩三朱

奥山伊三郎

一金壹両三朱

要之助

一金貳両三朱也

仁右衛門

一金貳両貳歩三朱也

源兵衛

一金壹両三朱也

勘十郎

一金貳両三朱也

市兵衛

一金貳両三朱也

太郎兵衛

〆金貳拾両也

右之通御座候、已上

文久四年二月

川渡御湯守

一金貳両也

吉郎右衛門

吉郎右衛門名子

一金貳両也

利左衛門

合四両也

右之通り甲子ノ年より末三拾ヶ年迄年四両ツ、相備右之内半高八月中十五品係り御金山下代衆へ相納壹割貳歩之利足付ヲ以倂合被成下、残半高ハ拙者手前ニテ壹割貳歩之利足相加へ倂合仕度申上候

此度御吟味之上温泉々々江掟書板札ニ致鋪地入口相懸置候事ニ別紙之通從御奉行衆御下知順々被仰渡候条、右ニ付而ハ湯守共為相登令首尾候方は令吟味候条為相登申談候間、其心得首尾可有之候、已上

元治元甲子年十一月十三日

(曾根)  
曾 惣太郎

(奈良坂)  
奈 喜右衛門

御金山下代十五品係り

伊藤宗五郎殿

笠原本治郎殿

御別紙之通被仰渡候間早速登仙其段可申上候、已上

元治元甲子歲十一月十四日

御金山下代

筭原本治郎

大口村

湯守衆中

鳴子村

湯守衆中

尚以登仙候ハ、同役伊藤宗五郎方へ其段可申出候事

右ニ付此度仙表登り之儀ニ付諸入料割合左ニ

御本々

一金四切也

曾根惣太郎様

御主立

一同式切也

奈良坂喜右衛門様

御役人

一同式切也

笹原政之助様

下中

一金式切也

伊藤宗五郎様

一拾切也

一金拾切也 大口村鳴子村より式人御城下行諸入料見詰

式口合金式拾切也

内

一拾切也

大口村より

一拾切也

鳴子村より

右ハ御湯守中并シ割合吟味仕候事

寄合所 赤湯

子

十一月十九日

右ニ老人ニ付代式々式百人拾六文

右登仙人 大口村ニ而 吉郎右衛門

鳴子村ニ而 善十郎

掟書被仰渡写シ

一火の用心之事 一博奕并かけの勝負停止之事

一喧嘩口論停止之事



一 異風異牀疑敷者等堅入湯停止之事

一 温泉滞在中御尋者ハ勿論惣而御法度急度相守へき事

一 御金山并隣湯等二品有之もの堅召抱間敷事

右條々堅相守へきもの也

月 日 御金山方

大口村

赤湯御湯守温泉再興方ニ而御吟味被成下候ヶ条追々違乱候無御

座迄ツ書ヲ以御請願申上候事

一家作振之事

此義湯壺相潰候ニ付テ家作壺牀ニ石造ヲ替不分候得共湯口之通別紙絵図面之通り御吟味被成下候処、右御割合之通拙者共三人并家内親類組合共ニ違道申候者無御座候、若心得違之内右土地割合之義ニ付追々彼是ト申者御座候ハ、御湯守相除キ候共別義申上間敷候

一 温泉再興中

湯治人取扱之事

此義入湯ニ罷越候者御座候ハ、何分叮嚀ニ取扱庵末等決而仕間敷

候、只今入宿有之湯治人は格別候得共初而余候者ハ相互ニ宿引不

仕様此末詰度相守可申、萬一心得違之義家内之者共相出宿引間敷

義仕候ハ、如何ニ（様「脱カ」）曲事ニも可被仰付事

附り宿引且は指口等仕候者ハ過料五貫文ツ、赤湯壺等手入方備

代可仕事

一 御湯守急度交り厚ク情合之事

此義何事ニよらず御湯守仲間老事仕共ニ助合何か吟味諸口事ニ

付三人之内式人老事仕候ハ、夫江相任セ和合仕吟味之上彼是申取

噪御用多等申上間敷事

右三ヶ條之通詰度相守此末再興方等之儀ニ付拙者共仲間噪合等間敷候、何々別紙絵図面之追々（通「欠カ」）違道無御座相添拙者共連判ヲ以如此申上候間右之趣御順々被仰上候様被成下候様此段共申上候、已上

大口村赤湯

御湯守

勘 七

同 同

元治貳年

万五郎

四月

同 同

平 六

川渡御湯守

主立 吉郎右衛門

同 組頭

新 助

同 同

兵右衛門

肝入

利右衛門殿

玉造郡大口村赤湯再興仕度模様左ニ申上候御事

同郡赤湯温泉去年八月中両度山崩ニ而温泉場并湯治人指置長屋共ニ

築□即死怪<sup>(我カ)</sup>家人相出御檢使御取都罷成候通ニ御座候処、右温泉

之儀は年増開立盛湯ニも罷成候、其俣打捨置候テも甚氣之毒仕候間

去冬中より段々崩落候岩出等取払不浄場処引去り温泉湧口より埋樋

ヲ以南ノ方へ長拾七間之処引湯仕候、湯神堂御坂下湯壺相据試申候

処湯性元通り相違無之湯ノ加減亦合敷湯小家迄出来仕候処、湯壺相

□候ニ而は御殿ヲ始御湯守共居宅并長家共何レも引隔湯より通り無

然皆様造替不申難成候処、此度之湯壺之近所之第壺ハ勘七并平六地

形計ニ而は万五郎土地無御座壺人は不浄場ニ而迷惑相出候ニ付、勘

七平六方より土地替為渡三人共格別増劣り無之様別紙絵図面之通割

合仕候間、早速古家取移ヲ始新家作等江取付候様吟味仕居候得共、

御湯守共何も難渋其上家作代ニ仕候諸木所持不仕持用吟味心配中ニ

御座候間、此度拙者共連名ヲ以如斯申上候、已上

大口村赤湯御湯守

勘 七

元治元年

同 同

四月

万五郎

同 同

平 六

仮組頭

新 助

同 同 候事

久左衛門 大肝入

同 肝入 遊佐甚之丞

利右衛門 五月十日

国十郎左衛門様 肝入

利右衛門殿

玉造郡大口村

御百姓川渡湯守

(ママ) 牛ノ 御金山御備金

右之者同村湯守主立被仰渡候様被成下度奉存候、遊民躰之者入込候  
制道撮当振始都而之義湯守仲間江打合吟味仕候ハ、御元々相立可然

五月十九日

奉存候間、無異義候ハ、御聞判被渡下度此段申上候、以上

覚

玉造大肝入

川渡御湯守

遊佐甚之丞

一金貳両也

吉郎右衛門

元治貳年

同 同

五月

一同貳両也

利左衛門

源右衛門様

赤湯 同

如斯御聞判出候間湯場不取々無之様吟味可在之湯守共一統江茂可申

一同壹両壹歩

勘七

25

玉造郡大口村御百姓川渡湯守

御金山下代

右之者同村湯守主立被仰渡候様被成下度奉存候、遊民躰之者入込候  
撮当振を始都而之義湯守仲間江打合吟味仕候ハ、取被相立可然奉存  
候間、無異儀候ハ、御聞判被渡下度此段申上候、以上

四月二日

笠原本治郎

大口村

湯守中

鳴子村

玉造郡大肝入

元治貳年五月

遊佐甚之丞

湯守中

源右衛門様

如斯御聞判相出候間湯場不取被無之様吟味可有之湯守共一統江茂可  
申渡候事

大肝入

中新田泊り今日は賀美郡切込瀬戸山江着致候、然ルニ温泉木賃代被  
増下義申達候所不及吟味旨被仰渡候所、右ニ付温泉守等之勘弁茂可  
有之候間玉造口等之者早速右瀬戸山江罷出候様首尾罷成度候、松本  
正吉茂参り候様とも御首尾罷成度候

五月十日

遊佐甚之丞

右之通之手紙本治郎様方より御廻し被下候

大口村肝入

利右衛門殿

寅ノ四月二日御廻文扣

御別紙之通被仰渡候間各其心得早速罷出候様可有之此段申渡候、已

上

間、南御郡温泉より差分候者之内人并北方兩人一二の迫より兩人  
ツ、罷登候様首尾可有之如斯申渡候、已上

五月廿六日

(曾根)  
曾 惣太郎

御金山下代主立

(奈良坂)  
奈 喜右衛門

伊藤宗五郎殿

同

笠原本治郎殿

尚以磐井郡より茂壺人罷登候様是又首尾可有之候、已上

御別紙之通被仰渡候間早速登其段可申上候、已上

御金山下代

六月二日

笠原本治郎

大口村

湯守中

尚以我等登仙途中行違駄々相戻り来り

鳴子村

直々首尾致候、尚指分候者之内一郡より

湯守中

両人ツゝも相登可申御別紙共宿継御判紙

壺迫

登仙之者持参可被致候

湯守中

湯守中

右之通笠原本治郎様方より之廻文写シ

五月四日昼九ツ半受取

閏ノ

八月廿七日到来

写

別紙之通同役宗五郎より申来候間其心得可有之、尚登仙方之儀茂仲

間急速可有之此段申渡候、以上

御金山下代

八月廿六日

笠原本治郎

大口村湯守中

鳴子村湯守中

尚以壺刻茂不相置相迫可申留より別紙可指戻候事

御分領中在々湯治場湯銭御直段揚之儀相達居候所 御藏方御吟味之

通御直段揚被成下旨相済候間此段申渡候、以上

八月廿四日

(奈良坂)  
奈 喜右衛門  
(曾根)  
曾 惣太郎

伊藤宗五郎殿



笠原本治郎殿

如斯被仰渡候間湯錢木賃代取合百二拾文ツ、来ル十八日より受取候様首尾可被成旨仰談候、右ニ付被仰渡御用の儀有之候条九月二日迄ニ湯守共之内可然者御吟味相成可被相登旨首尾致候様被仰渡候間、右之趣ヲ以御吟味御首尾相成度如此申達候、以上

笠原本治郎

八月廿四日

尚以寒湯并湯の倉湯守共江茂各様より大急ヲ以御都合被下度候、已上

大口村ニ而川渡湯守

吉郎右衛門殿

一慶応四辰年正月金壹切ニ付代壹ハ八百文、小手形ハ金壹切ニ付拾六枚、同年四月金壹切ニ付代式ハ四百文ニ仰被出候事  
一木賃代壹人壹夜代百貳拾文ツ、請取居候処、百廿文ニ而ハ莫大之損金ニ相成故右百廿文江五割増相掛百八拾文ニ御願上御下知茂無御座候得共、下代衆より指図ヲ以八月より百八十文ツ、受取居候

所 九月十六日より壹人壹夜限壹両ツ、請取候様被仰渡壹人より代百六拾文ツ、請取申候、已上

Ⅱ 御役代関係

【4】岩出山衆温泉請負請願書（上・174）

（表紙）

「寛政拾壹年十二月廿二日

岩出山之者共願書被相渡写之事

但シ肝入方へ壹通此方様へ壹通利左衛門方へ壹通四冊之内」

玉造郡大口村之内川度温泉同郡岩出山本郷五ヶ町江増御運上ヲ

以湯守御受負ニ被仰渡候様被成下度乍恐奉願候御事

一 丸代九拾貫文 川度湯御役錢

内

一 丸代貳拾六貫文

但シ、右ハ湯守吉郎右衛門江是迄被相任御役錢

一 丸代六拾四貫文 増御役代

但シ、右ハ此度新ニ増御役錢ヲ以岩出山五ヶ町江御受負被  
仰渡候様被成下度分

右川度湯元年中湯治人高大図九千人程と見詰、老廻りと申候而、  
日数七日之湯錢老人手前より丸代貳拾七文宛ヲ以右九千人より出  
候湯錢貳百四拾三貫文ニ御座候處、右之内御運上代九拾貫文下宮  
町江丸代三拾貫文、鍛冶谷沢町江丸代三拾貫文、両駄馬代手当合  
力ニ仕度、右三口取合百五拾貫文、指引殘而九拾三貫文ハ湯小屋  
諸普請并ニ同所ニ詰合湯錢等取立候者共江諸手当等ニ見詰如斯  
右之通増御運上ヲ以岩出山本郷五ヶ町江來申ノ正月より向五ヶ年湯  
守御請負被仰渡候様被成下度奉願候、段々承知仕候處、柴田郡前川  
村青根湯元之儀茂前川村為潤助之御村方より願申上御村受ニ罷成、  
是迄之湯守等ハ湯治人宿仕木賃等所務仕相不痛相続仕候事ニ相聞得  
候間、右青根湯元同様之御吟味ヲ以川度湯守吉郎右衛門等江茂湯治  
人宿為仕木賃所務為仕候様被成下度奉存候、左候得ハ右吉郎右衛門  
等別而迷惑之筋も相見得不申、且亦右川度湯元之儀ハ天明三年凶作  
後年増湯治人相倍至極之盛湯ニ罷成候處、岩出山町下宮町鍛冶谷沢  
町三ヶ駅ハ右凶作以來御伝馬仕者人頭相減、就中岩出山町ハ五拾人

已上死亡退転罷成、尤同町之内下町と申所ハ兼而御見聞も罷成候通  
数拾人死亡退転之跡地是迄代御百姓望人迎も無之未明地ニ罷成居候  
處、余ニ始末手段も相及兼無抛残り人頭計ニ而御伝馬諸郡役相勤罷  
有候處、前書ニ茂相見得候通先年と違川度湯元之儀ハ近年格別之盛  
湯ニ罷成、湯治之御諸士様方并諸家中様方駄賃帳ヲ以御通行之人馬  
年中ニハ千足以上相出、殊ニ不時之御宿役ニ而土貢迷惑ニ罷有申候、  
尤困窮御百姓共馬等所持不仕物ハ自分相對ヲ以相雇申儀ニ御座候處、  
畢竟馬数不足之方より相對雇之駄賃代等格別高直ニ罷成、御定駄賃  
代江過分之足代ヲ以相雇申御儀ニ付甚相痛、被左ハ迎右湯元ニ付而  
ハ右三ヶ駅共ニ聊勝手益道之節無御座、其上川渡湯元之者共岩出山  
町ハ万物高直之由等申触レ、湯治人江相払候都而之諸商物他郡  
(ママ)  
之益盤場古川町中新田町最寄ヲ以買入商売仕候方より岩出山町商人共  
迎も連々売道利潤茂薄困窮罷成候躰ニ而彼是歎ケ敷御事ニ御座候、  
何卒同町潤助益道ニ茂罷成候様仕度奉存候、依之如願之右五ヶ町ニ  
湯守御受負被仰渡候様被成下候は、柴田郡前川村青根湯元同様町  
内より代り々ニ川度湯本江取移シ居右湯錢等茂取立、其外湯治人共  
相用候諸飯料味噌并酒肴之様之物等迄直段指働キ湯治人共勝手ニ罷

成候様ニ壳渡、右利潤ヲ当所下町始柳町中町本町新町五ヶ所明屋敷

江自然家作代御百姓相附町内相補候得ハ末々困窮之者共取続ニ罷成

可申見詰ニ有之、乍勿論湯治人より取立候湯錢之内より下宮町江丸

代三拾<sup>ベ</sup>文、鍛冶谷沢町江丸代三拾貫文、取合六拾貫文右式ヶ駅不

時之御宿役痛補ひ為手当乍少分茂手当仕度奉存候間、如願之右湯守

五ヶ町御受負ニ御吟味被成下度奉願候、前書ニ茂申上候通誠ニ当時

之姿ニ川度湯本<sup>(ママ)</sup>磐昌仕候得ハ岩出山町下宮町鍛冶谷沢町三駅共ニ

連々相痛往々ハ困窮仕者人ハ離散退転罷成候義ハ見得渡り居申義ニ

御座候処、ヶ程訳合乍心附居吟味不申上儀も拙者共御役ニ対シ相当

不仕義ニ申町内潤助之義ニも有之、且ハ聊たりとも御運上増之儀ハ

御益之筋ニ茂御座候間、不顧憚も奉願候、町内之潤助ニ相成候時ハ

代御百姓等明屋敷ニ候吟味ニ御座候間御郡方江も別而右之趣願申上

候得共、湯元之儀ハ御金山方拾五品類之内ニ而御金山御取扱之由ニ

承知仕候間此段奉願候、五ヶ町之者共大勢連判ヲ以奉願上候儀茂恐

入候間、拙者連名ヲ以奉願候条何卒町内潤助之御憐愍之御吟味被成

下度此段共ニ奉願候、以上

寛政十二年

十一月

三太郎

同 下町組頭

万右衛門

同 中町 同

仲 作

同 同 同

惣 七

同 本町 同

善 八

同 同 同

勇 藏

同 同 同

幸左衛門

同 新町 同

長 六

岩出山柳町仮組頭

同 同 同

和 助

同 同

伊太郎

同 中町本町検断

清 蔵

同 下町柳町 同

半太郎

同所仮肝入新町 同

只右衛門

御金山下代

和泉林左衛門殿

同 同

高橋治三郎殿

同 同

佐竹平左衛門殿

猶以川度湯元湯守御受負無御余儀被仰渡候儀ニ御座候得ハ仮小屋  
等相懸ケ取移シ不申候得ハ不罷成候所、此儀茂青根湯元同様湯小

屋并右近所江小屋懸ケ等仕候敷地は被渡下候様被成下度奉願候間、  
敷地被渡下候儀ハ御山例之由ニ承知仕候間此段共ニ如此奉願候、  
以上

右之通願申出候間折入吟味仕候處、是迄之湯守吉郎右衛門江被相  
任置候よりハ老ケ年ニ丸代六拾四ノ文宛之御益増ニ有之、其上岩  
出山下宮町鍛冶谷沢町三ヶ駅潤助ニ罷成候儀ニ而ハ不輕詛合ニ奉  
存候、乍勿論柴田郡前川村青根湯元迎も御村為潤助願申上湯守并  
湯治人江之役屋物等御村受ニ罷成候處、右之的例等指考願出候事  
ニ候間、川度湯元迎茂右三ヶ駅為潤助之前川村同様岩出山本郷五  
ヶ駅江如願之来申ノ正月より向五ヶ年御受負被仰渡候様被成下度  
奉存候、委曲ハ本文ニ相見得候通是迄之湯守吉郎右衛門儀も不相  
痛候様青根湯守共同様ニ湯治人共宿為仕木錢等所務為仕候趣相見  
得、尤湯錢と違木錢と申物は老人手前より老日丸錢四拾文宛相出  
申儀ニ有之、湯治人人数之事ニ御座候得ハ吉郎右衛門等所務仕  
候木錢不少々事ニ相見得湯守被相除候迎茂曾而痛迷惑之筋ニ茂相  
聞得不申候、是迄よりハ少々利潤薄と申迄ニ相聞得申候間右五ヶ  
町如願之湯守御請負被仰渡候方可然と吟味仕候、是亦拙者共持前

之吟味ニハ無御座候得共、下宮町鍛冶谷沢町式ヶ駄之潤助并其上

岩出山町死亡跡地等明屋敷江家作仕代御百姓相附、追年仕者人頭

相倍候様仕候得ハ五ヶ町一對之潤助罷成趣ハ肝入検断等多年

(ママ)

之年願ニ有之由至極折入候吟味ニ相聞得、尤五拾人以上之代御百

姓自然相附候得ハ自ラ御田地荒所茂開興罷成可申含等迄拙者共方

へ内々口上ヲ以申聞、右之趣ハ御郡方へ茂申達候事ニ候間、尚更

大肝入手前ニおいて茂不指置可申達儀ニ御座候間、柴田前川村青

根湯元の例ニ茂御取合御吟味罷成候様仕度候、且又前書ニ茂相見

得候通老ヶ年丸代六拾四ヶ文宛之御益増ハ追年ニ至候而ハ不少之

御益増ニ罷成申儀、次ニハ三ヶ駄之潤助不輕沢合ニ奉存候条、右

五ヶ町組頭共并肝入検断共如願之早速御吟味御下知被成下度此段

御金山下代

佐竹平左衛門

同年

同 同

同月

高橋治三郎

同 同

和泉林左衛門

(鈴木)  
軍左衛門様

(斎藤)  
丈 助様

(金須)  
長八郎様

猶以如願之岩出山五ヶ町江御受負被仰渡候様被成下候時ハ川度湯

元へ小屋懸為仕右五ヶ町之者共代リ々為取移湯錢等為取立不申候

得ハ不罷成儀ニ候間、是亦如願之敷地被渡下度奉存候、右敷地之

儀ハ追々拙者共見分可申上候間御山例之通敷地被渡下候様被成下

度此段も相達申候以上

右之通申聞候处、此儀ニ付御吟味之上被相達置御吟味中ニ御座候

处委曲前文之通申上候儀ニ御座候間、相達申候条御取合御吟味罷

成候様仕度相達申候以上

斎藤丈助

十一月

如此御金山本へ申聞候处、川度湯元運上代当老ヶ年別紙ニ申渡候

通令首尾来正月之儀ハ別而不令吟味候得は難成事ニ候間、此願之

趣御郡江も申出候事と存候間其心得早速吟味可申聞候事

木村孝七

十一月廿六日

本郷伊右衛門殿

如此孝七殿被仰聞候間川度湯守共手前折入令吟味無延引何レ可申  
出候以上

十二月十七日

樋渡藤吉殿

尚々順々願も一同相渡候以上

【5】吉郎右衛門永久湯守請願書（下・91）

玉造郡大口村川度御百姓御湯守吉郎右衛門乍憚奉申上候御事

当所盛湯ニ付御役錢相増相納候様被仰渡、元文元年より去々年迄丸  
代拾三貫文宛相納候処、去々同代拾三貫文相増貳拾六貫文相納候得  
共、右ニ而茂相当ニ不仕趣被仰渡又候去年中丸代五拾五貫文相納候  
様御下知被仰渡奉承知上納仕候処、当年分御役代御吟味被仰渡候所  
岩出山町ノ者共九拾貫文ヲ以向五ヶ年其外潤助品々申上御請負ニ被  
成下度由申出候ニ付品々被仰渡置候間、御役代ハ何程ニ而も御上様

御積ヲ以永久御湯守ニ被成下度段願申上候得は、於

御上様ニも御積リ難被成下置何程御役代相納候哉止痛無之様実意ヲ  
以可申上由被仰渡奉承知候、然所岩出山町之者共壹ヶ年中湯治人九  
千人位之見積申上候儀ハ如何様訳合ニ而申上候哉、湯治人之儀其年  
柄必シ盛不盛茂有之儀、尤九千人杯之湯治人ハ数代是迄宿仕候寛茂  
無之、近年引來壹ヶ年三四千人位茂御座候哉与奉存候処、岩出山之  
者共安算申上候儀ハ不見当ニ奉存候得共御益道御吟味被仰渡置候御  
事ニて、此上御湯守ニ相放宿屋壹通ニ而ハ先願ニて申上置候趣御百  
姓相続仕兼候御儀御座候間、此上ハ不相及是非ニ御事ニ御座候間、  
岩出山町之者共九拾貫文を以御請湯ニ被成下度旨申上候方より右御  
役代を以拙者儀引続永久御湯守御百姓取続候様被成下度奉願上候、  
岩出山之者共宿屋壹通ニ而茂不輕潤助由等申上候処、過分益道之筋  
茂無之御事ニ御座候得共、此益不益等茂申上兼候間往古より数代是  
迄引続之繰力を以家作等茂仕罷有候御儀ニ御座候間、何分取続候様  
仕度奉願上候間、追年万ヶ壹不盛ニも御座候ハ、□□御承知被成  
下度奉存候間、宜敷被仰上被下置度奉存候、以上

玉造郡大口村川度御百姓御湯守



寛政拾貳年二月

吉郎右衛門

同 同 組頭

助 八

同 同村仮肝入

善 八

大肝煎

樋渡藤吉殿

【6】吉郎右衛門御役代減額請願書(上・94)

玉造郡大口村川度屋敷御百姓御湯守吉郎右衛門乍恐奉願上候

御事

一出湯

壺ヶ所

此御役代丸代九拾貫文

右御役代ヲ以去申歳より向五ヶ年御受湯ニ被仰付難有御湯守相勤

去年中茂御役錢上納仕候間御湯守相勤罷有候処、当年は世上一統

之引風故か入湯人至而不足仕春中相過候ハ、夏中ニハ入湯人茂罷

越可申哉と奉存候処、夏中ニ相成候得は旱魃長雨等相成出水猶又

湯治人一切ニ無御座、盆後迄相待候得共水潰シ等指障罷成候哉是

又至而入湯人不足仕候ニ付少分行違之儀ヲ可申上義ニ無御座候得

共、毎年之湯治人より半分入湯人高二相見得申候付無抛も半御役

錢ヲ以当年計も被召上候様被成下度奉願上候、湯治人不足仕候方

より万年諸仕込等も費ニ相成諸方出金見当行違罷成至極難渋ニ相

及候ニ付少分御役錢減申上候儀ハ千万無抛奉存候得共、前書之通

当年計半御役錢ニ而被召上候様被成下度奉願上候、世上不景氣ニ

相泥申上候儀如何敷奉存候得共、前書申上候通至極迷惑之年柄ニ

而無抛申上候間、御憐愍ヲ以如願被成下度奉願上候、以上

大口村御百姓湯守右願人

吉郎右衛門(印)

享和二年十月

同村組頭

養助(印)

肝入

兵 吉殿

右之通当年限り半減之御役代被召上御吟味被成下趣委曲前文之通申  
出候間如願当年限り御吟味被成下度奉存候、御取納時節如斯申出候  
迎も吟味申達候儀ハ遠慮之割ニ奉存候得共、全躰湯治人不足御役代  
茂不足之段申出候上ハ無抛申達候間、折入御吟味被成下度奉存候、  
以上

大口村肝煎

兵 吉（印）

同年同月廿九日

大肝煎

樋渡藤吉殿

御金山下代

和泉林左衛門殿

【7】吉郎右衛門御役代減額請願書（下・95）

右願書九月廿一日大肝入衆へ利左衛門直々持参仕候而御内談申受  
候処、御受負中如斯願書相出候而も如願之被成下難儀ニ大肝入衆

御内談被成下候ニ付相扣、湯治人不足之義計り申上候様ニ御内談  
被下置ニ付、右之通申上置候事

玉造郡大口村川度御百姓御湯守吉郎右衛門乍恐奉願候御事

一 川度出湯

壺ヶ所

此御役錢九拾貫文

右之通御役錢ヲ以寛政拾二歳申の年より向五ヶ歳御受負被仰付難  
有御湯守相勤罷有候処、年増湯治人不足ニ相成猶又去年春中ハ世  
上一統之引風ニ而湯治人至而不足仕、秋ニ茂相成候ハ、段々湯治  
人可有御座卜奉存候処、秋中ニ相成候候而ハ水押等ニ而世間甚相  
痛候故歟是又湯治人過分ニ不足仕候間、去歳十一月御金山下代和  
泉林左衛門殿山元仲太夫殿御廻村被成置、御役錢御取立之砌御役  
錢御減少被成下度儀品々願書申上候処、御金山附ニ而御役錢御取  
立初歳之儀殊ニ御取立月ニ相至り右様之願書等相出シ候儀ハ甚不  
引合之儀ニ被仰渡、右願書御取繼不被成下候ニ付無抛他借等仕御  
役錢上納仕罷有候処、当春ニ相成湯治人不足ニ候ハ、其段願書可  
申上儀右御両人より被御申渡罷有候条前年之湯治人高江見合候処、

春中連茂去秋中水押ニ而相痛候場所より一図ト申程湯治人無御座

春湯治人甚不足仕、猶当秋ニ罷成候得ハ是又世上一統之痲瘡相煩

申事ニ御座候故敷一図無御座萬物諸仕入等も費ニ相成、出金見当

甚行違ニ罷成無拠儀ニ奉存候、扱又御受継御歳間中如斯願書相出

シ候儀ハ恐多キ御事ニ奉存候得共、去歳中より引続キ湯治人不足

仕候事ニ而前歳江引合候得ハ三ヶ老程之人高二相見得過莫之行違

ニ有之無拠御儀ニ奉存候、依而當老ヶ年之御湯役九拾貫文之内何

程ニ而も御減少被成下度奉願上候、□ハ余湯元御役錢トハ過分行

違之儀ニ御座候得ハ何程御欠少被成下度ト申上候儀ハ至極恐多キ

御事ニ奉存候条、何卒 御上様御憐愍之御吟味ヲ以何程ニ而茂御

欠少被成下引続御湯守相勤候様被成下度奉願上候、此段宜ク被仰

上被下置度奉存候、以上

玉造郡大口村川度御百姓湯守

吉郎右衛門(印)

享和三歳九月

同 同 組頭

養 助(印)

同村肝入

兵吉殿

右之通申出候処、実以去々年中より入湯人不足仕去年中も前文ニ相

見得候通湯治人不参当年通も猶不足仕、御運上通りニハ出錢間ニ合

可申候得共、湯小屋等諸修覆料通り一図見当無之殊ニ相見得申候間、

当御運上代九拾貫文之内四拾貫文御減少被成下五拾貫文御取立被成

下度奉存候、御請負中如斯申出候□□減少被成下度申上候義ハ遠慮

至極ニ奉存候得共、御湯守共不繰合ニ罷成候得ハ湯治人へ之手当薄

ニも罷成根元ニ奉存候間、如斯申上候条宜様御吟味被仰上可被下置

候、以上

大口村肝入

兵吉(印)

同年同月

大肝煎

樋渡藤吉殿

【8】吉郎右衛門御役代減額請願書（下・96）

玉造郡大口村川度屋敷御百姓御湯守吉郎右衛門乍恐奉願上  
候御事

一 川度出湯

此御役代本代五拾文

但シ年数相知不申享保式拾壹歳迄奉上納候御事

一 同寛永錢拾三貫文

但シ同式年より寛政九年迄奉上納候御事

一 同今代式拾六貫文

但シ同年拾年分奉上納候御事

一 同五拾五貫文

但シ未ノ年奉上納候御事

一 同今代九拾貫文

但シ申ノ年より本年迄上納候御事

右之通去歳中迄御役錢奉上納候処、全駄御役錢指募候儀ハ御金山拾五品物ニ被仰渡、御国盛湯ニ合減少之御役代不相応之御手入ヲ以九

拾貫文迄相増、不相応之御役錢ニ而ハ御湯守被召放御吟味ニ相見得  
扱亦先祖往古よりは迄数代御湯守世渡仕為糶人ニ被召放候儀ハ至極  
残念ニ奉存候間、御役錢相増候儀ハ御上様何分御積りを以永久之  
御湯守ニ被成下度旨数度願書申上候処、御役錢不相応ニ而ハ御山例  
ヲ以難被為成段御吟味ニ相成其歳之湯治人増減ヲ以可申出被仰渡、  
当村之姿ヲ以御役代上納可仕旨被仰渡奉承知、扱又糶人之御役代相  
増候儀ハ無扨奉存候得共、数代是迄湯守世渡ヲ以隣家共ニ高分ケ等  
迄仕夫々之相続為仕置候儀ヲ嚴ニ申上候義茂恐多ク奉存、尤御金山  
付ニ被相廻候ニ付御金山下代衆茂時々御廻村之上ハ御見分ニ茂相見  
得可申御事ニ奉存候、尤年数ニ茂被仰渡御儀ニ候得ハ年柄ヲ以御役  
錢増欠茂可申上与奉存候処、去歳中ハ世上一統之悪風ニ而病人多ニ  
罷成候歟入湯ニ罷越候者共茂引風相煩入湯仕兼罷侍候儀、猶亦湯治  
人ハ二月中迄段々引ケニ罷成、盆後湯治人ハ罷越可申与相心得居候  
得ハ両年ニ相成出水等ニ而猶不足仕候得共、御受負御年間之間ニ御  
座候得ハ罷成丈ハ減被下度儀ヲ申上候義茂恐多ク奉存先以他借等仕  
候而茂相納申候処、当年迄茂湯治人不足仕春中ハ残寒故歟ト奉存候  
間、定而盆後ハ湯治人多ニ可罷成与奉存候処、却而世上一統之麻疹

二而引続當時迄一切位二相見得漸々取続候御事ニ御座候得は、明年湯治人多ニ御座候ハ、其節指募御役錢奉上納御儀ニ御座候間、当年計半御役錢ヲ以被召上、残半欠ハ明年迄御繰越被成下度奉願上候、何卒御憐愍を以如願之御吟味被成下候様、此段宜敷被仰上被成下置度奉願上候、以上

玉造郡大口村御百姓□□□□□  
(破損)

吉郎右衛門

享和三歳九月

同 同 組頭

養 助

肝煎

兵吉殿

【9】吉郎右衛門御役代減額受継請願書(下・98)

玉造郡大口村御百姓御湯守吉郎右衛門乍恐御受継願申上候

御事

一 川渡出湯壺ヶ所

此御役丸錢六拾貫文

但シ来丑年より巳年迄向五ヶ年御受継被成下度奉願候、寛政拾貳申歳より当年迄五ヶ年丸代九拾貫文ヲ以御受負仕年々御役代上納仕候処、左ニ申上候通湯治人不足仕如斯奉願候

右之通御役錢ヲ以年数御受負被成下度奉願候、去々年より世上一統之不景氣故敷湯治人不足ニ相成、猶去々年春中ハ時行風ニ而入湯人罷越候者共茂中途ニ入湯仕候様ニ而夏中ニ罷成候而ハ一図位湯治人不足仕至而入湯人茂無御座候間、御役錢御欠少被成下度旨御金山下代衆御廻村之節ニも願書申上度相達申候処、御役御取立初年之儀有之御吟味被成下かたき段被仰渡無抛承知仕御役錢茂奉上納候御儀ニ御座候処、翌春中ニも罷成猶又入湯人も不足ニ候ハ、其段可申上由御同人様方より被仰渡候得共、拙者共存心ニも明年ハ入湯人も可有之ト奉存候処、思之外ニ而去年中も去々歳之通春中湯治人一図位ニ而秋中入湯人相待申候処、世見一統之痲瘡ニ而猶又一図位罷成不申萬事諸仕入等費ニ罷成出金見当甚行違是迄数年御湯守渡世ヲ以御百姓も取続居候儀ニ御座候得は至極考難仕、右ニ付去年中大肝入衆へも御役錢御欠少被成下度願書等茂指上申候処、当年之儀ハ別段御同

人様江出湯御役代之儀被相任段被仰渡、初年之儀ニも有之品々被仰渡無扨去歳も御役代奉上納候処、戌年入湯人高ハ式千五百人程有之、亥年入湯人も春中取合式千五百人程当子年入湯人春ハ千人位之人高ニ有之、盆後入湯人成益節式千人程ニ有之、其後当村迄取合六百人程有之、去々年より引続入湯人不足仕三ヶ年取合八千六百人程之人高ニ御座候而年々湯治人不足ニ御座候処、左候得ハ湯神堂湯小屋諸修覆料見当無御座、湯小屋等ハ余家と違湯甚ニ而五ヶ年位宛ニ而立替仕儀ニ御座候、仍而拙者共木賃代之利潤之内ヲ以間ニ合可申儀ニ御吟味茂如何敷奉存候得共、一統之湯治人不足之方よりは迄右ニ而も間ニ合兼候躰ニ御座候間、何卒御憐愍之御吟味ヲ以明年より六拾貫文宛被召上來丑ノ年より巳ノ年迄向五ヶ年右六拾貫文ヲ以是迄之通リ引続御湯守御百姓も取続居候様ニ被成下度奉願候、弥以如願之被成下候ハ、御受証指上候様可仕候間此段宜敷被仰上被下置度奉願上候、右御年限中ニ盛湯ニ罷成候ハ、其段申上御役増上納可仕候間、此段共ニ御吟味被仰上候様被成下度奉存候、以上

玉造郡大口村御百姓御湯守

吉郎右衛門(印)

文化元年十一月

同 同 同人名子

利左衛門(印)

同 同 組頭

養 助(印)

同 同村肝入

兵 吉(印)

大肝入

樋渡藤吉殿

右之通申出候処、去々年より湯治人不足仕候儀も相違茂無御座、去盆後刻茂御役減シ被下候様願申上度品々申出候得共、去夏より拙者共方へ被相任候否申達候儀茂無扨、尤受負人年限茂無間茂相過候儀ニ候間、御年限中は先以相済候様相五ニ申含罷有候儀ニ御座候間、来年より五ヶ年とは願申出候得共先以三ヶ年六拾貫文ヲ以御受負繼被仰渡候様被成下度奉存候、来年より湯治人も在之引続盛湯ニ御座候ハ、四ヶ年目より又々九拾貫文之御役を以御受繼願為申上候様首尾可仕、尚拙者共茂春秋ハ御用命無之候共尅々度迄ハ出村見聞茂仕



其年切口候様可申上如斯申上候、此三ヶ年中之様ニ湯治人不足ニ而ハ湯小屋并所々普請も可仕様無御座大破等ニ罷成候様ニ而ハ自然ト不盛之根元ニ茂奉存候条、六拾貫文御役ニ而来年より三ヶ年之御受繼ニ御吟味被成下度如斯申上候、己上

玉造郡大肝入

樋渡藤吉(印)

同年十二月

(本郷)  
伊右衛門様

(斎藤)  
丈助様

【10】吉郎右衛門御役代受継請願書(下・107)

乍恐御受継願申上候御事

玉造郡大口村之内川度

一 出湯巻ヶ所

此御運上寛永錢九拾貫文

但文化十一年より当子ノ年迄式ヶ年御受負相成居候处、御年

限明ニ付来丑ノ年より向三ヶ年卯年迄御役代を以御受負被成

下度奉願上候

右之通御役代年々無滯上納罷有申候、兼而御見聞被成下候通湯治人辻茂年柄ニより却而不足仕候義御座候得共、湯場盛衰之訳茂相見得不申候間是迄之御役代を以御受負被成下度奉願上候、弥以如願之被成下候ハ、御請狀指上可申候、依而組頭并請合人連名を以如斯奉願上候、以上

大口村御百姓川度御湯守右願人

吉郎右衛門

文化十三年十二月

同村右受合人親類并組頭

養右衛門

【11】吉郎右衛門御役代受継請願書(下・111)

乍恐奉願上候御事

玉造郡大口村川渡

一 出湯巻ヶ所

此御運上代百貫文

但去ル文政三年より同四年迄右御運上代を以御受継被仰渡

難有御受負罷在申候所、此節一統不寄何二御運上増被仰渡

候間、三拾貫文相増都合百三拾貫文を以御受継願可申上段

品々御金山下代大竹左右助殿被仰含御趣意奉承知候得共、

当湯本之義は盛湯之□様無御座却而年増不盛二罷成、就中

当秋ハ 屋形様御出馬被遊候之間御本陳茂被仰付候得ハ諸

方大破二而普請手入之所数多有之、且ハ湯坪湯小屋共二一

宇新規二建替候様被仰渡候得ハ少細之湯治人潤助二而ハ相

及兼候義二御座候間、押而被仰含御趣意二相当不仕候へ共

是迄之御運上代ヲ以向三ヶ年御受負被仰渡候様被成下度奉

願候

右之通御運上代を以当年ノ年より申ノ年迄向三ヶ年御受負被成

下度奉願候、弥以如願之御下知被成下置候ハ、兼而之通御受状

指上候様可仕候間、宜被仰上可被下置候、以上

大口村川度御湯守

御受負願人

吉郎右衛門(印)

文政五年三月

同与頭并御役受合人

礼 助 (印)

仮肝入

勝之丞殿

右之通申出候間吟味仕候所 委曲本文二茂相見得申候所年増不盛二

罷成候共盛湯之□二無御座、尤当年坏之義ハ 屋形様御出馬二候而

ハ諸方普請手入之場所数多有之相費御座候間、是迄之御運上代を以

御下知二相成候様御吟味被成下度此段如斯申上候、以上

右村仮肝入

勝之丞(印)

同年同月

大肝入

千葉甚助殿

御金山下代

山本忠太夫殿

同係り下代

大竹左右助殿

(付紙①)

も勘弁仕奉願候条年数之義ハ向五ヶ年御受負被仰渡候様被成下度奉  
存候

(付紙②)

場所柄不相当之御役代二付

【12】吉郎右衛門御役代増額受継請願書(下・113)

乍恐奉願上候御事

玉造郡大口村川渡

一 出湯老ヶ所

此運上代老ヶ年二百拾貫文ツ、二而当年ノ年より向五ヶ年

右之通御運上代を以御受継被任下候様御吟味被成下度奉願上候、且  
去年中迄は百貫文ツ、二而御受負被相免置候处、此度御吟味之上湯  
治人入高江躰不相当ニ付御役増を以御受負可仕旨段々被仰渡候趣奉  
承知候处、先年卜違数人入込候様ニハ相見得候得共、近年ニ相成候

而ハ同村より鳴子村迄ニも出湯数々相□ヶ候故ヶ年増入劣り罷成、

□吟味之上被仰渡候義は無御余義奉存候得共、前文ニ茂申上候通ニ  
而実意を以申上候、尚又当秋中拙者御受負之出湯 御出場之砌御入  
湯御泊り之宿割心掛等被仰渡湯坪新キ建替并ニ広間等至而大破ニ相  
及申候处、屋根替都而手入仕候ニ付而ハ過分之雜料茂相掛り候義ニ  
御座候間、御役代等被減下度品々可奉願義ニ御座候得共、被仰渡御  
趣意以拾貫文相増如斯ニ奉願上候条、御憐愍を以如願之御吟味被成  
下度此段共ニ奉願上候、以上

玉造郡大口村川渡受人

吉郎右衛門(印)

文政五年四月

同郡同村組頭受合人

礼助(印)

仮肝入

勝之丞殿

右之通申出候間吟味仕候所、委曲本文ニも相□□申候通被仰渡御趣  
意奉勘弁御運上増を以□□願候間、如願之御下知罷成候様被成下度  
(破損)

此段如斯申上候、以上

右村仮肝入

勝之丞(印)

同年同月

大肝入

千葉甚助殿

御金山下代主立

山本忠太夫殿

同係り下代

大竹左右助殿

【13】吉郎右衛門御役代減額受継請願書(下・117)

(端裏書)

天保七年受継願下書

玉造郡大口村御百姓吉郎右衛門請継願申上候御事

一 川度出湯ヶ所

此御運上代八十ベ文  
七拾貫文

但天保四年より当未ノ年迄九拾貫以三ヶ年被任下御請負難有湯場精道罷在候所、去々年巳ノ年無類之大不作ニ罷成湯治人茂不足仕候故、巳ノ年ニ限り被任下候御役代之向も御減役願上御下知相濟難有上納仕、去午ノ年より先願之御役代ヲ以上納罷在候儀ニ御座候所、当年柄とても世上ニ統不氣候不作続(破損)キ湯治人も年増相衰(破損)□□是迄之御役代より貳拾貫文被減下(破損)「」貫文ヲ以来申ノ年より末五ヶ年子ノ年迄御請負被任下度奉願上候、縦御年限中ニ御座候共以前之通り盛湯ニ罷成候ハ、御役増申上候御事ニ御座候間、如願之被成下度奉願上候

右之通天保四年より当未ノ年迄三ヶ年御受負仕候所、去来年より御年限明キ相成候(破損)「」より末五ヶ年子ノ年迄願之通御役代以御受負被成下度奉願上、兼而御見聞被成下候通湯治人も年柄ニより却而不足仕候儀御座候間、御欠役ヲ以御受負被成下度奉願上候、如願

之被成下候ハ、請狀指上候様可仕候、仍而組頭并請合人連名ヲ以如  
斯奉願上候、以上

桜井仁右衛門殿

玉造郡大口村御百姓川度

【14】吉郎右衛門御役代減額受継請願書(下・120)

御湯守右願人

玉造郡大口村御百姓川度御湯守吉郎右衛門御請継願申上候御

吉郎右衛門(印)

事

天保七年正月

一 川渡出湯壱ヶ所

同 親類受合人

此御運上代六拾五貫文

惣左衛門(印)

右之通天保四巳ノ年より酉ノ年迄五ヶ年九拾貫文を以御請負被任下

同 組頭

難有湯場制道罷在候所、去戌ノ年より御年限明キ罷成申候間如以前

萬之助(印)

之九拾貫文を以御請負奉願儀ニ御座候得共、段々不作続キ之上大凶

同 肝入

歳ニ罷成湯治人も年増不足仕候、付而ハ去戌ノ年より寅ノ年迄末五

勝之丞(印)

ヶ年御欠役被成下度壱ヶ年御運上代四拾五貫文ツ、ニ而御請負被任

大肝入

下度奉願候所、右如願之難被成下去壱ヶ年四拾五貫文上納相成候様

遊佐甚之丞殿

被仰渡難有上納仕候所、近年世上一統不氣候不作続キ之上に湯治人

御金山係り下代

も年増ニ相衰候所、当年作徳引続キニも不罷成候而ハ如以前之盛湯

松坂大之助殿

湯治人増ニ罷成候事茂無覺束義ニ御座候間、奉願候御欠役を以当亥

同

ノ年より末五ヶ年卯ノ年迄御受負被任下度、縦令年限中ニ御座候候

共盛湯ニも罷成候ハ、御役増<sup>(破)</sup>一<sup>(損)</sup>由可申上旨如願之御吟味罷成  
候様願申候、兼而御見聞<sup>(破)</sup>一<sup>(損)</sup>通湯治人も年柄ニより却而不足仕  
湯場盛衰之訳も御座候得共、右御役代以御請負被任下度奉願上候、  
如願之被成下候ハ、兼而之通御請狀指上候様可仕候間、組頭并請合  
人連名を以如斯奉願上候、以上

玉造郡大口村御百姓川渡

御湯守右願人

吉郎右衛門

天保十年十一月

同親類請合人

惣左衛門

同 与頭

萬之助

肝入

勝之丞殿

【15】吉郎右衛門御役代減額受継請願書(下・185)

玉造郡大口村御百姓川渡御湯守吉郎右衛門当請明ニ付欠御役  
願申上候御事

一 代六拾貫文

但去ル嘉永弍酉ノ年より当丑ノ年迄五ヶ年之内壹ヶ年代九拾貫  
文ツ、を以御請負被任下居候处、当請明ニ罷成候間来寅ノ年よ  
り末五ヶ年午ノ年迄代九拾貫文之所三拾貫文被欠下残六拾貫文  
ツ、を以御受負被任下候様御吟味被成下度奉願候、且川渡湯元  
之儀ハ段々御見聞も被成下置候通り、家作向并座敷ニて壹宇大  
破ニ罷成別而手入不仕候而ハ湯治人指置候儀相叶不申、木炭等  
之類も段々伐尽し手遠より相運候儀ニ而已前よりは倍高直ニ罷  
成候様ニ而其他諸品々共ニ同様諸雜費年増相懸り近年湯治人不  
足ニ罷成候ニ付、相續難立御年限中なり共受御役願申上度段々  
口上ニ而も願申上候通りニ御座候处、扱又御受負中如斯願申上  
候も先年より被任下居候筋も取失ひ候様ニ御座候間、勘弁も仕  
不申上居候儀ニ御座候、且去年は山根村通り不作ニ而至而湯治  
人不足其去年ハ無類之照統ニ付水不足仕旱損不少相出凶災同  
様ニ而湯治人壹匁と申程無御座、甚見当違諸雜費計り相懸り湯



治人出代等二而ハ迎もまに合兼不少之金代他借仕御湯役上納ハ

同 組頭

勿論御湯守相統罷有居候儀ニ御座候間、来寅ノ年より末五ヶ年

又右衛門(印)

之間代九拾貫文之所三拾貫文被欠下残六拾貫文を以御請負被任

同村肝入

下候様御吟味被成下度奉願候、此御時節柄欠御役願申上候儀も

久兵衛(印)

遠慮恐入奉存候得共、委細前文之通り之儀ニ御座候間宜敷御吟

大肝入

味被成下度奉願候

遊佐甚之丞殿

右之通奉願候間、如願之九拾貫文之所三拾貫文之欠御役ニ被成下残

御金山下代拾五品係り

六拾貫文を以来寅ノ年より末五ヶ年午ノ年迄御請負被任下候様御吟

笠原嘉吉殿

味被成下度奉願候、縦令右御請負御年限中たり共湯治人入込大盛ニ

罷成候ハ、如元之増御運上指上候様吟味仕候間、委曲前書理書を以

【16】川渡御役代増欠調(下・189)(1)

品々願申上候通ニ御吟味被成下度別紙御請繼願證指添拙者共連名を

玉造郡大口村川渡出湯御運上代増欠取調申上様被仰渡承知仕左

以此段奉願候、以上

ニ申上候御事

大口村御百姓川渡

一 川渡出湯壺ヶ所

御湯守願人

此運上代本代五拾文

吉郎右衛門(印)

但何年より上納仕候哉年号相知不申享保式拾壹年迄上納仕候

嘉永六年

一 同寛永錢拾三貫文

十二月

但享保廿貳年より寛政九年迄上納仕候

一 同今代式拾六貫文

但寛政十年分上納仕候

一 同五拾五貫文

但寛政拾壺末ノ年より右代高上納仕候処、志田郡師山村御百姓

吉内親武左衛門と申者ニ被糶候二付、前年迄式拾六貫文之處式

拾九貫文相増御請負右代高上納仕候儀ニ御座候

一 同九拾貫文

但同拾式申年御請負申上候節、当郡岩出山本郷役付中品々糶願

申上候二付五拾五貫文之處三拾五貫文相増九拾貫文を以段々御

受負申上上納仕居申候

右之通先年より御運上代増欠取調申上候様被仰渡承知仕度扣見合候

之處、前書申上候年より已前之分ハ何様相紛候哉早速見出し兼、先

以見出し候分前書之通取調申上候間、御取合御吟味被成下度奉願候、

且段々見合候得は盛湯之段ニ抱り御役増申上候儀ニも相見得不申、

諸方より糶人有之無扨御役増御受負申上候者ニ相見得申候間、当時

ニ罷成入湯人へ引並し候而は余湯元江対し間ニ合不申候二付去冬御

受継願江も御欠役之上被任下置候様奉願候迄ニ御座候間、私より出  
候成書取調之趣江も御取合御吟味被成下度、拙者共連名を以奉願申  
上候、以上

大口村川度湯守

吉郎右衛門

嘉永とら七年

二月

同 与頭

又右衛門

同村肝入

久兵衛

大肝入

遊佐甚之丞殿

右之通此度取調大肝入処へさし出候間其心得可在之候、此書付ハ取

失ひ不申候様始末致候様被成下度候、以上

肝入

久兵衛

同十七日

御湯守

吉郎右衛門殿

(荒井)  
荒 東吾 御判

四月  
御代官衆

尚以首尾合後御金山方へ直ニ可被指戻候、已上

荒井東吾様

太田熊藏

鈴木勇右衛門

【17】出湯方御用留帳(上・41)

(前略)

如斯被仰渡候間相渡候条首尾有之無延引可被指戻候、已上

大肝入

六月十四日

遊佐甚之丞

肝入

久兵衛殿

御付札

首尾有之可被指戻候、已上

五月七日

志 金治

大肝入

遊佐甚之丞殿

玉造郡大口村之内川渡出湯欠役請繼願御下知別紙之通御連名被仰渡候間指出申候、御首尾合後被相戻候様仕度相達申候、已上

四月廿九日

玉造郡大口村御百姓川渡御湯守吉郎右衛門御請繼願申上候

御事

一川渡出湯老ヶ所

此御連上代六拾貫文

但嘉永貳酉ノ年より当丑ノ年迄五ヶ年之内老ヶ年代九拾〆文

ツ、を以御請負被任下來請明ニ罷成候来寅ノ年より末五ヶ年

午ノ年迄代九拾〆文ツ、之所三拾貫文被欠下、残六拾〆文

ツ、を以御請負被任下候様御吟味被成下度奉願候、且是迄御

運上代之内壹度二三ヶ壱通御欠役被成下度と願申上御取請御吟味被成下候義も如何難仕奉存候得共、近年不作二而湯治人も壱躰二而不足二ハ御座候得共、訳而当湯元之義は余湯元江対し不足仕候義は段々御見聞も被成下候通二御座候、其上当年ハ無類之照続二而旱魃壱躰二而壱凶と申程湯治人無御座、甚見当違其代家作向並木炭膳梔鍋釜等諸物高直二罷成、諸雜費已前より壱倍も相懸リ候様二罷成御湯守相続可仕様無御座不少之金代他借仕、渴々湯場制道罷在居候義二御座候而御別段之御吟味を以三ヶ壱通御欠役被任下置候様御吟味被成度奉願候

右之通奉願候間来寅年より末五ヶ年午ノ年迄壱ヶ年代六拾貫文ツ、を以如願之御請負被任下御吟味被成下度奉願候、川渡湯元之義は前書理書を以奉願候通近年至而不盛二罷成為夫カ御湯守相続も難立罷成候間、先以御欠役被成下度奉願候、縦令御年限中たり共湯治人入込大盛二被成候ハ、相当之増御運上茂指上候様可仕候、御別段之御吟味を以御下知被成下度奉願候、如願之被成下候ハ、兼而之通御請状指上候様可仕、依而拙者共連名を以如斯奉願候、以上

嘉永六年十二月

玉造郡大口村御百姓川渡御湯  
守右願人

吉郎右衛門

同 同親類請合人

惣左衛門

同 同 与頭

又右衛門

同村肝入

久兵衛

大肝入

遊佐甚之丞殿

御金山下代

拾五品係

笠原嘉吉殿

右之通申出候ニ付尚吟味仕候処、近年湯治人不足二ハ御座候得共是迄之御運上代より三拾〆文宛御減役被成下度と申義ハ不相当之願書

二而取請吟味可申上様も無御座訳と奉存候得とも、扱又湯守相統躰之義折入見聞仕候処、年増湯治人不足二付連々相衰居小屋等破損修覆義存分二及兼候程二有之、全躰先年御連上増二罷成候節ハ大口鳴子両村二出湯五六ヶ所在之其節ハ川渡湯元湯治人数多入込盛湯二相見得候得共、近年両村江新出湯相増當時拾六ヶ所二有之為夫カ自然湯治人不足仕難渋二相至り候之義は無余義訳二相見得申候間、当年より代拾五貫文宛御減役被成下壹ヶ年七拾五ヱ文ツ、御連上代被召上末五ヶ年御請負被任下候方と吟味仕候、縦令御年限中二御座候共盛湯二罷成候ハ、御連上増吟味仕申上候間前書之通御減役御吟味御指図被成下度、此段申上候、以上

玉造郡大肝入

遊佐甚之丞 判

嘉永七年正月

御金山下代

笠原嘉吉 判

猶以無御異義御下知被仰渡候ハ、御山例為相守候義共二首尾仕、御格之御請證為指出申候間、此段も申上候、已上

右之通大肝入遊佐甚之丞等申出候間吟味仕候所、右出湯之義ハ係ノ御金山下代笠原嘉吉取行山所向寄二付兼而見聞仕居委細は未書ニも相見得候通、先年大口村鳴子村両村二而温泉場五六ヶ所外無之候方より九拾ヱ文之御役代上納仕候而も相統罷在候所、當時二罷成候而は右両村之新出湯取合拾六ヶ所二罷成、殊二近年世上不景氣湯治人入込不申湯家作手入ハ不及申二相統仕兼候程之趣係下代直ニも申出、此度願之趣無余義訳二相見得申候間右役等吟味之通先以拾五貫文欠役被成下壹ヶ年七拾五ヱ文ツ、を以被任下、年数之義は末五ヶ年之願出二御座候へ共先以当寅年より末三ヶ年請負被免下被相損候(続カ)方と吟味仕候間、無異義御座候ハ、御郡奉行并御金山方係両替所御役人連名被仰渡候様仕度此段相達申候、已上

三月

金須敬輔

太田熊藏

鈴木勇右衛門

尚以往古出湯ヶ所之義吟味仕候所、大口村之内川渡同村鷲之湯目ノ湯鳴子村之内瀧ノ湯同瀧下湯河原姥湯之事別紙之通御金山下代笠原嘉吉申出、御役増欠之義ハ村肝入等別紙共二両

通指添相達申候

猶御取合御吟味被成下度此段共二相達申候、已上

同御判

文左衛門方

御郡奉行衆

一寛永錢拾三貫文

御金山係り

但享保貳拾年より寛政九年迄上納仕候

本々衆

一金代貳拾六貫文

両替所

但寛政十年上納仕候

御役人衆

一同五拾五貫文

御金山方御役人衆

但寛政拾壹年より右代高上納仕候所、志田郡師山村御百姓吉

同 四日

荒東吾御判

助親武右衛門と申者二被糶候二付、前年迄貳拾六々文之所廿

御代官衆

九貫文相増右代高上納仕候事二御座候

本々衆

一同九拾貫文

御金山

但寛政拾貳年申ノ年御請負申上候節、当郡岩出山本郷役付中

御役人衆

品々糶願申上候二付、五拾五々文之所三拾五々文相増前書九

拾々文を以段々御請負申上年々上納仕候

玉造郡大口村川渡出湯御運上代増欠取調申上候様被仰渡承知仕

右之通先年より御運上代増欠取調申上候様被仰渡承知仕留扣見合候

所、前書申上候より已前之分何様取紛候哉早速見出兼先以見出候分  
前書之通取調申上候間御取合御吟味被成下度奉願候、且段々見合候  
得共盛湯之段二抱り御役増申上候義ニも相見得不申、諸方より糶人  
有之無抛御役増御受負申上候者ニ相見へ申候、当時ニ罷成入湯人江  
引並し候而は余湯元江対し間ニ合不申候ニ付去冬御請繼江も御欠役  
之上被任下置候様奉願候通ニ御座候、委曲前書取調之趣江も御取合  
御吟味被成下度拙者共連名を以如斯申上候、以上

大口村川渡御湯守

嘉永七年

吉郎右衛門

二月

同 組頭

又右衛門

同村肝入

久兵衛

大肝入

遊佐甚之丞殿

御金山下代拾五品係り

笠原嘉吉殿

右写巻卷ハ嘉永六年數明ニ付願申上同七寅ノ年より末三ケ年代七  
拾五貫文ツ、を以被相任候事

安政三年請繼願左ニ申上候

玉造郡大口村御百姓川渡御湯守吉郎右衛門御請繼願申上候御  
事

一川渡出湯卷ヶ所

此御運上代七拾五貫文

但去ル嘉永七寅年より当辰ノ年迄御請負被任下来請明ニ罷成候  
間、来巳ノ年より末五ケ年酉年迄是迄之通卷ヶ年代七拾五貫文  
ツ、を以被任下置候様御吟味被成下度奉願上候、当湯元之義ハ  
段々御見聞も被成下置候通連々湯治人不足取分ヶ近年諸方江親  
類湯相出候ため余り不足、其上当秋之頃盛ニ湯治人入込之砌大  
地震ニ而奥筋通り所々相痛候場所所有之入湯人江飛脚迎ニ罷越候  
分も有之、自然□響ギ入湯心懸候者共茂相知候様ニ罷成、案外  
之不足仕弥増困難指迫り渴々御湯守相続も仕居候儀ハ段々御見



聞之通ニ御座候間、御別段之御吟味を以是迄之通之御役代を以  
願之通被任下度奉願上候

右之通奉願上候間来巳ノ年より末五ヶ年酉ノ年迄尅ヶ年代七拾五  
文ツ、以御願被任下候様被成下度奉願上候、川渡湯元之儀は前書理  
書を以奉願通御座候間御取合御吟味御下知被成下度奉願上候、如願  
之被成下候ハ、兼而之通御請狀指上候様可仕依而拙者共連名ヲ以如  
此奉願上候、以上

玉造郡大口村御百姓川渡御湯守

右願人

吉郎右衛門

安政三年十二月

同 同親類請合人

惣左衛門

同 同組頭

喜平治

同 同村肝入

久兵衛

大肝入

遊佐甚之丞殿

御金山下代拾五品係り

笠原嘉吉殿

右願安政三年十二月十日

一前文之通願申出候ニ付尚吟味仕候処、川渡之儀は余出湯ニ対而は  
全盛之場所ニ在之候間増御運上之義吟味仕候得共、委曲は願書面  
ニ相見得候通近年湯治人不足と申内、去年之儀は不時之変災等ニ  
而至而湯治人入込不申湯守相統躰無然義は拙者共見聞仕無余義訳  
ニ而御座候間、是迄之通尅ヶ年代七拾五貫文ツ、之御運上代を以  
当巳ノ年より末五ヶ年受継被任下候方と吟味仕候、無御異儀御座  
候ハ、如願之御下知被仰渡候様被成下度此段如斯申上候、已上  
安政四年正月

玉造大肝入

遊佐甚之丞

御金山下代

笠原嘉吉

尚以如願之御下知被仰渡候ハ、御山例為相守御格之受狀為指出候儀共二首尾可仕此段共二申上候、已上

右之通大肝入并係下代申出候間猶又惣太郎義廻村先ニおゐて運上増之義直々茂吟味仕候由ニ候得共、為之□□湯治人不足下代等申出候吟味之次第無余義訳ニ相見得候間、当分是迄之運上代を以如願之当已ノ年より末五ヶ年請負被相任候方と吟味仕候間、御郡奉行并御金山方係兩替所御役人老同被仰渡候様仕度相達申候、已上

五月

水科與一

曾根惣太郎

同印重三郎方

御郡奉行衆

御金山方係

兩替所本々衆

御役人衆

御金山方主立御役人衆

川渡出湯年数明受継願指出置候所如願之此度御下知被仰渡老卷被相渡候間□廻□度候、湯守共御首尾合後被相戻度候、御山例受狀之儀は兼而之通大肝入江被相出候、御郡方首尾合懸りニ而私方へ御下知□被渡候間無延引湯守以被相戻度候、老卷指添此段申置候、已上

御金山下代

笠原嘉吉

五月十九日

大口村肝入

久兵衛様

御別紙之通御下知被仰渡先以御郡方首尾合懸りニテ被相渡候間、其心得首尾有之承知後御下知方ニ而下代衆江持参返達渡候様其節此方へ茂可申出如此ニ申遣候、已上

肝入

久兵衛

五月廿日

御湯守

吉郎右衛門殿

但組頭江は御自分より可申通候、已上

文久元年請繼願申上候扣左ニ

玉造郡大口村御百姓川渡御湯守吉郎右衛門御請繼願申上候御事

一川渡出湯壱ヶ所

此御連上代七拾五貫文

但去ル安政四巳ノ年より当酉ノ年迄五ヶ年御請負ニ被任下難有

湯場制道罷有申候処、来ル請明ニ罷成申候間亦以来戌ノ年より

寅ノ年迄末五ヶ年は迄之御連上代七拾五ヶ文ツゝを以御

請繼被相任候様御吟味被成下度奉願上候、当湯元之義ハ段々御

見聞被成下置候通近年嵐洪水等不作ニ付連々湯治人不足訳ニ而

当年之義は春湯治人入込盛之時節より当時迄疫病引続流行仕候

ニ付、諸人専風唱相立為夫カ多分余湯元江罷越候様相成稀ニ川

渡ヲ心指罷越候者茂湯場近所等ニ右病氣相煩居候義見聞相嫌壱

夜式夜ニテ余湯元江取移其他日かよひ杯々分計ニテ壱通り入湯

仕居候者壱図と申程無御座候、病難之ため案外之不足仕然レハ

迎疊表替ヲ始戸障子手入都而湯治人江貸渡候諸品ハ先ニ仕入心

懸置不申難成事ニ御座候間、御憐愍之御吟味を以如願之被仰下

候様御吟味被成度奉願上候

右之通奉願上候間来戌ノ年より寅ノ年迄末五ヶ年迄七拾五貫

文ツゝ是迄之御連上代を以被任下御湯守相続仕候様御吟味被成下度

奉願上候、委細之義ハ前書理書奉願候通ニ而御座候間御取合御吟味

被成下度如願之御下知被成下置候ハ、兼而之通御請狀指上候様可仕

候、依而拙者共連名を以如斯奉願候、已上

玉造郡大口村川渡御湯守

御請繼願人

吉郎右衛門

文久元年十二月

同 親類組合御役請合人

惣左衛門

同 同 組頭

喜平次

同 同村肝入

繁治郎

大肝入

遊佐甚之丞殿

御金山下代拾五品係り

筈原嘉吉殿

(後略)

### Ⅲ 湯錢関係

【18】吉郎右衛門湯錢変更請願書(下・109)

玉造郡大口村湯守吉郎右衛門乍恐奉願上候御事

一 拙者供是迄湯治人衆老一人二付御役錢式十七文宛所霧仕罷有候所  
此度相改老夜九文宛之割合を以所霧仕候様被成下度奉願上候、  
且先年より老夜式夜二而も老廻り二而も同様二所霧仕候義二而  
氣前も不宜甚相当不仕候間、前書申上候通老夜九文二被成下候  
得ハ格別氣前も宜湯治人進ニ茂可罷成と奉存候、且又鬼首之内

於荒湯ニも取合吟味仕候所、同所之儀は先年より老夜拾文宛之

割合ニ而老廻り七拾文所霧仕置候由ニ而湯治人氣請も宜敷訳ニ

相聞得<sup>(破)</sup>「<sup>(損)</sup>」同所之振合を以御吟味被成下度奉願上候、

尤段々御見聞被成下候通近年在々不作殊ニ御城下表估ニ不景氣

ニ付而は年増湯治人も入劣ニ罷成不盛之儀ニ御座候所、御請繼

申上候砌御連上等も減下度段可申上義ニ御座候所、左ニ而は御

郡中老躰之出湯等江も顚響ニも罷成、右様之義申上候義も恐多

奉存候条前文ニ申上候通年増ニ湯治人出劣罷成家内相続渴々罷

有申候得共、是迄御連上等之義は無滯上納仕候儀ニ御座候間、

此度之義は御手当同様之御吟味を以如願之被成下度如斯ニ奉願

上候、已上

川度湯守願人

吉郎右衛門

文化十四年

七月

親類請合人

養右衛門

【19】吉郎右衛門湯錢變更請願書（下・182）

下書

玉造郡大口村御湯守吉郎右衛門乍恐奉願上候御事

一 拙者共是迄湯治人衆、忝人二付御湯錢式拾七文宛所霧仕罷有候処、此度相改、忝夜九文宛之割ヲ以所霧仕候様被成下度奉願上候、且先年より忝夜忝夜式夜二而茂、忝廻り二而も同様二所霧仕候義にて、氣前も不宜甚相当不仕候間、前書申上候通、忝夜九文二被成下候得ハ格別、氣前も宜湯治人二進ミ二も罷成ト奉存候、且又鬼首之内、荒湯元江茂取合吟味仕候処、同所之義ハ先年より忝夜拾文宛之割二而、忝廻り七十文所霧仕置候由にて湯治人氣受も宜敷訳ケニ相聞得申候条、右同所之振合ヲ以御吟味被成下度奉願上候、尤段々御見聞被成下候通、近年在々不作殊ニ御城下表共二不景氣ニ付而ハ年増湯治人も入劣り二罷成不盛之義、御座候処、御受継申上候砌、御連上等も被減下度段可申上候義ニ御座候処、左二候而は御郡中、忝軀之出湯等江も影響ニも罷成右様之義申上候義ハ恐多ク奉存候条、前書申上候通、年増ニ湯治人出劣り二罷成家内相続、渴々ニ罷有申候得共、是迄御連上等之義は御手当同様

之御吟味を以如願之被成下度如斯奉願上候、以上

川度湯守願人

吉郎右衛門判

文化十四年

親類受合人

六月

養右衛門判

山本様

大竹様

右之通ニ願書指上候而は如何力可仕哉、尤別紙申上候通、大肝入衆連名ヲ以表立相出二而は如何可有之哉、此段共ニ奉窺上候、以上

【20】大口村鳴子村湯守共湯錢變更請願書（下・187）

玉造郡大口村鳴子村当村御湯守共乍恐奉願上候御事

拙者共居屋敷且持高之内より出湯、先年より御湯守被仰付段々御請負被任下難有湯場、制道湯治人宿渡世罷在、忝人忝夜御湯錢拾文、木賃五拾文、都合六拾文宛、以家作屋根諸普請都而破損具障子、畳表替等春秋手入其外家具之分膳、碗飯炊簀手物、鍋釜土瓶茶碗皿様之物、或は酒道具之類、御入用次第夫々取揃指上是等之分年々仕次ニ罷成、尚薪木等之

儀近年近所山林伐尽シ遠所より買調牛駄送又は人足等ニ而運送仕候得ハ引着高直ニ罷成、尚又諸道具之類仕次等近年諸品高直ニ付諸雜費へ以前より對シ尅倍以上茂相懸り、右分御湯錢木賃ニ而ハ間ニ合不申存分湯治人取扱ニも相及兼年増難渋罷在申候間、御別段之御吟味以当年より木賃拾文増ニ被成下置、都合七拾文宛以湯治人宿仕御湯守相続仕候様御憐愍之御吟味以如願之御下知被成下置度奉願上候、右木賃如願之増被下候ハ、御運上代高尅ノ文ニ付式百文ツ、之割以備相立、大口村川渡等五ヶ所御運上代高百拾七ノ文之所へ式拾三ノ四百文之備罷成、鳴子村瀧之湯等取合御運上代高拾七ノ三百文之所へ三貫四百文之備ニ罷成、右備代当村取合尅ヶ年代式拾六ノ八百六拾文罷成、右之内三ヶ尅八ノ九百五拾三文五ヶ年之間年々御金以御上納仕、三ヶ式之所代拾七ノ九百七文当村備ニ仕、御湯守共方ニ而預り初年より五ヶ年之間尅割之利足相附、六ヶ年目四月尅村切ニ御村方御吟味以相応之株或御百姓へ貸附致、右利足ヲ以難渋者凌且ハ諸償等之足力ニ仕候得ハ自然御村益ニ可罷成哉ニ奉存候間、御吟味被成下置度奉願上候、湯場付之御村方兎角通御用迷惑勝彼是考并仕奉願上候、尚御湯守并湯場付之御村方難有自然立行ニ罷成候付如此

奉願上候間、官敷御吟味被仰上候様被成下度、拙者共連名以如斯奉願上候、以上

玉造郡大口村御百姓  
川渡御湯守願人

吉郎右衛門

安政六年

四月

同赤湯御湯守

勘七

同 同

万五郎

同 同

平六

同鷲果両所御湯守

新助

同鳴子村瀧ノ湯御湯守

勘左衛門

松本仁左衛門

同  
同

菅原藤蔵

同中山星ノ湯御湯守

庄右衛門

同  
同

孫左衛門

同大口村与頭

久左衛門  
庄一八

五

同  
同  
同

喜平治

鳴子村与頭

東右衛門

泉之助

治右衛門

安政六年

六月

肝入

遊佐平左衛門殿

肝入

久兵衛殿

右之通当兩村御湯守共願申出候間吟味仕候処、近年世上至而不景氣  
ニ付湯治人年増不足其上諸物高直渴々御湯守相統罷在居候義は兼而  
拙者共見聞仕居候候事ニ御座候、如願之御吟味被成下忝人ニ付忝夜  
木賃拾文ツ、被増下度奉願候、此御時節柄増代為受取候儀は恐入候  
事ニ御座候間折入吟味も仕候処、諸家財之内酒道具並瀬戸物類其他  
畳表替等之分は年々仕次不仕難成、弥増諸物高直取分当年之儀は諸  
見聞も被成下置候通り諸品へ勿論未払底之上、無類之高直ニ付間ニ  
合兼居御座候、品々口上ニ而も申出無余儀訳も奉存段々直ニも申上  
候通ニ御座候間、委曲本文申出候趣江茂御取合御湯守共相統仕候様  
御吟味被成下度此段申上候、以上

大口村肝入

久兵衛

同年

同月

鳴子村肝入

遊佐平左衛門

大肝入

遊佐甚之丞殿

御金山下代拾五品かゝり

笠原嘉吉殿

【21】大口村鳴子村湯守共湯錢變更請願書及達書（下・188）

写

如斯御下知被仰渡候間各其心得首尾有之候、我等方留懸りニ候間早  
急可被指戻候事

大肝入

遊佐甚之丞

三月九日

鳴子村肝入



遊佐平左衛門殿

大口村肝入

久兵衛殿

如斯御郡奉行衆被仰聞候間其心得首尾有之、無延引可被指戻候事

岩 伊右衛門

三月十日

大肝入

遊佐甚之丞殿

玉造郡大口村并鳴子村両村出湯之外木賃等被増下度由之儀二付、温  
泉湯守共願出御郡江も順々申出御郡奉行相達一卷吟味被相渡承知仕、  
猶又拙者共手前二ても段々廻村見聞仕候処、実ニ此節物々高直金銭  
不融通二付而は此迄之振合を以木賃等請取候而は兎ニ角間ニ合兼候  
由之趣無餘儀訳ニ相見得候間、当分直上ニ被成下度事ニ候得共、扨  
又一体之関合不容易ノ事ニ御座候得共委細は御郡奉行書面ニも相見  
得候通、実事首尾合兼候儀を押付可申様無御座候事ニ御座候間、右

役二吟味之趣江も御取合願上候へは当前文ニも申出候通り、湯銭拾

文木賃五拾文江拾文被増下都合七拾文ニ直上被成下度、追々諸物下

直ニ相成候ハ、不打置直下之儀吟味首尾可仕候間、右之趣を以御吟

味被成下度、被相渡忝卷等指添此段相達申候、以上

曾根惣太郎

十二月

五日

油井順之輔

右之通御金山方本々等被申聞令承知無異儀候間、其心得首尾可有之  
候、以上

十二月

入 三右衛門

九日

遠藤小三郎殿

曾根惣太郎殿

油井順之助殿

右之通出入司衆被仰聞候間、其心得首尾可有之候、以上

三月七日

遠藤小三郎

御代官衆

尚以御金山方首尾合申候上廻来候紙面も相渡候、追て壹卷右役手

前江可被相戻候、以上

曾根惣太郎

遠藤小三郎様

油井順之助

玉造郡大口村等両村出湯之分湯錢木賃被増下度由之儀ニ付相達別紙之通御連名出入司衆被仰聞候間、首尾合懸ニて相廻申候、追而御代官江順之輔手前江相戻候様其御首尾罷成度指添申達候、以上

二月廿八日

玉造郡大口村鳴子村両村御湯守共乍恐奉願上候御事

拙者共居屋敷並持高之内より出湯先年より御湯守被仰付御請負被任下難有湯場精道湯治人宿渡世罷在、壹人壹夜御湯錢拾文木賃五拾文都合六拾文宛ヲ以家作屋根替請普請都而破損且は障子疊表替等春秋手入、其外夜具之分膳碗飯炊箆手桶鍋釜土瓶茶碗皿様之物或は酒道具之類御入用次第夫々取揃指上是等之分年々仕次ニ罷成、尚薪木等之儀は近年近所山林伐通し遠山より買調午駄送又は人足等ニ而運送仕候得は引差高直ニ罷成、尚又諸道具之類仕次等近年諸品高直ニ而諸雜費以前江対し壹倍已上も相懸リ、右之御湯錢木賃ニ而ハ間ニ合不申存分湯治人取扱も相及兼年増湯治人不足弥々難渋指迫申候間、御別如之御吟味を以当年より木賃拾文増ニ被成下置都合七拾文宛ヲ以如願之御下知被成下置度奉願上候、如願之被成下置候得は居家破損修覆并諸家財共ニ何様ニ候敷指掛リ全備仕、湯治人江不自由懸上不申様念入取扱仕候ハ、自然湯治人湯場々江入組盛湯ニも罷成追々諸品も下直ニ可罷成候間、其節は時宜之御吟味被成下、是迄之通湯錢木賃ヲ以宿仕候而も仕当二間ニ合申御見詰ニ御座候間、御別段之御吟味ヲ以当分如願之被増下、御湯守共令相続仕候様御吟味被成下度不顧恐御用多も拙者共連名を以如斯奉願上候、以上

安政六年  
七月

玉造郡大口村御百姓

川渡御湯守願人

吉郎右衛門

同赤湯御湯守

勘七

同同

万五郎

同同

平六

同鷺ノ巣当所御湯守

新助

同目の湯当御湯守

惣左衛門

同鳴子村瀧ノ御湯守

勘左衛門

同同同

善十郎

同同同

源藏

同川原湯守

覚左衛門

同川原新御湯守

平藏

同川原姥湯御湯守

兵吉

同車湯御湯守

忠藏

同同

与右衛門

同新車御湯守

松本仁左衛門

同同

菅原藤 藏

同中山星ノ湯御湯守

庄右衛門

同 同

孫左衛門

同大口村組頭

久左衛門

同 同 同

喜平治

同鳴子村組頭

東右衛門

同 同 同

泉之助

同鳴子村与頭

治右衛門

肝入

遊佐平左衛門殿

肝入

久兵衛殿

右之通両村御湯守中願申出候間吟味仕候処、近年世上老統不景氣ニ付湯治人年増不足、其上諸品高直渴々御湯守相統罷有候儀は拙者共兼々見聞も仕居候事ニ御さ候間、如願之御吟味被成下置度老人ニ付老夜木賃拾文ツ、被増下度奉願上候、此御時節柄右様増代御吟味被成下度申上候儀も恐入候事御座候へ共、委曲本人願申出候趣江も御取合御吟味被成下度此段共ニ如斯申上候、以上

大口村肝入

久兵衛

同年

同月

鳴子村肝入

遊佐平左衛門

大肝入

遊佐甚之丞殿

御金山下代

笠原嘉吉殿

#### IV 御殿・仮屋普請関係

【22】御中奥様御入湯につき吉郎右衛門請願書（下・166）

手扣

玉造郡大口村川度屋敷御湯守吉郎右衛門乍恐奉願上候御事

来春

一御中奥様御入湯被為遊旨前廣向御役様より被仰渡旨奉承知候、右  
二付是迄湯小屋湯坪湯治人数千人相入春庵相二相成御入二茂相成  
兼候躰二御座候付、湯小屋湯坪等迄新規立替御入二茂相成候様仕  
度奉存候処、来春中御入被仰渡候得共当所雪深之所柄二而冬中諸  
普請方も不罷成所柄二御座候二付而冬中材木物伐方出シ方計仕儀  
二候処、左候得は急速之儀二相成御入二も御間二合可申様無御座  
躰自力二茂相及兼至極無捩奉存候間、御材木物近所之於桐ヶ口徳  
御林二松三拾本鳴子村越戸御林二而杉七拾本式尺八九寸廻より三

尺四五寸廻迄湯小屋湯坪材木物被下置度乍憚奉願上候、如願之被  
下置御儀二御座候ハ、最早取立春中御入之御用二茂相立申度不顧  
憚如斯奉願上候、此段宜被仰上被下度奉存候、以上

御湯守願人

吉郎右衛門

寛政七年十月

組頭

善内

肝入

兵 吉殿

【23】仮屋普請につき御下知留（下・21）

（表紙）

一 慶応三卯年四月改

寛政三年玉造郡大口村川度御湯守吉郎右衛門 大承様御仮家相立  
候に付御同所様より御書立を以御指図 被成候次第御郡方江も御承

知達仕候得は百姓家ニ不相当之家作ニ付取撥候様被仰渡候処御同所  
様より品々御願立被成如願之御下知被仰渡候留

肝入

遊佐兵吉」

左之写之通御制外之普請は難成品々被仰渡候義、委曲御紙面之趣江  
茂取合取付候而茂御制外之分は取撥之首尾有之、其段可被申聞候、  
以上

仮大肝入

勘兵衛

九月十八日

大口村肝入

兵吉殿

右之通写<sup>(不要カ)</sup>写を以申渡候様被仰渡候ニ付、御本紙は相返候上如  
此御承知候後、無延引可被指戻候 以上

写

川渡湯元伊達大丞殿御休所御普請之儀御窺申出御達候処、例江茂被  
御取合候処、御構難成御普請ニ而成難由、別紙之通御奉行衆より被  
仰渡候段申来候間其心得可被申、尤長之進廻村之節見分申候得は御  
普請江茂取付候事ニ相見得候処、御制外之儀は不相成候間取付候而  
も取ほこし候様首尾有之、其段も可被申聞候、尤壺巻不残相渡候間  
村方江は写を以申渡、御紙面は早速さし戻可被申候 以上

(宮崎)  
宮 長之進

九月

仮大肝入

勘兵衛殿

(安原)  
安 甚兵衛

玉造郡大口村肝入兵吉申上候御事

当御村川渡屋敷御百姓吉郎右衛門広間大破仕候ニ付此度新規造り替  
仕候処、先年 弾正様同所江御湯治之節茂御入被遊候御座敷等無御  
座候而ハ不自由被為遊候間、右広間之内江追年御同所様御湯治之節  
御不自由不被遊候様ニ御座敷壺坪拵方仕度段御同所様御向役衆江吉

郎右衛門竊書申上候得は、御別紙御書立写之通此度御座敷拵方仕候様被 仰付則首尾仕候ニ付吉郎右衛門御普請江取付罷有候間、為御承知之同人竊紙面写忝通并御書立写共指添御承知ニ申上候 以上

大口村肝入

兵 吉

寛政三年

七月

仮大肝入

勘兵衛殿

川渡御湯守吉郎右衛門御内証様江伺紙面写し并御同所様より

御指図被成候御書立写左ニ

写

大口村川度吉郎右衛門奉窺上候御事

一此度古広間大破ニ付造替仕候処、是迄之通

殿様御上方様御仲間様方御入湯被為遊候節湯治人入込之座敷ニ御

座候(破) 一(損) 所ニ拵方仕候而御座敷(破) 一(損) 仕候得は指

懸拵方之儀過分金代相入置御村方ハ人足諸入料も相懸御不自由之御入湯被為遊候御儀ニ御座候間、此度作替之序ニ御座候より御座敷構方仕度儀ニ御座候故御次より拙者義自由被成下御座間忝坪囲置候様被成下度奉存候、尤拵方之儀は先日御内々存慮申上候通御下知被成下度奉願上候、此段宜敷被仰上被下度候、以上

願人

吉郎右衛門

寛政三年

六月

組頭

養助

肝入

遊佐兵吉殿

右之通申出候間御吟味急ニ被仰渡候様被成下度此段申上候、以上

大口村肝入

遊佐兵吉

同年

同月

御宿十之助様

福田順太夫様

此度大口村湯守吉郎右衛門存慮窺書指出候ニ付左之通被仰付候事

一 御式台相附可申事

一 御座之間附書院江御紋ニツ引両可相付事

欄間江は九曜相附可申事

一 惣青海ニ仕置被為入候節御次之間より一字御本陣ニ御用立候様之

御殿ニ心懸置候様被仰付候事

一 もや作等は御殿之儀ニ候間御指支無之候

一 御座ノ間之儀は縦令大進曆々之衆入湯ニ茂

御手前様より御指図等無之内は自分貸渡候義堅被相禁事

一 御座間之外御式台より常式湯守吉郎右衛門ニ自由被仰付候事

右ニ付於同村為作事料御山沓ヶ所被相渡候事

右之通被仰付候間其心得向々江早速首尾被申御普請成就相成候様可被申候、以上

権兵衛

寛政三年

六月

弥右衛門

新左衛門

五郎兵衛

助兵衛

右之通大口村湯守吉郎右衛門御殿普請存慮窺書指出被仰渡候間各々

其心得首尾可被申候、以上

大内久左衛門

同年

同月

菅谷伝左衛門<sup>(カ)</sup>

遊佐新右衛門



齋藤勇助

永根新内

御宿十之助殿

同役衆中

右之通被仰渡候間其心得首尾可被申候、以上

福田順太夫

同年

同月

御宿十之助

大口村肝入

遊佐兵吉殿

右之通川渡湯守吉郎右衛門義此度作事仕候様彈正様御家中御役人衆より指図を以取付居候段肝入兵吉別紙写両通指添申出候処、湯元之儀ニも有之、彈正様御知行所之儀ニて御湯治之節御用ヒニ罷成候上は御指支無之方ニも可有御座哉相窺候上申渡首尾此度写両通共ニ指添如斯申上候、以上

玉造仮大肝入

勘兵衛

寛政三年

七月七日

甚兵衛様

専藏様

右之通申出候間吟味仕候処、大進曆々休所之儀は何方ニも百姓家之内通例よりは座敷廻りにも宜敷作事仕置候儀ニ有之候処、大承殿向役より別紙之通指図仕候紙面（破損）結構之事ニ而御一門衆御宿等ニ被成候共百姓躰作事ニは相当不仕義ニ奉存候間、若余所と違湯元之義は御湯治之ため別段被相達御下知等も有之向々指図仕候訳ニも御座候哉と一応御同入向役江問合候所、御知行通りニ付無指支前々より右之通仕来りニ御座候由別紙之通用人齋藤勇助挨拶申聞候古構之御旅舎拙者共此字不分不質ニ而罷有候処、縦百姓家ニも相当不仕広大之作事ニ御座候とも大承殿始御曆々湯治之節被相用候事ニ相聞得候間、申出候通り造り方為仕可然哉御取合御吟味御指図被成下度

別紙老卷さし添如此相達申候、以上

宮崎長之進

九月

安原甚兵衛

右之通御代官申聞候間吟味仕候処、大丞殿御知行通ニ付不指支前々より指図仕来之由役人共紙面ニ相見得候得とも上之御定有之上ハ縦御知行通りニ候共百姓家作之儀書立之趣ニ而は結構之普請ニ相見得御領内町場等之内ニも板敷御免之場所尅々所ニて被相定置被相免置候儀ニ有之、尤元文三年氣仙唐丹村市兵衛先年御出馬之節御寓所ニ相成候処、追々類焼仕候ニ付建替之間板敷天井長押御免被成下度願指出、尤右之処は末々御出馬又は御巡見衆御下り之節御宿ニも指支之所之由とも々々申達候処、板敷計御免被成下候義ニ相見得一旦御宿等ニ相成候家作建替さへ御免不被成下義ニ御座候得は、大丞殿湯治等ニ御越被成候節被相用候共相紛候義ニ御座候間難相成義と奉存候、都而曆々在所拝領之面々自分ニ首尾仕候而も結構成ル家作仕候義ニ而は御定も相破類例無根相出百姓一躰之奢ニ相成候義ニ而、於

拙者共ニは申出候通之家作は難成訳と同役共江も吟味仕此段相達申御知行御指図被成下度別紙三通共指添如斯御座候、以上

九月五日

佐藤七郎右衛門

右之通御郡奉行申聞候間尚吟味仕候処、委曲は書面相見得候通ニ有之先年御寓所ニ相成候市兵衛家作さへも板敷計御免被成下候程之儀ニ相見得御押も難相立、御郡奉行吟味之趣無余義わけと吟味仕候間尚亦被御取合御指図被成候様仕度候、仍而老卷指添此段相達申候、以上

九月六日

熊谷齋

右之通被申聞承知□申出候通之家作ニは難成事ニ候間其心得首尾可有之候、以上

伊賀

九月七日

熊谷齋殿

右之通伊賀殿被仰聞候条其心得首尾可有之候、以上

九月八日

熊谷齋

佐藤七郎右衛門殿

右之通齋殿被仰聞候条其心得首尾可有之候仍而別紙三通共相渡候条  
無延引卷可被指戻候、以上

大 又助

九月十一日

宮崎長之進殿

安原甚兵衛殿

但是迄之御書立之通り之家作難相成旨被仰渡候卷

大口村御百姓御湯守吉郎右衛門乍恐口上書を以御披露申上候御事

此度古広間大破仕候ニ付無抛造り替存慮相窺候得は、造り方之品々

御書立を以被仰渡直ニ御普請ニ取付建方之分不残普請成就候様之義

ニ御座候処、肝入兵吉義為御承知之御公儀様江相達候ニ付御制外之

品々難為成段御別紙写之通被仰渡如何様ニ御答（破損） 哉御制外

之は乍憚於拙者ニ茂恐多ニ奉存前文ニ申上候通相窺御さし図被成下

候上造方仕候処、只今從御公儀様向々御役人様取撥候様被仰渡無抛

奉窺上候、是亦御当家様ニ根元御仕来を以御下知被仰渡候而取撥候

義如何様ニ可被成下置哉扱亦是迄は段々念願を以造方仕候処、此度

取撥候而は追々造替（破損）□候様も無御座仕合至極無抛奉存候、乍恐造り

来之通りニ被成下度奉窺上候間早速御下知被成下度奉存候、以上

願人

吉郎右衛門

九月廿一日

組頭

養助

肝入

遊佐兵吉殿

大口村肝入兵吉申上候御事

当村川度屋敷御湯守吉郎右衛門古広間大破仕候ニ付新規建替仕度候

処、先年

殿様御湯治之節茂御座敷等無之御不自由被為遊候二付、此度造替之  
広間之内江御座敷壹坪拵方仕置度段々窺書申出候二付其段申上候得  
は右広間造り方之義御書立を以被仰渡候二付、則首尾仕吉郎右衛門  
義御普請江も取(破)一御公儀様江其段拙者(破)一御承知申  
上候処、段々御吟味之上別紙御下知写之通被仰渡是亦承知仕吉郎右  
衛門首尾仕候得は、又以吉郎右衛門如何様二仕可然哉別紙之通申出  
候間、何分御吟味之上御指図被成下度奉存候、以上

大口村肝入

遊佐兵吉

亥ノ

九月廿一日

御宿十之助様

福田順太夫様

壹通

右之通被仰聞候間其心得無延引壹卷安原甚兵衛方より相渡置候事二  
候ハ、可被指出候、以上

十二月十三日

大肝入

渋谷三右衛門殿

(熊谷)  
熊 勘右衛門

玉造郡大口村川渡湯守吉郎右衛門家造方大造二作り方致候二付安原  
甚兵衛吟味申聞其節吟味相達候処、右家作取撥候様向々より被仰渡  
右甚兵衛其御郡勤仕中申渡候処、右壹卷御見合二相入候間留写を以  
成り共指出候様可有之候、以上

(引地)  
引 正左衛門

十二月十二日

熊谷勘右衛門殿

右之通被仰渡候間其心得有之写を以早速指出可被申候、(破損)□□儀共  
品々可被申聞候、以上

大肝入

渋谷三右衛門

十二月十九日

大口村肝入

兵吉殿

玉造郡大口村肝入兵吉申上候御事

当御村御百姓川度御湯守吉郎右衛門義寛政三年七月大丞様御向役様  
江窺書御内々申上候書立を以作事被仰付取付候处、拙者方より為御  
承知之巻卷写を以申上候处、御書立趣ニ而は結構成ル御普請ニ而難  
成品々被仰渡罷有候处、此度先年御下知写御見合ニ被為入候間指上  
候様被仰渡承知仕、別紙写さし上申候間被仰上可被下候、以上

大口村肝入

兵吉

寛政六年

正月

大肝入

渋谷三右衛門殿

左之通被仰渡候ニ付先年より仕来り之儀御吟味早速可被申聞候、以  
上

大肝入

渋谷三右衛門

七月十日

大口村肝入

兵吉殿

玉造大口村川渡湯守吉郎右衛門家作之儀ニ付品々大丞殿より御願ニ  
被相出候ニ付品々申達候处、右川渡之儀ハ大丞殿所拝領之地ニも可  
有之哉所拝領之地右湯元之儀は常々百姓と違御制外之家作ニ而も不  
苦事ニ可有之哉吟味可申達段品々向々より被仰渡候間委曲右之<sup>一</sup>  
<sup>想</sup>仍吟味有之早速可被申聞候、以上

(熊谷)  
熊

勘右衛門

七月三日

大肝入

渋谷三右衛門殿

左之写之通御下知被仰渡候間其心得在之趣湯守吉郎右衛門江茂可被  
申渡置候、以上

大肝入

洪谷三右衛門

七月十五日

大口村肝入

兵吉殿

左之通被仰聞候条其心得首尾有之無延引可被指戻候、以上

(梅沢) 梅 文太夫

七月五日

大肝入

洪谷三右衛門殿

左之通郷助殿より被仰聞候其心得可有之候、一卷ハ首尾右(破)  
一(損)無延引可被指戻候、以上

七月三日

梅沢文太夫殿

(佐藤) 佐 七郎右衛門

左之通美濃殿被仰聞候其心得首尾可有之候、以上

矢 郷助

七月式日

佐藤七郎右衛門殿

熊谷齋殿

美濃

伊達大丞殿御知行玉造郡大口村川度湯元江飯屋を相立候義如別紙之  
追々ニ相願候処、右ニ付而は最初及吟味居候処湯元之義ニも有之、  
此度別段之(破)一(損)を以被相届候通ニ而被指置候事と御役中令吟  
味候条其心得向々江も可被申渡置候、以上

六月廿七日

尚以右ニ付最初願被指出向々及吟味居候、壹卷ハ此度不及吟味  
事と令吟味候間其心得可有之候、右吟味壹卷ハ留置申候、以上

【24】奥筋御出馬につき補理等調（不明〈宮城県公文書館蔵〉）  
（表紙）

「当秋奥筋へ御出馬二付御泊り所等御補理之ヶ所調」

左之通出入司衆御下知被仰聞候間委曲卷之趣を以御補理向吟味有  
之壹卷留より無延引可被指戻候、以上

平田伝之丞

五月廿二日

森喜市

林珍平

御奥筋

御代官衆

御郡方横目衆

御普請係御役人衆

林珍平殿

（及川）  
及 齊

森喜市殿

平田伝之丞殿

当秋奥筋へ

御出馬二付 御泊り所等御補理之義別紙之通被申聞令承知相達候処、

無御異義旨縫殿殿御下知被相成候間其心得首尾可有之候、已上

五月十九日

尚以首尾合相済候ハ、可被差戻候

及川齊

福縫殿様

石川林太夫

五月十七日 判縫殿方

左之通御郡奉行申聞無余義訳二御座候間申聞候通り二而可然吟味仕

相達申候

五月三日

林珍平

平 丹下様

森喜市

平田伝之丞

左之通御小姓頭申聞候処、御手前より白札五ヶ所相付申聞候分於拙

者共手前二牡鹿郡江

御出馬之節御扱相成候被取合吟味仕条、左之趣忝心相達候上首尾仕度申達申候、已上

四月廿三日

林珍平様

森喜市様

平田伝之丞

柳田正親

左之通被仰聞承知別冊白札付五ヶ所之外は取調之通二而大図間似合可申、尤私共吟味之趣はヶ條之向付札之通候間御吟味首尾罷成候右之趣御奉行衆江茂申達候上如此二申進候、尤

御出馬先御補理向之義は前々被仰出も有之通之義二候間、何分手輕二御吟味首尾罷成候方追々被仰聞別紙差添此段申遣候

三月

尚以五ヶ所白札付之分は私共手前二而は相知兼候間其向へ被御問合御吟味罷成候、此段共申進候

林珍平

下郡山監物様

森喜市

平田伝之丞

左之通御代官等申聞候間御吟味早速被仰聞度指遣候、已上

二月七日

尚

御下向已後奥筋御出馬被遊旨被仰出御道割等之義被仰渡置候付先二御昼御泊り所等御補理振之義吟味仕候処、安永九年

(伊達重村)  
徹山様御出馬被遊候已来数拾年来奥筋へ之御出馬不被為在御補

理振之儀拙者共方へ係御役人始村役付等迄不心得之義二在之御補理振不同二相成御間欠等二相成候義二而は恐入奉存候間

(伊達齊宗)  
英山様御世中牡鹿郡へ御出馬之節并二寒鴨方御出馬之補理振御

取合別紙書立之通吟味仕大凡不同も無之様御補理相成候様仕度卜吟味仕候、然処

御泊り御昼所共有来家作之内御用立候事二御座候間、家作振之義は廣狭も在之素より一樣可仕様無之事二御座候得共大凡右二元付御補理振吟味も仕候ハ、御湯殿并二御二便処等其外新キ補理之分予似寄



候御補理ニも可相成義と吟味仕候処、尚又右書立之趣一応相伺候上  
首尾仕度別紙指添相達申候間前書之趣御吟味御指図相成候様仕度、

尚

御出馬筋同役共寄合吟味仕相達申候、已上

二月

齊藤丈助 金須長八郎

武内新次 大内新左衛門

大内与左衛門 内海新助

鈴木善之丞 前田五郎八郎

鹿又徳右衛門 萱場東右衛門

<sup>(カ)</sup>  
渡部忠兵衛 吉田正内

新宮直右衛門

尚以本文之趣御指図相成候ハ、御補理振吟味仕御座敷割并ニ惣御供  
御人数下宿割之義は其御郡々より絵図を以別而相伺候様可仕候、石  
森幸蔵熊谷三郎助義尚病等ニ而出席不仕候間連名不仕候条、此段共  
如此ニ相達候、已上

尚

御下向已後奥筋御出馬被仰出候ニ付在々御泊り御昼等御宿御補理向  
之儀

<sup>(伊達齊宗)</sup>  
英山様御世中牡鹿郡へ御出馬之節並ニ名取寒鴨方御出馬之節御

宿御補理向之取合左之通吟味仕候

御寓所御補理方

一御座之間之事

一八畳敷より拾畳敷位迄床押入天井長押付

但右板天井相損候而たるみ等相出候ハ、釣直シ丈夫ニ可仕事

右之付札

長押之義は有来之分は格別新規御拵ニ及申間敷候事

御小姓方

一壁中塗新規相付可申事

但床床脇并ニ惣壁共念入新規同様ニ御座候ハ、其俣ニ而御用立

候様可仕事

一襖唐紙ニ而上張計張替可仕事

但是又念入新規同様之所ハはり替不申直ニ御用立之様可仕事

一腰張は湊紙之類を以可仕事

但品々右同断

一畳表替仕事

但迫表上布縁ニ可仕事

一障子新規張替可申事

一雨戸之事

但御椽通より御寝所御通ニと申候所ハ外雨戸ニ可仕、右御通ひ

無之有来之雨戸摺付候ハ、其俣ニ而御用立候而も可然候事

一御路次囲塀等等御見越罷成候所ハ矢切御補理可仕事

但御路次より御座之間へ直ニ被為入候所ハ御路次囲三間半四方

より狭ク而は御駕籠自由不罷成御用立申間敷候事

右付札

有来路次囲狭御駕籠廻不申とも指支申間敷候間新ニ路次囲相直

申候ニは及申間敷事

一御揚り口箱踏段ニ仕薄縁相懸竹縁打付ニ可仕事

但右踏段上へ御日除懸戸御補理仕御路次ハ老躰ニ散砂可仕事

右へ付札

御上り口先御路次口より被為入御縁頭<sup>(カ)</sup>江薄縁置候迄ニ而宜、併

路次口狭く御駕籠入不申別段ニ御上り口有之所ニ候ハ、有来踏  
段ニ而新ニ箱踏段拵薄縁打付等ニハ及申間敷、尤散砂ニも及申

間敷事

御小性頭方

一御刀懸并御手拭懸之事

但御仮等有之同所ニ有来候ハ、直ニ相廻し置可申、右様無之候

ハ、白木を以新規御拵可仕事

右付札

御刀懸并御手拭懸無之共御間似合候間新キ拵ニ及不申事

御小性頭方

一御立除之事

一御泊り所町場ニ候ハ、町より引隔候所ニ而寺院之類ニ而も心懸

可申事

但右場所へ新規薄縁等ニ而も心懸置可申、尤屋敷之内掃除并廻

り垣等手入仕置候計ニ而外ニ御補理ニ及申間敷事

一御騎馬座敷之事

但御座之間之次へ御座敷割可仕事

右へ付札

御座之間御次之間御寄場座敷之事ニ可在之候哉之事、左候ハ、  
有来之分御各別板天井長押付ニも及申間敷事

御小性頭方

一八畳敷位板天井長押付有来之分簀天井ニ而も見苦敷無之候ハ、其  
俣ニ而御用立候様可仕事

一襖見苦敷候ハ、張替可仕事

但見苦敷無之候ハ、はり替ニ及申間敷事

一腰張大方紙之類ニ可仕事

一障子新キ張替可仕事

一畳表替之事

但迫表中布縁可仕事

一路次囲 御座之間引続候ハ、其俣ニ可仕囲無之候ハ、苜簀中込入

ニ而相囲候様可仕事

一御物置之事

一拾三四畳より以上廿畳敷程ニ候得ハ宜敷物ニ相見得候所 右様

之座敷無之時ニは拾畳敷位ニ而も御間ニ合候義も相見得候処、

右様之節ハ同所詰役之話処右御物置続ニ而別之間心懸置候様仕

事

但御物置之義は何分廣き所吟味可仕、尤

御座之間近所ニ無之候而は罷成間敷 御座之間江之通用無之所  
ハ壁拔襖立ニ御補理可仕、尤同所ニ御湯殿江も内通ひ無之候而  
は相成申間敷事

右付札

御座之間御寝所之御次ニ之間へ通用罷成候様ニ而宜敷候、御風  
呂屋へ之内通ひハ無之候共宜敷候事

御小性頭方

一畳表之事

但迫表中布縁ニて可仕事、若新規同様ニ候ハ、表替ニ及申間敷  
事

右付札

御座之間御寝所計畳替仕御次ハ古立候共其俣ニ而指置、或ハ薄  
縁上敷等御用上壁煤ばみ色替りは不相構、襖障子茂右准シ令相

繕候様前々被仰出も在之此度も左之通ニ而可然候事

御小性頭方

一障子新規張替可仕事

一腰張大方紙ニ而可仕事

一炉無之候ハ、置炉ニ而も心懸置候様可仕事

右付札

新二箱踏段相付候ニも及申間敷事

一御次之間之事

御小性頭方

但八疊位之所御騎馬之次之辺へ座敷割可仕事

一御近習詰所之事

但座敷不足之所ハ別而座敷割不仕御物置詰合ニ吟味仕可然哉之事

右付札

一刀懸之事

御近習も御次詰ニ候間別座敷御補理ニ及不申表御小姓但御右筆

御茶道之詰処は無之候得ハ不相成事

一御物置并ニ御近習其外役々詰所御大所等ニ仕切之事  
但五腰懸七腰懸等ニくり刀懸ニ仕壁江打付ニ可仕候事

御小性頭方

右へ付札

一役々詰所之事

刀懸補理ニも及申間敷事

一廿四五疊敷位有来之家作其俣ニ而屏風仕切ニ可仕事

御小性頭方

但畳切損候ハ、薄縁敷可仕事

一手水蜘蛛手之事

一御座之間向<sup>ケ</sup>所其外役々詰所御大所迄御補理可仕事

但高三尺柱掘立土<sup>ノ</sup>文字ニ伐組可申事

右へ付札

一御大所之事

一大躰三拾五六畳より四拾敷位迄

但有来大所十間二候ハ、土俵<sup>カ</sup>建並抗打仮縁板張惣薄縁敷御大所御道具置所共ニ御用立同所役々詰所ハ屏風仕切畳敷ニ可仕事

一御膳立所之事

一老坪はん式坪位之所天井相付御補理可仕事

但右天井みかき實天井ニも可然事

一御湯殿并

御式便所之事

一式間半ニ式間左之図面之通り

但御湯殿御二便所とも板張杉皮葺ニ而老躰ニ相立可申、尤御座之

間向御椽通りより引続御通ひニ相出候様ニ相建可申事

但屋根の義ハ雨洩不申様ニ念入御拵可仕事

一左之絵図面之内三畳敷之所は畳敷ニ可仕候事

右へ付札

畳敷ニ無之薄縁敷ニ而も可然事

御小性頭方

一御式便所共片目表打付ニ可仕事

一御閑所へ御腰物懸并御鼻紙台共ニ御拵可仕事

一御湯殿へ御物置より内通ひ無之候ハ、廊下通相付可申事

但右廊下柱掘立臺苦葺幅三尺仮椽板張薄縁敷外囲簀中込御補理

可仕事

右へ付札

御物置より内通無之候共宜敷候事

御小性頭方

下夕舟出入	引戸	引戸
錠前付	板のし立	三畳敷
御湯揚口	板のし立	かはら共
前付錠	御湯殿	引戸
中門の狭間		

一御湯桶之所并風呂御道具置所之事

但長式間横式間位之所有来之小家等御風呂近所ニ有之候ハ、直ニ

御用立、若無之時ニは小屋懸ニ仕式坪位之所仮椽板張薄縁敷右御

道具置所へ外七間ニ而御釜相据置可申事

右へ付札

惣躰七間ニ而も可然事

御小性頭方

一張番所之事

一表御門脇并御立除裏御門脇御風呂や通用脇共二三ヶ所長巻間半

横巻間宛

但柱掘立桁たり木梁棟木共相付片屋根葺卸し垂木相懸はんしや

うからみゑすり抗藁苦葺三万囲式枚芦中挾菰入前方膝かくし共

御補理可仕事

一三ツ御道具立之事

一張番所巻ヶ所へ巻ヶ所宛

但柱式本立地へ同様横木相通し笠木へ右御道具相立候ヶ所三ヶ

所くり方御補理可仕候事

但表裏共ニ長屋有之所は右長屋之内御門脇之方仕切ニ而御用立

候様可仕事

一御提灯台之事

一表張番所へは式つ其外中ノ口迄巻つツ、

但高六尺下台十文字ニ伐組柱相立屋根板相付打釘等御補理可仕

事

一御簀御道具之事

一表張番所脇へ御仕切可仕事

但柱式本相立上下へ相通し御道具拾本立位ニ御補理仕置可申事

右へ御小性頭方白札付

右へ御付札

此所より末三ヶ條白札付之所は前々より御用立申旨此度迎も  
御拵候様首尾可仕事

御郡方

一御次風呂湯之事

一御物置脇へ式ヶ所位役々詰所式ヶ所位大所之方三ヶ所位取合七  
ヶ所位

但御補理の義ハ五尺四方位ツ、柱四本掘立上通り横木結三方廻  
り簀圍屋根板抗付御補理可仕事

一御駕籠置所之事

一長三間余ノ所ニ無之候而は御用立申間敷事

但表長屋等有之候所は右長屋之内七間之所ニ而も薄縁敷候而御  
用立候様可仕事

一御厩之事

一御召馬并御同勢馬共疋足ニ付幅七尺間横疋間はん外二前之方葺

卸し三尺共ニ

但前之方柱老間送り越式本立裏通り并両横共柱老間送り結付前

通り葺卸し柱共ニ掘立朋腹帶懸相通桁三通引名ニ梁相懸片屋根

垂木相懸軒前老通りからみふき藁葺三方廻り式枚簀中込入候  
筋結内通り仕切毎筋違木いたしかい結共ニ御補理可仕事

右御厩之義御召馬は勿論御同勢馬共ニ有来厩有之所は御掃除  
之上直ニ御用立残分は御補理可仕事

一御鷹部屋之事

一御鷹老据ニ付幅四尺奥行三尺位宛何れニも引続御補理可仕  
事

但家之内ニ而前書之通り仕切ニて相付留り木四五寸廻り唐竹高  
四尺位ニ結具座筵等相懸、尤猫犬等防き候様居家之内へ御補理

可仕事

右へ付札

右御鷹方御間合可被成御吟味候

御小性方

御付札

此所前々御鷹部屋御拵之姿ニ御座候間申間通りニ而可然と吟味  
仕事

御郡方

一御次閑所之事

但砂閑所ニ芦簀圍藁置ニ可仕事

右へ付札

数不足ニ而ハ致迷惑候間御物置詰御次詰并表御小性組等之内閑

所外御大所向は別段ニ仕切相成候様致度候事

御小性頭方

一所々御見通之所并取放し之ヶ所ニハ簀結切可申事

但御見通之所ハ式枚簀挾菰相入結方可仕、御湯殿御ニ便所後通

り芦簀垣結切御湯殿出入口御門芦簀相廻シ戸相付可申事

一中ノ口向通取放シ候ハ、芦簀垣結切出入口芦簀押廻シ戸相付

可申事

右付札

御補理ニ及申間敷事

御小性頭方

一惣廻り垣柴竹柄之類ニ結方可仕事

但有来惣廻り丈夫候ハ、其俣ニ而可然事

一御村賄所之事

一御大所近所居家長十間横式間位之处

但掃除沓篇并障子張替等ニ而御用立可申事

一御膳水井之事

但井水替方之上板蓋新規御拵可仕事

一前書御座敷割並ニ惣御供下宿割之義ハ絵図面を以相伺候上首尾可

仕事

御昼所御補理之事

一御座之間次之間共ニ御泊り所同様之事

一御物置御補理ニ及申間敷事

一張番所之事

一表張番沓ヶ所中ノ口沓ヶ所御立除沓ヶ所取旦三ヶ所三ツ御道具

立共

御泊り所同様御補理可仕事

右へ御小性頭方白札付也

一御手鍬立沓ヶ所

但柱式本立高サ式尺四五寸位上下横木相通シ御鍬結繩相付石付



共相付御補理可仕事

一大中小并ニ御飭御道具建之事

但御泊り所御飭御道具立同様之御補理可仕事

右へ御小性頭方白札付

一御供役々詰所之事

一拾疊敷位并式拾四五疊敷位之所式間位屏風仕切ニ而御用立可申

事

一御大所之事

一御泊り所同様廣キ所吟味可仕事

但屯間之所ハ仮板椽張迄ニハ及申間敷候、薄縁敷計ニ而御用立

候様可仕事

一御膳大所之事

一御泊り所同様天井相付御補理可仕事

一御二便所之事

一砂御用所ニ御補理可仕事

但七尺四方位之内 一御小便所長四尺横三尺

御閑所四尺四方三尺通御通椽

右間敷之通柱掘立芦簀懸藁古葺惣廻り式枚簀ニ而相囲内通り御

踏板計相付押廻之芦簀戸相付御補理可仕事

一手水蜘蛛手之事

一御泊り所同様御拵可仕事

御小性頭方

一所々御見通御幕張并芦簀垣結切可申事

一惣廻垣 御泊り所同様之事

右へ付札

御泊り所同様ニ無之候共何分被相繕可然事

御小性頭方

一御馬繋キ所之事

一長横間敷御泊り所同様之事

但前後柱式本宛置相立上通り横木并ニ朋腹帶懸十文字筋違木い

たしかい結付御召馬之分ハ屋根磨簀相懸六符菰相懸御補理可仕

事

右へ付札

御日帰り御野等御昼所へ御補理之通ニ而可然事

御小性頭方

一 御鷹繫キ処之事

一 御泊り所同様居家之内へ御補理可仕事

但三間ニ式間位之所ニ候ハ、両側江御補理留り木四五寸廻り唐

竹ニ而引通シ、高四尺位ニかげ渡ニ仕切無之ニ（二）据切二三尺

位宛引放シ不口木へ新建并ニ吳座相懸御拵可仕事

右ハ御日帰り御野并ニ寒鴨之節共ニ名取ニ而御拵罷成来由之事

一 御付賄所之事

一 御泊り所同様之事

御休所御補理方

一 御座之間御次共ニ御昼所同様之事

但急ニ御行懸被仰出御小休所ハ薄縁敷一辺外ニ御補理可仕様無

御座候事

右へ付札

御昼所同様ニ無之共随分手輕ニ御補理相成可然候事

一 御近習其外役々とも屏風仕切等ニ而外ニ御補理無御座事

一 御手鑑立所之事

但御昼所同様之事

一 御野御仕舞場ニ罷成候節之御小休所ハ大中小并ニ御飭道具立所御馬繫キケ所共ニ御仕切可仕事

右へ御小性頭方より白札付也

右へ付札

此所是迄御拵不仕候間、改而御拵為仕ニ及申間敷と吟味仕事

御郡方

一 御二便所之事

一 砂御二便所紺幕はり

但間敷御昼所同様柱沓間送り越三本宛相立屋根磨<sub>（一）</sub>實相懸候上

六符編菰相懸磨實<sub>（一）</sub>圀之上こん御幕はり内通り御踏板ニ而補理可

仕事

一所々御見通シ御幕張并ニ荳實垣結切可仕事

所々御遠見其外諸漁場等

御覽所之事

一式間四方位

但四方杭相立上通り四方并ニ中通り共唐竹結付御白除屋根磨<sub>（一）</sub>芦

簀懸三方御幕はり下敷菰敷薄縁敷可仕、御次通右へ引続御幕張

計二而薄縁敷可仕事

一御二便所之事

但砂御二便所御小休所同様御仕切可仕事

御野合御昼之事

一御昼所之事

但長式間横老間はん位御前通柱式本立、其外一間送り越式本宛

相立屋根打懸二相成候様梁桁木共結付、屋中式通垂木相懸番匠

杭付磨芦簀相懸臺占葺三方囲磨芦簀両面へ中狹菰入三通り筋結

下敷菰敷薄縁敷渡、同所浦之方へ御物置長式間横一間御昼前へ

御通用口半間相付屋根并惣囲共前書同様御幕張御次御昼所へ引

続半間程為引込、屋根も少々低く取付長三間横老間半くらひ屋

根相懸候様芦簀懸六符編菰敷渡候三方簀囲御幕はり可仕事

一御大所御次浦通へ引続老間はん四方位柱老間違越三本立屋根仕候

様右同断芦簀懸計三方芦簀囲老通りを以御補理可仕事

一御手鍬建所老ヶ所

但杭式本立高サ式尺五六寸程上下横木結付御鍬結縄相付御拵可

仕事

一御道具建所老ヶ所

但幅老間半位八九寸より老尺廻り位杭式本相立、上下横木結御

道具結縄相付大中小并二御飭御道具建所御補理可仕事

右へ御小性頭方白札付此所御野合御列二而御通行之節は御拵仕

御野被遊老篇之節は是迄御持鍬計被相建所御拵仕来り外御拵不

為仕候事

御郡方

一御厩之事

但御昼所同様御補理可仕事

一御鷹繫ヶ所之事

一御鷹老据二付幅四尺奥行三尺位宛何れ二而も引続御補理可仕事

但老据毎前後柱送り越式本宛相立屋根相懸候罷成候様共垂木相

懸芦簀懸之上六符菰かげ渡三方囲芦簀中仕切共同様、留り木と

も四五寸廻り唐竹高サ四尺程引通新規并二呉座相懸御補理可仕

事

一御二便所之事

但砂二便所前書同様之事

一御囲敷地拾四五間四方伐剥ぎ場並ニ拵可仕事

一御次閑所之事

但四尺五寸四方柱四本立入口へほら立結屋根實相懸廻り實囲内<sup>(カ)</sup>

土俵式表結御補理可仕事

一惣廻り御幕張ニ仕事

右之通吟味仕事

文政五年

二月

右写之通相達御下知相渡候間其心得首尾有之早速写取大急可差戻候  
已上

鈴 善之<sup>(「丞」カ)</sup>  
進

六月

黒川 加美郡

志田 玉造

大肝入衆中

尚以差懸具合ニ相入候間来ル十五日迄ニ可差戻候

右写之通被仰渡候間委曲書面之趣を以首尾有之大急写取被指置順達

受判通より無延引可被指戻候、已上

大肝入

千葉甚助

文政五年

六月十三日

鳴子村

大口村

岩出山

右村々肝入衆中

外郡中

同役衆中

尚以各老人前毎ニ受取渡日相記達可在之候、已上

【25】藩主居所の件吉郎右衛門申上(下・189)(2)

玉造郡大口村川渡御湯守吉郎右衛門御聞届被仰渡承知仕乍恐口上  
書を以奉申上候御事

拙者儀川渡御湯守二御座候処此度御郡奉行様御廻村二付拙者方  
御宿可申上旨被仰渡承知仕、先規之通彈正様御次之間ニ補理御宿申  
上候所、御上座指除御次間ニ御宿申上候儀何様之訳ニ可有之哉可申  
上旨被仰渡承知仕、全躰先年彈正様御飯屋拙者先程代建方指上其後  
文政之年ニ

(伊達齊義)  
正山様御出馬、尚又天保拾老年

(伊達齊那)  
龍山様御入湯被遊候ニ付其以後、御殿卜拵上候様被仰出候之由、  
尤其節御上之間江ハ、屋形様御入湯、且亦彈正様御入湯之外御一門  
様方御入湯ニ而茂表立御借受相成候節は格別、御着等之節は御次之  
間より御用立置申候儀ニ御座候、尤彈正様より茂、屋形様御入湯以  
後ハ御上之間平生訖度不取、無御座様可仕品々被仰渡置候ニ付、先  
規へ計相泥御次之間ニ御宿申上候所、追々勘弁仕候得ハ前以彈正様  
申上候上御上座江御宿可申上義無御座義不心付先規通ニ而可然卜相  
泥御次之間江御宿申上候義ハ今更御不審之上可申上様無御座不相入  
至極ニ奉存候間、此已後右同所様へ前以申上候上御上座江御宿申上

候様可仕奉存候間右之外可申上様無御座候間、宜敷被仰上候様被成  
下度拙者共連名を以如此申上候、以上

大口村川渡御湯守并  
組頭

吉郎右衛門(印)

慶應三年

四月

同村飯肝入

養右衛門(印)

大肝入

遊佐甚之丞殿

【26】御飯屋建方の件吉郎右衛門請願書(下・190(1))

玉造郡大口村御百姓組頭川渡御湯守吉郎右衛門奉申上候御事  
去月十二月御郡奉行様御廻村ニ付拙者ニ而御宿申上候様被仰渡前々  
之通り、彈正様御飯屋之内御上之間相除御次之間ヲ御補理上御宿申  
上候所、其節御次之間江御宿申上候義は勿論御飯屋忸卜申唱候義は

何様之訳ニ可有之哉可申上旨御順々被仰渡候ニ付其節委曲申上候通  
りニ御座候所、右之内御仮屋相建候節、御同所様ニ而御達被成置候  
義は勿論、拙者先祖代願申上御下知之上相建候家作ニも無御座候段  
申上候処、追々右之趣、御同所様御向役江申上候得は根元御仮屋御  
建方相成候節は此方様ニ而御建相成如御願達之御下知相済居、就而  
は杉植立御林も被下置夫々御指図之上御普請相成、尤御上之間は此  
方ニ而指図無之内ハ縦令何様之義有之候とも明渡し自由難成段夫々  
申渡置候通ニ候所、年来過去候義ニ候得は折入穿鑿之上可申上義ヲ  
一己之了簡泥違ヲ以先祖代自分入料ニ而相建候段相達候訳ニ可有之  
候得共、深ク不致吟味僞忽申上臨時之御用聞ニも相至候所、御仮屋  
之義は前書之通ニ候間、達直置候様御向役様より品々被仰渡候間御  
取受御吟味被成下度奉存候、最初拙者義不心得ニ付僞忽之義申上候  
段は不折入分念至極土貢可申上様無御座候間、御吟味捨り被成下前  
書之趣共ニ宜敷被仰上候様被成下度奉願候、以上

大口村川渡御湯守

組頭願人

吉郎右衛門（印）

慶應三年

五月

仮肝入

養右衛門殿

格<sup>（右カ）</sup>之通申出候所宜敷御首尾被成下度此段申上候、已上

同村仮肝入

養右衛門（印）

同年

同月

大肝入

遊佐甚之丞殿

## 『上巻』及び『下巻』分目録凡例

- 一、本目録は、『川度温泉史 上巻 玉造郡大口村川度御湯守 藤嶋吉郎右衛門文書』(『上巻』) 収載分、及び『下巻』収載予定であった文書のものであり、以前に作成されていた目録カードと二〇〇四年六月以降の調査において撮影した原文書の記載を基にして作成したものである。
- 二、各史料の記載項目は以下の通りである。  
No. 枝(番)、表題(内容)、日付、西暦、差出人、宛名、形態、点数、状態・備考
- 三、史料の破損・散逸等により原文書の撮影が叶わなかった分については、目録カードの記載を参照して、表題・日付・西暦・差出人・宛名を表記し、他の項目に関しては表記を省略した(原文書撮影の可否については解題《参考文献》拙稿の目録を参照されたい)。
- 四、No.は原則として目録カードに付されたものに拠っている。
- 五、表題は、史料の冒頭に記されている場合はそれを採用した。ないものについては、(一)内に適宜内容に即した表題を記した。ただし、原文書が確認できなかった場合は、カード目録の記載を元

に(一)内に表題等を記した。この際、「書状」などといった表題表記は行っていない。

- 六、日付・差出人・宛名については、原則として史料の記載のままに表記し、名前と名前の間は「」、肩書きと名前の間は「・」でつないでいる。日付が記されていないが比定可能なものは(一)付きで表記した。原文書未確認の場合は、カード目録記載の日付を(一)付で表記した(算用数字)。差出人・宛名は一紙物に記載されている分のみを表記し、綴り、冊子形態のものは省略した。
- 七、点数について、一紙物で断簡や前後欠により史料の全容が把握できないものは「枚」、それ以外は「通」とした。
- 八、撮影が可能であった史料についても、全般的に破損の見られるものが多かったため、状態や備考の欄に「破損甚」・「継ぎ目とれ」・「綴じひもとれ」などの表記は行っていない。
- 九、漢字は原則として常用漢字を使用した。判読不可能な箇所は、「□」及び「」で表している。

『上巻』 目録

No.	枝	表題 (内容)	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
1		乍恐玉造郡大口村御百姓奉願 候御事 (百姓中ニ而川渡御湯 役被仰付度願)	享保廿年八 月三日	1735. 8. 3					
2		玉造郡大口村肝入利右衛門申 上候覚 (同村御百姓名子共御 湯守被仰付被下置度由願并湯 守十助只今迄之通御湯守ニ被 成下度由願など御吟味被成下 度奉存候)	享保廿一年 五月七日	1736. 5. 7			横長帳 か	1 冊	
3		(御村の者共御吟味成し難く 願書相返され候達)	元文元年五 月廿六日	1736. 5. 26					No57 と殆ど 同文。所在 不明。
4		(玉造郡大口村川渡出湯御役 の義達)	元文元年六 月十八日～ 同十一月九 日	1736. 6. 18 ～11. 9			横長帳 か	1 冊	No57 はこれ をまとめた ものか。
5		(欠番か)							
6		(川渡出湯御役代九拾貫文を 以永く御湯守成下れ度旨達)	寛政拾二年 二月五日	1800. 2. 5					袋入 6, 7 共、袋表紙 に「岩出山 之者御湯守 糺合巻」とあり。
7		追訴願書申上候巻之事扣 (御湯守取続候様被成下度 願)	(寛政十二 年) 正月十 五日	1800. 1. 15					
8		玉造郡大口村御百姓川渡御湯 守吉郎右衛門乍恐申上候御事 (御湯守吉郎右衛門御受状差 出延引不念之段申上)	寛政十三年 正月九日	1801. 1. 9					
9～14		(欠番か)							
15, 16		御出馬寓所(諸式)							
17～19		(欠番か)							
20		出湯方御用留帳	(慶応二 年) 寅十一 月～明治五	1866. 11～ 1872. 2. 6			横長帳	1 冊	



No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
			年二月六日						
21～30		(欠番か)							
31		玉造郡大口村川渡御百姓御湯 守吉郎右衛門乍憚奉申上候御 事（御湯守取続候様仕度奉願 上候）	寛政拾貳年 二月	1800. 2	玉造郡大 口村川渡 御百姓御 湯守・吉郎 右衛門、同 組頭・助 八、同村仮 肝入・善八	大肝入・樋 渡藤吉殿	縦紙	1 通	実際のNo31 は、「玉造 郡鳴子村大 口村両村御 湯守共奉願 上候御事」 という横長 帳の文書。 これはNo91 の誤りか。
32～34		(欠番か)							
35		(御下知写)	(元文元 年) 辰ノ八 月廿二日～ 九月十一日	1736. 8. 22 ～9. 11					No57 の原 文。
36		(大口村天明文、二、三年所々 出湯御運上代の義書出べき 達)	六月廿九日	6. 29	大肝入・千 葉甚助				
37		写し（湯銭之義菊地丈之進達）	八月廿二日	8. 22	菊地丈之 進				
38		猶々受状之義も早速申出候様 是亦首尾被成候様仕度候以上 （川渡出湯御運上代向五ヶ年 湯守吉郎右衛門受負ニ被仰渡 件）	（寛政十二 年）二月廿 九日～三月 十五日	1800. 2. 29 ～3. 15			横長帳	1 冊	
39		(欠番か)							
40		(出湯方御用留)	寛文十三年 三月十七日 ～寛保三年 六月	1673. 3. 17 ～1743. 6					No41 と合 綴。『川渡 温泉史』・ 目録には枝

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
									番があるが、ここでは御用留としてまとめた。
41		出湯方御用留帳	嘉永六年十二月～元治 式年四月	1853. 12～ 1865. 4	川渡御湯 守・吉郎右 衛門				本書史料番号【3】・【17】。
42, 43		（欠番か）							
44		陸前国第七大区玉造郡小巻区 大口村温泉場毎書上	明治六癸酉 年八月	1873. 8					No249 と殆ど同文。
45		温泉稼税願書控（第七大区三 小区大口村）	明治七年九 月	1874. 9	大口村証 人・阿部磯 蔵、三小区 副長・岡本 勇吉	権令代 理・水沢県 参事・吉岡 信敬殿			
46		温泉稼税願書控（第七大区三 小区大口村）	明治七年九 月	1874. 9	大口村証 人・副戸長	権令代理			No45 と同文か。
47		温泉稼税願書控（第七大区玉 造郡三小区大口村）	九月十日	9. 10	藤島吉郎 右衛門				No45, 46 と ほぼ同文。
48		藤島吉郎右衛門止宿人員調	明治十七年 十月十五日	1884. 10. 15	玉造郡大 口村百拾 九番地・旅 人宿営業 人・藤島吉 郎右衛門	鳴子分署 御中			
49		乍恐玉造郡大口村重助奉願御 事（只今之通ニ御湯守御慈悲 を以願之通ニ被仰付被下置度 奉願候）	享保廿一年 二月廿三日	1736. 2. 23	玉造郡大 口村御百 姓・重助、 同郡同村 与頭・半兵 衛	肝入・利右 衛門殿			
50		乍恐玉造郡大口村御百姓十助 奉願御事（御村湯願出ニ付十 助御湯守継続願など）	享保廿年五 月	1735. 5					
51		乍恐玉造郡大口村御百姓十助 奉願御事							No52 と同 文。

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
52		乍恐玉造郡大口村御百姓十助 奉願御事（御役之義何程ニ御 座候共御積りを以被仰付候 は、難有拙者義上納仕御湯守 被仰付被下置度奉存候）	享保廿年五 月廿四日	1735. 5. 24	玉造郡大 口村御百 姓・重助、 同郡同村 組頭・半兵 衛	肝煎利右 衛門殿			
53		乍恐玉造郡大口村御百姓中奉 願御事	享保廿年五 月廿九日	1735. 5. 29					No56 とほぼ 同文。
54		大口村組頭四兵衛申上候御事 （組合之者連判狀取次不仕ニ 付訳釈明）	享保廿年十 二月七日	1735. 12. 7					
55		（十助御湯守継続願書）	享保廿年十 一月廿九日	1735. 11. 29	御百姓 中・与頭 中・内四兵 衛与五平 授ル				前欠。
					与頭中	肝入・利右 衛門殿、検 断・太郎左 衛門殿 (カ)			
56		乍恐玉造郡大口村御百姓中奉 願御事（川渡、鷺巣御湯守御 百姓中江被仰付被下置度奉願 候）	享保廿年五 月廿九日	1735. 5. 29	長覺坊他 65 名				
					与頭・儀兵 衛他与頭 11 名	肝煎・利右 衛門殿、検 断・太郎兵 衛殿			
57		（書状、御村之者共湯守願難 成下知）	元文元年五 月十四日～ 十一月九日	1736. 5. 14 ～11. 9	斉藤清右 衛門、菊地 安太夫	大肝入・伊 藤儀太郎 殿	横切継 紙	1 通	
					青木庄吉、 萱三郎右 衛門	斉藤清右 衛門殿、菊 地安太夫 殿			

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
					与之助、三郎右衛門、権六				
					菊地安太夫、才藤清右衛門	大肝入・伊藤儀太郎殿			
					青木庄吉、平次兵衛	斉藤清右衛門殿、菊地安太夫殿、四人定役衆中			
					大口村肝入・利右衛門	大肝入・伊藤儀太郎殿			
					玉造大肝入・伊藤儀太郎	斉藤清右衛門様、菊地安太夫様、湯山仲右衛門様			
					玉造大肝入・伊藤儀太郎	斉藤清右衛門様、菊地安太夫様			
					菊地安太夫、斉藤清右衛門				
58		(欠番カ)							
59		志田郡師山村御百姓吉内親武右衛門乍恐奉願候御事（武右衛門川渡湯守被仰付候様被成下度奉願候）	明和四年正月～二月	1767.1～2	志田郡師山村御百姓吉内親・武右衛門、右武右衛門人頭・吉内、同郡同村御百姓受人・長九郎、	同村組頭・五郎右衛門殿	縦継紙	1通	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
					同村組 頭・五郎右 衛門、同村 肝煎・太左 衛門	大肝煎・日 野甚吉殿			
60		志田郡師山村御百姓吉内親武 右衛門乍恐追々奉願候御事 （武右衛門川渡湯守追願）	明和四年二 月	1767.2	志田郡師 山村御百 姓吉内願 親・武右衛 門、同郡同 村御百姓 請人・長九 郎		縦継紙	1 通	
					同村組 頭・五郎右 衛門、同村 肝入・太左 衛門	大肝入・日 野甚吉殿			
61		乍憚口上書を以奉願上候御事 （川渡湯守治左衛門の湯守継 統願と大肝入渋谷平右衛門の 添状）	明和五年四 月	1768.4	玉造郡大 口村御百 姓同所出 湯御湯 守・治左衛 門、同村組 頭・五右衛 門	肝入・三右 衛門殿			No.73 と同 文。
					大口村肝 入・三郎右 衛門	大肝入・渋 谷平右衛 門			
					玉造郡大 肝入・渋谷 平右衛門	丈之進様			
62	1	乍憚口上書を以奉願候御事					縦継紙	1 通	棒引抹消。 断簡共。No. 61 と同文。 下書きか。
62	2	乍憚口上書を以奉願候御事					縦継紙	1 通	棒引抹消。 No.61 と同文 か。

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
63		乍憚口上書を以奉願候御事							棒引抹消。 No61 と同 文。下書き か。
64		（治左衛門川渡湯守継続願 書）	明和五年六 月	1768. 6	大口村川 渡御湯 守・治左衛 門、同村組 頭・惣左衛 門（印）、 同組頭・五 右衛門	肝入・三郎 右衛門殿	縦継紙	1 通	前欠。棒引 抹消箇所あ り。
65		乍憚奉願口上覚（治左衛門川 渡湯守継続願書）	明和五年六 月	1768. 6	大口村川 渡御湯 守・治左衛 門、同村組 頭・五右衛 門	肝入・三郎 右衛門殿	縦継紙	1 通	
66		玉造郡大口村川渡御湯守治左 衛門申上候御事（御役錢之義 内蔵様より御吟味を以被仰渡 次第品々可申上候）	明和五年七 月	1768. 7	大口村御 湯守・治左 衛門、同組 頭・五右衛 門	肝入・三郎 右衛門殿	縦継紙	1 通	端裏書に 「七月二日 朝治左衛門 平四郎同道 三郎右衛門 方へ相出 ス」とあり。
67		乍憚口書を以追々願申上候御 事（治左衛門川渡湯守継続願 書）	明和五年八 月	1768. 8	大口村川 渡御湯 守・治左衛 門（印）、 同組頭・五 右衛門 （印）	肝入・三郎 右衛門殿	縦継紙	1 通	端裏書あ り。
					同村肝 入・三郎右 衛門	大肝入・洪 谷平右衛 門殿			

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
68		玉造郡大口村川渡御湯守治左衛門又以奉願候御事（治左衛門川渡湯守継続願書）	明和五年十一月	1768. 11	大口村川渡御湯守・治左衛門、同村組頭・五右衛門	肝入・三郎右衛門殿	縦継紙	1 通	「玉造大肝入・渋谷平右衛門」から「喜三郎様、丈之進様」宛の断簡共。
					大口村肝入・三郎右衛門	大肝入・渋谷平右衛門殿			
69		玉造郡大口村川渡御湯守治左衛門申上候御事（治左衛門川渡湯守継続願書）	明和六年十一月	1769. 11	大口村川渡御湯守・治左衛門、組頭・平左衛門	肝入・三郎右衛門殿	縦継紙	1 通	
70		玉造郡大口村川渡御湯守治左衛門申上候御事（出湯御役代の件）	明和七年正月	1770. 1	大口村川渡御湯守・治左衛門、同村組頭・平左衛門（印）	肝入・三郎左衛門殿、三右衛門殿	縦継紙	1 通	付札あり。No.71 とほぼ同文。
71		玉造郡大口村川渡御湯守治左衛門申上候御事（湯治人数など報告）	明和七年正月	1770. 1	大口村川渡御湯守・治左衛門、同村親類・惣左衛門、同村組頭	肝入・三右衛門殿	縦継紙	1 通	
						千葉庄右衛門様、猪狩惣太夫様			
72		玉造郡大口村川渡御湯守治左衛門申上候御事（湯治人数を重ねて報告）	明和七年二月	1770. 2			縦継紙	1 通	
73		乍憚口上書を以奉願上候御事（治左衛門川渡湯守継続願書）	明和五年三月	1768. 3	玉造郡大口村川渡御湯守・治左衛門（印）		縦継紙	1 通	この文書の清書とみられる他文書（縦継紙）1 通付属。

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
74		(欠番か)							
75		玉造郡大口村川渡御湯守吉郎 右衛門乍恐口上書を以奉御披 露候御事（同村養助湯治人宿 仕度義ニ付吉郎右衛門意見申 上）	寛政五年三 月	1793. 3	御湯守願 人・吉郎右 衛門（印）、 同名子願 人・利左衛 門（印）、 組合・平左 衛門（印） （他組合7 名、与頭1 名）	肝入・兵吉 殿	縦継紙	1 通	
76	1	大口村肝入兵吉申上候御事 （養助願出に付村内の状況報 告と吟味願）	（寛政五年 か）六月	1793. 6	大口村肝 入・兵吉				
76	2	玉造大口村組頭共申上候御事 （養助方新出湯之義ニ御座候 間村方不相痛様村定可仕候）	寛政五年六 月	1793. 6	大口村肝 入・八郎兵 衛、同仮組 頭・安太 郎、同組 頭・太郎兵 衛（他組頭 8名、仮組 頭2名）	肝入・兵吉 殿			
76	3	（養助申し出に付大肝入渋谷 三右衛門申状）	五月	5	大肝入・渋 谷三右衛 門	勘右衛門 様			「熊勘右衛 門」差出、 「渋谷三右 衛門」宛の 付札あり。
77		(欠番か)							
78		乍恐奉願候御事（吉郎右衛門 御役二十六貫文での湯守受継 願）	寛政拾年四 月	1798. 4	大口村川 渡湯守・吉 郎右衛門、 同親類受 合人・吉左 衛門、同組 頭・助八、 同仮肝 入・源蔵	御金山下 代・和泉林 左衛門殿、 門脇新右 衛門殿	縦紙	1 通	



No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
79		(欠番か)							
80		奉指上御請状一札之事（御運上代無滯上納可仕候事など十ヶ条）	寛政拾年十二月	1798. 12	玉造郡大 口村川渡 御請負人 湯守・吉郎 右衛門、右 請合人・利 左衛門		縦継紙	1 通	端裏書に 「御金山下 代衆請状下 書事」とあ り。
81		玉造郡大口村川渡御百姓御湯 守吉郎右衛門乍恐奉願上候御 事	寛政十歳十 二月	1798. 12					No85 と同 文。
82		玉造郡大口村川渡御百姓御湯 守吉郎右衛門乍恐奉願上候御 事	寛政十歳十 二月	1798. 12			縦継紙	1 通	端裏書に 「寛政拾年 十二月大肝 入衆願申出 候扣也 老 番三日願指 添」とあり。 No85, 81 と 同文。
83		大口村御百姓御湯守吉郎右衛 門乍恐奉願候御事（御金山並 ニ御請状指上敷地等迄御金山 同様ニ被相行候義至極ニ無拋 御吟味被成下候様奉願上）	寛政拾年十 二月	1798. 12	大口村御 百姓御湯 守・吉郎右 衛門（印）、 同名子・利 右衛門、同 組頭・助八 （印）	同村肝 入・兵吉殿			
84		乍恐奉願候御事（川渡之義御 竿地御年貢高より相出候湯之 義ニ御座候間御金山御山例被 仰付之義御吟味被成下度）	寛政拾年十 二月	1798. 12	大口村川 渡御百姓 御湯守・吉 郎右衛門、 同組頭・助 八	同村肝 入・兵吉殿	縦継紙	1 通	
85		玉造郡大口村川渡御百姓御湯 守吉郎右衛門乍恐奉願上候御 事（御役錢御上様御積り御見 当ヲ被仰付御百姓御湯守兼合 永続相勤候様被成下度奉願	寛政十歳十 二月	1798. 12			縦継紙	1 通	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
		上)							
86		大口村御百姓御湯守吉郎右衛門 門下恐奉願候御事	寛政拾年十二月	1798. 12			縦継紙	1 通	棒引抹消。 No83 とほぼ同文。
87		玉造郡大口村川渡屋敷御百姓 御湯守吉郎右衛門下恐追訴ヲ 以奉願上候御事（御役錢ハ何 程ニ而茂御上様御積ヲ以被仰 付永久之御百姓御湯守被成下 度追訴ヲ以奉願上候）	寛政拾壹年三月	1799. 3	大口村・吉 郎右衛門、 利左衛門、 助八、兵吉		縦継紙	1 通	袖書、端裏 書あり。
88		玉造郡大口村川渡屋敷御百姓 御湯守吉郎右衛門下恐追訴ヲ 以奉願上候御事	寛政拾壹年三月	1799. 3					袖書に「御 覧ニ相入候 願書 三月 之下書」と あり。No87 とほぼ同 文。
89		玉造郡大口村御百姓御湯守吉 郎右衛門下憚奉願上候御事 （御役代之義は何分御上様御 吟味御見積リヲ以是迄通永続 御百姓御湯守被成下度奉願 上）	寛政拾壹歳十二月	1799. 12	玉造郡大 口村川渡 御百姓御 湯守願 人・吉郎右 衛門、同郡 同村組 頭・助八、 肝入・兵吉	大肝入・樋 渡藤吉殿	縦継紙	1 通	
90		玉造郡大口村川渡御百姓御湯 守吉郎右衛門下憚奉願上候御 事	寛政拾壹歳十二月	1799. 12	大口村川 渡御百姓 御湯守・吉 郎右衛門、 組頭・助八	肝入・兵吉 殿			No89 とほぼ 同文。
91		(欠番か)							

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
92		奉指上御請状一札之事（御運上代無滯上納可仕候事など十ヶ条）	寛政拾貳年四月	1800. 4	玉造郡大 口村御百 姓川渡御 出湯御受 負人御湯 守・吉郎右 衛（印）、 同受合 人・養助 （印）、大 口村肝 入・兵吉 （印）	大肝煎・樋 渡藤吉殿、 御金山下 代・和泉林 左衛門殿、 同・佐竹平 左衛門殿	縦紙	1 通	断簡3枚 （付紙）共。 本書史料番 号【1】。
93		玉造郡大口村川渡屋敷御百姓 御湯守吉郎右衛門乍恐奉願上 候御事（当歳計半御役銭ヲ以 被召上残半欠は明歳迄御繰越 し被成下度奉願上）	享和二年十 月廿九日	1802. 10. 29			縦継紙	1 通	
94		玉造郡大口村川渡屋敷御百姓 御湯守吉郎右衛門乍恐奉願上 候御事（半御役銭ヲ以当年計 も被召上候様被成下度奉願 上）	享和二年十 月廿九日	1802. 10. 29	大口村御 百姓御湯 守右願 人・吉郎右 衛門（印）、 同村組 頭・養助 （印）  大口村肝 煎・兵吉 （印）	肝入・兵吉 殿  大肝煎・樋 渡藤吉殿、 御金山下 代・和泉林 左衛門殿	縦継紙	1 通	本書史料番 号【6】。
95～130		（欠番か）							
131	1	乍恐玉造郡大口村御百姓中奉 願候御事（川渡、鷺巣御湯役 代の件）							後欠。No234 の案文か。
131	2	乍恐玉造郡大口村御百姓中奉 願候御事（川渡、鷺巣御湯役 代の件）							後欠。No234 の案文か。

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
132		大口村川渡出湯之儀ニ付此度 落居申覚（卯時役、御伝馬役 の件など5ヶ条定）	三月廿二日	3. 22	善助（印）、 市兵衛 （印）、正 蔵（印）、 与平次 （印）（他 32名）	平左衛門 殿、五右衛 門殿、喜右 衛門、弥四 郎殿、利右 衛門、太郎 兵衛殿、長 覚坊殿			帯に「当村 より三十四 人之者出湯 相望候ニ付 定老巻」と あり。
133		大口村御百姓御湯守吉郎右衛 門乍恐奉願候御事					縦紙	1 通	No.83, 86 と ほぼ同文。
134		（欠番か）							
135		乍憚口上書を以追々申上候御 事					縦継紙	1 通	付紙共、後 欠、棒引箇 所あり。No. 67 と同文。
136		玉造郡大口村川渡屋敷御百姓 御湯守吉郎右衛門乍恐奉願上 候御事					縦継紙	1 通	No.94 とほぼ 同文。
137	1	（湯守継続願書）							前後欠。
137	2	（湯守継続願書）							前後欠。
138		（出湯場御役代書上）	八月十八日	8. 18					
139		玉造郡大口村川渡御百姓御湯 守吉郎右衛門乍恐奉願上候御 事（御金山支配被相除是迄之 通りニ相行候様御吟味被成下 度奉願上）	寛政十歳十 二月日	1798. 12	玉造郡大 口村川渡 御湯守・吉 郎右衛門、 同名子利 左衛門				袋共（No.139 ～155 まで 入る）。
140～146		（欠番か）							
147		（川渡出湯御役代出増調書）	寛政拾年八 月～十一月 九日	1798. 8～ 11. 9			横長帳	1 冊	付紙2 枚あ り。
148		（欠番か）							
149		（川渡湯当年計二十六貫文運 上相済候達書）	（寛政十年 か）六月二 日～十月十 八日	1798. 6. 2～ 10. 18			横長帳	1 冊	付紙2 枚あ り。
150		（川渡湯当年計二十六貫文運					横長帳	1 冊	No.149 と同

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
		上相済候達書)							文。
151～155		(欠番か)							
156	1	寛政拾老年十二月十二日扣写 出湯之沓巻（川渡御役請負の 件、歴年の御役代調べなど）	寛政拾老年 十二月十二 日	1799. 12. 12					No156 (2) 、 157 と合綴。
156	2	鳴子湯元之沓巻（御金山下代 達、鳴子村御湯守願書など）							後欠。
157		温泉試掘奉願候書附（玉造郡 大口村温泉試掘願）	(明治五 年) 壬申六 月七日	1872. 6. 7	郷宿・白土 治左衛門				
158～160		(欠番か)							
161		乍恐奉窺候御事	寛政十歳十 二月	1798. 12					No84 と同 文。
162～167		(欠番か)							
168		(川渡出湯御役代出増調書)					横長帳	1 冊	No147 と同 文。
169		(大丞川渡湯守吉郎右衛門継 続願書)	寛政十一年 三月	1799. 3			横長帳	1 冊	
170		玉造郡大口村川渡御百姓御湯 守吉郎右衛門乍憚奉願上候御 事	寛政十一年 十二月	1799. 12			横長帳	1 冊	No89 とほぼ 同文。
171		玉造郡岩出山町五ヶ町検断共 乍恐追願申上候御事（川渡温 泉御運上ヲ以岩出山五ヶ町請 負願）	寛政十一年 十二月	1799. 12	岩出山本 町中町検 断・清蔵、 同下町柳 町検断・半 太郎(か)、 同所仮 (か) 肝入 新町同・唯 右衛門	大肝入・樋 渡藤吉殿	横長帳	1 冊	
172		岩出山之者共願書被相渡写之 事（玉造郡大口村之内川渡温	寛政拾老年 十二月廿二	1799. 12. 22			横長帳	1 冊	表紙脇に 「但し此方

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
		泉同郡岩出山本郷5ヶ町江増 運上ヲ以湯守御請負被仰渡候 様被成下度奉願	日						様へ壱通肝 入方へ壱通 利左衛門方 へ壱通四冊 之内」とあ り。
173		玉造大口村肝入兵吉申上候御 事（兵吉による川渡湯守吉郎 右衛門継続申立）	寛政拾老年 十二月	1799. 12	大口村肝 入・兵吉	大肝入・樋 渡藤吉殿	横長帳	1 冊	
174		岩出山之者共願書被相渡写之 事（玉造郡大口村之内川渡温 泉同郡岩出山本郷五ヶ町江増 御運上ヲ以湯守御受負被仰渡 候様被成下度乍恐奉願）	寛政拾老年 十二月廿二 日	1799. 12. 22			横長帳	1 冊	表紙脇に 「但し肝入 方へ壱通此 方様へ壱通 利左衛門方 へ壱通四冊 之内」とあ り。本書史 料番号【4】。
175		（岩出山の者願に付大肝入樋 渡藤吉吟味書）	寛政十弐年 正月廿四日 ～二月三日	1800. 1. 24 ～2. 3			横長帳	1 冊	
176		玉造郡岩出山本郷五ヶ町検断 共乍恐追願申上候御事（岩出 山町川渡温泉御役代請負追 願）	寛政拾二年 二月三日	1800. 2. 3			横長帳	1 冊	付札あり。
177		（大丞家老川渡御役銭永久の 御吟味成下れ度旨達）	寛政十二年 二月	1800. 2			横長帳	1 冊	
178		玉造郡大口村御百姓川渡御湯 守吉郎右衛門不念申上候御事 （御受状書直し指上申候間御 役銭早速御取納相成候様被仰 上被下置度申上）	寛政十三年 正月	1801. 1	大口村川 渡御湯 守・吉郎右 衛門、組 頭・助八	大口村肝 入・兵吉殿	横長帳	1 冊	
179～192		（欠番か）							

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
193		写（武右衛門湯守願ニ付吟味書など）	十一月廿八日～八月廿三日	11.28 ～ 8.23			横長帳	1冊	袖書に「古写し」とあり。
194		写					横長帳	1冊	No.193の一部と同文。
195		正月追願書（御役代何程ニ而引続湯守被成下度との訳無延引可被申聞候）	正月十四日～十八日	1.14～18			横長帳	1冊	
196		写し					横長帳	1冊	No.193の一部と同文。
197		（欠番か）							
198		写					横長帳	1冊	No.193の一部と同文。
199		（欠番か）							
200		写					横長帳	1冊	No.196と同文（No.193の一部と同文）。
201～203		（欠番か）							
204		（惣左衛門御内々御指図願書）	十二月八日	12.8	大口村・惣左衛門	千葉庄右衛門様、猪狩惣太夫様	横長帳	1冊	断簡1枚共。
205		（書状、今朝大肝入方より申来別紙の件）	十二月八日	12.8	大口村・惣左衛門	庄右衛門様、惣太夫様	横切紙	1通	
206		（欠番か）							
207	1	（書状、玉造御代官吟味之趣無之大肝入向合候一篇ニ而は指支候条其心得玉造御代官江も取合吟味可被申聞候仍別紙一卷も先以相渡し申候）	明和四年十二月	1767.12	今七三郎、姉八郎右衛門 志田郡北方大肝入・日野甚吉	菊地丈之進殿、矢内清六郎殿、同役衆中 清六郎様	横切継紙	1通	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
					菊田五郎 太夫、矢内 清六郎				
207	2	(川渡御役代の件につき達)	十二月廿四 日～廿五日	12. 24～25	大肝入・渋 谷平右衛 門	大口村肝 入・三郎右 衛門殿			
					菊丈之進	大肝入・渋 谷平右衛 門殿			
					矢内清六 郎、菊田五 郎太夫	菊地丈之 進様、御同 役様中			
207	3	(川渡御役代の件につき申 上)	二月六日～ 十一日	2. 6～11	大肝入・渋 谷平右衛 門	日野甚吉 様			
					大肝入・日 野甚吉	渋谷平右 衛門様			
209～211		(欠番か)							
212		(断簡、行蔵院方より此度改 而申出候義)	元禄拾貳年	1699				1 枚	前欠。所在 不明。No215 の一部と同 文。
213		(書状か、覚書之品々相知不 申候ニ付晴書不被成候由ニ候 間写し候て如此候右紙面ニむ かみ晴書早々相出可被申候)	元禄十貳年 十月十日～ 十二月廿二 日	1699. 10. 10 ～12. 22	大口村・行 蔵院	肝入・半兵 衛殿		1 枚	前欠。
					肝入・半兵 衛 (印)	弥蔵殿			
214		乍恐覚書を以奉願候御事 (川 渡出湯鎮守温泉之宮別当職被 仰付被下置度奉願)	元禄拾貳年 十月十日	1699. 10. 10	大口村・行 蔵院	肝入・半兵 衛殿	縦継紙	1 通	
215		此度当御村行蔵院温泉石ノ神 社之儀ニ付而書物を以申上候 故乍憚覚書を以品々申上ル御 事 (拙者別当相勤申様ニ被成 下度願上候)	元禄拾貳年	1699			縦継紙	1 通	日付は元禄 十三年の誤 りか。



No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
216	1	（断簡、行蔵院方へも御尋被下度奉願候事）	元禄十三年	1700	大口村川渡屋敷・弥蔵			1 枚	前欠。『川渡温泉史』・目録には「216」とあるが、便宜上216-1とした。以下の枝番は『上巻』・カード目録のもの一つずつれる。
216	2	（断簡、御ゑん日近日ニ湯参之修験出家無御座候時分は行蔵院を茂頼申候得而へいそく指上申事茂御座候）						1 枚	前後欠。
216	3	（断簡、四人衆行蔵院ニ仕候哉拙者ニ仕候哉御尋被成置被下度）						1 枚	前後欠。
216	4	（断簡、湯之はなを指上申候節御預様大肝入方へ湯之花願指上申候へは肝煎半兵衛を以神事之儀ニ候間湯立て可仕由被仰付候）						1 枚	前後欠。
216	5	（断簡、七人之山伏衆頼入湯花指上申候拙者入料を以御湯花指上申御事）						3 枚	前後欠。
217		此度当御村行蔵院温泉石ノ神社ノ義ニ付而書物を以申上候故々憚覚書を以品々申上候御事					縦継紙	1 通	No216 とほぼ同文。
218		（断簡、其以後行蔵院より申懸候儀へ別当職うはい取可申段）	元禄拾三年二月	1700. 2	大口村川渡・弥蔵	大口村肝入・半兵衛殿		1 枚	前欠、裏書あり。No40（『川渡温泉史』40（3））の一部とほぼ同文。

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
219		(欠番か)							
220		玉造郡大口村行蔵院奉願候事 (行蔵院川渡出湯役請負願)	正徳三年七月十八日	1713. 7. 18	大口村・行蔵院、同村与頭・与兵衛	肝入・太郎吉殿	縦紙	1 通	
					大口村・行蔵院、与頭・与兵衛	肝入・太郎吉殿			
221		(書状、千葉三吉奥州延喜式内神社百座考借用の件)	(安政三年) 十二月十四日	1856. 12. 14	千葉三吉	川渡温泉湯守・吉郎右衛門	横切継紙	1 通	断簡 1 枚共。
222		玉造郡大口村行蔵院願書指上候ニ付乍憚晴書申上候御事						1 枚	後欠。No.40 (『川渡温泉史』40 (3)) の一部とほぼ同文か。
223		此度当村行蔵院湯泉石ノ神社之儀ニ付而書物を以申上候故乍憚覚書を以品々申上候御事 (川渡屋敷湯泉石ノ神社別当先祖より行蔵院仕候など)						1 枚	後欠。
224		乍恐覚書を以奉願御事 (川渡出湯之鎮守湯泉宮者先祖より拙僧別当職相勤来候など)						1 枚	後欠。No.214 と同文か。
225		(断簡、貞享四年之右仙台領御城下ニ本山羽黒当山三流山伏御改など)						1 枚	前後欠。No. 214 と同文か。所在不明。
226		(温泉石神社詳細書上)	明治六癸酉年五月廿三日	1873. 5. 23	大口村右社地主・藤島吉郎右衛門	副戸長・氏家友吉殿	縦帳	1 冊	
227		明治三午年神社境内書上扣 (温泉石神社)	明治三午年	1870			折紙	1 通	
228		大口村組頭喜兵衛申上候御事 (願書取次不仕候儀委細申上)	享保廿年十二月七日	1735. 12. 7	大口村組頭・喜兵衛 (印)	肝入・利右衛門殿	縦紙	1 通	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
229		大口村組頭清四郎申上候御事 （願書取次不仕候儀委細申上）	享保廿年十二月七日	1735. 12. 7	大口村組頭・清四郎（印）	肝入・利右衛門殿	豎紙	1 通	
230		乍恐玉造郡大口村御百姓十助奉願御事（十助川渡湯守継続願）	享保廿一年二月廿三日	1736. 2. 23	玉造郡大口村御百姓・十助、同郡同村組頭・半兵衛	肝煎・利右衛門殿	豎紙	1 通	No.49 とほぼ同文。
231		大口村組頭共申上候御事（御百姓共末書不申上儀）	享保廿年	1735	大口村組頭・平助（印）、同・市兵衛（印）、同・与之（印）、同・三郎右衛門（印）、同・権六（印）	肝入・利右衛門殿	豎紙	1 通	
232		写 乍恐奉願上御事（仙台表願人鷲巣川渡両所湯守願）	享保十四年	1729	仙台表願人・兩人、大渡（か）より・兩人	御町奉行所			
233		（書状、春中より川渡わしのす出湯同村にて申受湯守仕度由吟味仕候処ニ拙者共組合之者ハ願不申上候左様ニ被思召可被下候）	享保廿年九月十二日	1735. 9. 12	三助（印）、半兵衛（印）、与三郎（印）、儀兵衛（印）、吉左衛門（印）、与五平（印） 平助（印） 権六（印）		折紙	1 通	
234		乍恐玉造郡大口村御百姓奉願御事（大口村御百姓川渡湯守願）	享保廿年八月三日	1735. 8. 3			横長帳	1 冊	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
235		玉造郡大口村川渡出湯近年湯治人相倍申ニ付御役代何程被倍下可然（か）哉以吟味（か）可申上由被仰渡奉承知左ニ申上候（金十三切川渡御役当年より被召上可然と奉存候）	（元文元年か）六月十七日	1736. 6. 17	利右衛門	い藤義太郎殿 斎藤清人様、菊地安太夫様	横切紙	1 通	
236		（欠番か）							
237	1	乍憚行蔵院書上指上申ニ付はれ書覚（大口村川渡之湯泉石神社別当先祖より行蔵院仕候由偽ニ御座候）							後欠。No40（『川渡温泉史』40（3））の一部とほぼ同文か。
	2	（断簡、右四人之衆江御尋被下度奉存候行蔵院へ被成下候哉拙者ニ被下候哉御尋被下度奉願候御事）							前欠。No40（『川渡温泉史』40（3））の一部とほぼ同文か。
	3	（断簡、川渡湯泉之神社拙者屋敷之内ニ被為立候御下ニ出湯御座候ニ付代々湯守仕御公儀様江右御役上納仕尤石ノ神社内神と奉存）							前後欠か。No40（『川渡温泉史』40（3））の一部とほぼ同文か。
238～248		（欠番か）							
249		陸奥国第七大区玉造郡小巻区大口村温泉場毎書上（湧出起源、入湯客数など）	明治六年八月十七日	1873. 8. 17	大口村川渡湯守・藤島吉郎右衛門		縦帳	1 冊	

『下巻』分目録

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
1～4		（欠番か）							
5		大口村御百姓吉郎右衛門乍 恐奉願候御事（借用金年賦返 済の願書）	寛政元年 四月	1789. 4					原史料のコ ピー（原史 料は所在不 明）。
6～8		（欠番か）							
9		玉造郡大口村〔 〕乍恐 奉願候御事（御一門大進方々 湯治につき願）	文化貳年 九月廿日	1805. 9. 2 0			横長帳	1 冊	
10		（達）	（文化 2. 11. 21 日）	1805. 11. 21					No.10～12 は 混在につ き、No変動 の可能性あ り。
11		（玉造郡大口村川渡屋敷御 百姓御湯守吉郎右衛門名子 利左衛門乍恐奉願上候御事）	（文化 2. 10. 4）	1805. 10. 4					
12		（大進御歴々御入湯につき 達）	（11 月）	11					
13		（当年御役代之儀吟味のこ と）	（2 月）	2					
14		玉造郡大口村鳴子村湯場ニ て湯銭木賃取合五十貳文之 処六十文ニ被増下度願両度 分留写（扣）	天保十四 年七月	1843. 7			横長帳	1 冊	
15		（御出馬寓所）							No.16 の可能 性あり。
16		（欠番か）							
17		玉造郡鳴子大口両村湯場之 木賃代拾文ツゝ老人ニ付被 増下度願御下知書卷写シ	安政七年 三月	1860. 7			横長帳	1 冊	
18		玉造郡大口村川渡御湯守家 作手入等之ため自分備仕度 如此申上候御事	元治元年 五月	1864. 5	玉造郡大口村 川渡御湯守・吉 郎右衛門、同吉 郎右衛門名 子・利左衛門	笠原嘉吉様	折紙	1 通	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
19		慶応元年六月十三日鳴子大 口両村御湯共木賃増ニ付登 仙通中小遣覚)	慶応元年 六月十三 日～	1866. 6. 1 3～			横長帳	1 冊	
20		(欠番か)							
21		寛政三年玉造郡大口村川渡 御湯守吉郎右衛門大丞様御 仮屋相立候に付御同所様よ り御書立を以御指図罷成候 次第御郡方江も御承知達仕 候得は百姓家ニ不相当之家 作ニ付取口候様被仰渡候処 御同所様より品々御願立被 成如願之御下知被仰渡候留	慶応三年 卯年四月	1867. 4			横長帳	1 冊	本書史料番 号【23】。
22		玉造郡大口村川渡御湯守吉 郎右衛門御聞届被仰渡承知 仕乍恐口上書ヲ以奉申上候 御事 (御郡奉行様御宿につい て、吉郎右衛門印)	慶応三年 四月)	1867. 4			横長帳	1 冊	
23		玉造郡鳴子村大口村両村御 百姓御湯守共奉願上候御事 (普請用材木駄送代他諸品 高値の件につき木賃湯銭増 額願)	慶応四年 四月	1868. 4			横長帳	1 冊	
24	1	玉造郡鳴子村大口村両村御 百姓御湯守共奉願上候御事 (諸品高直につき)	慶応四辰 ノ年七月	1868. 7			横長帳	1 冊	
24	2	玉造郡鳴子村大口村両村御 百姓御湯守共奉願上候御事 (湯銭等値上げの件)	慶応四辰 年七月	1868. 7			横長帳	1 冊	No24 - 1 と ほぼ同文。
25		玉造郡鳴子村大口村両村御 湯守共奉願上候御事 (湯銭木 賃取合二百五十文への値上 げ願)	(明治) 元年十二 月	1869. 12			横長帳	1 冊	
26		玉造郡大口村御百姓赤湯口 口守万五郎所持之口江貨長 屋出火焼失口成候ニ付焼跡 御改書上	明治三年 正月	1870. 1			横長帳	1 冊	
27		(諸色高につき湯銭木賃値 上げ願書)	明治三年 二月	1870. 2			横長帳	1 冊	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
28		玉造郡大口村御百姓川渡御 湯守五十集売人吉郎右衛門 嫡子吉郎治奉願上候御事（父 死去につき五十集売上判返 上願）	明治三年 二月	1870. 2	大口村川渡御 湯守吉郎右衛 門嫡子出願 人・吉郎治、同 親類組合・養吉	御判肝入・ 亀三郎	折紙	1 通	
29		玉造郡大口村御百姓川渡御 湯守吉郎右衛門奉願上候御 事（水損につき御役代減額 願）	明治三年 九月	1870. 9			横長帳	1 冊	
30		玉造郡鳴子村大口村両村御 湯守共奉願上候御事（湯銭木 賃値上げ願）	明治四年 五月	1871. 5			横長帳	1 冊	付紙あり。
31		（欠番か）							
32		〔 〕鳴子村大口村□□ 御百姓御湯守共□願上候御 事（湯銭木賃値上げ願）	（慶応年 間か）				横長帳	1 冊	
33		赤湯温泉湯小屋湯坪間合調					折紙	1 通	
34		玉造郡鳴子村大口村両村之 御湯守共奉願上候御事（諸色 高値につき木賃二割五分増 願）	（慶応年 間か）				横長帳	1 冊	
35～ 57		（欠番か）							
58		乍恐大口村御百姓川渡屋敷 御湯守奉願候御事（湯治客三 人の儀につき吟味願）	宝暦十四 年六月廿 六日	1764. 6. 2 6	御湯守・吉郎右 衛門、組頭・善 内	仮肝入・喜 惣右衛門	縦紙	1 通	
59～ 73		（欠番か）							
74		（書状、湯治人の儀につき申 上）	（安永 3. 2 月）	1774. 2	大口村湯守・治 左衛門		縦継紙	1 通	
75・76		（欠番か）							
77		（書状、吉郎右衛門南部より 牛共雇い駄送につき吟味願）	寛政十年 二月廿九 日	1798. 2. 2 9	玉造郡大口村 川渡御湯守・吉 郎右衛門（印）、 同郡同村組 頭・助八（印）	肝煎・兵吉 殿	縦継紙	1 通	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
					大口村肝入・兵吉	大肝入・樋渡藤口殿			
78		(欠番か)							
79		(書状、赤湯湯守受継願)	寛政十年 四月	1798. 4	大口村御百姓 赤湯湯守受継 願人・万五郎、 同・新六、同・ 与次右衛門、同 右親類組頭・長 作、同村肝煎・ 兵吉	御金山下 代・和泉林 左衛門殿、 門脇新右衛 門殿	縦継紙	1 通	
80～ 90		(欠番か)							
91		玉造郡大口村川渡御百姓御 湯守吉郎右衛門乍憚奉申上 候御事(岩出山の者年御役代 九十貫にて湯守請願につき 同額での湯守請継ぎを請願)	寛政拾貳 年二月	1800. 2	玉造郡大口村 川渡御百姓御 湯守・吉郎右衛 門、同組頭・助 六、同村仮肝 入・善八	大肝入・樋 渡藤吉殿	縦継紙	1 通	本書史料番 号【5】。
92～ 94		(欠番か)							
95		玉造郡大口村川渡御百姓御 湯守吉郎右衛門乍恐奉願候 御事(湯治客減少につき御役 代減額願)	享和三歳 九月	1803. 9	玉造郡大口村 川渡御百姓御 湯守・吉郎右衛 門(印)、同組 頭・養助(印) 大口村肝入・兵 吉(印)	同村肝入・ 兵吉殿 大肝煎・樋 渡藤吉殿	縦継紙	1 通	袖書あり。 本書史料番 号【7】。
96		玉造郡大口村川渡屋敷御百 姓御湯守吉郎右衛門乍恐奉 願上候御事(湯治客減少につ き半御役願)	享和三歳 九月	1803. 9	玉造郡大口村 御百姓 〔 〕・吉 郎右衛門、同組 頭・養助	肝煎・兵吉 殿	縦継紙	1 通	本書史料番 号【8】。
97		玉造郡大口村川渡屋敷御百 姓御湯守吉郎右衛門乍恐奉 願上候御事(湯治客減少につ き半御役願)	享和三歳 九月	1803. 9	玉造郡大口村 御百姓御湯守 願人・吉郎右衛 門、同組頭・養 助	肝入・兵吉 殿	縦継紙	1 通	



No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
98		玉造郡大口村御百姓御湯守 吉郎右衛門乍恐御受継願申 上候御事（来丑年より巳年ま で御役代六十貫文での請負 願）	文化元年 十一月～ 十二月	1804. 11 ～12	玉造郡大口村 御百姓御湯 守・吉郎右 （印）、同同人 名子・利左衛門 （印）、同組 頭・養助（印）、 同村肝入・兵吉 （印）	大肝入・樋 渡藤吉殿	縦継紙	1 通	本書史料番 号【9】
					玉造郡大肝 入・樋渡藤吉 （印）	伊右衛門 様、丈助様			
99		玉造郡大口村御百姓吉郎右 衛門乍恐御請継願申上候御 事（文化二丑年より巳年まで 御役代九十貫文での請負願）	文化元年 十二月	1804. 12	大口村御百姓 川渡御湯守右 願人・吉郎右衛 門（印）、同右 吉郎右衛門名 子受合人・利左 衛門（印）、同 組頭受合人・養 助（印）、同村 肝入・兵吉（印）	大肝入・樋 渡藤吉殿	縦継紙	1 通	付紙3 点あ り。
					玉造郡大肝 入・樋渡藤吉 （印）	伊右衛門 様、丈助様			
					本伊右衛門、斎 藤丈助、□□長 八郎、近藤□吉				
					小崎甚兵衛、林 珍平				

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
100		玉造郡大口村御百姓吉郎右衛門乍恐御請繼願申上候御事（文化二丑年より巳年まで御役代九十貫文での請負願）	文化元年十二月	1804. 12	大口村御百姓川渡御湯守右願人・吉郎右衛門、同右吉郎右衛門名子請合人・利左衛門、同組頭并請合人・養助、同村肝入・兵吉	大肝煎・樋渡藤吉殿	縦継紙	1 通	付紙あり。
101		文化二年正月仰出候口奉指上御請伏一札之事	文化二年正月	1805. 1	玉造郡大口村川渡御受負湯守・吉郎右衛門、同受合人・利左衛門、同組頭・養助		縦継紙	1 通	
102		（書状、湯守請繼請願書）	文化三年正月	1806. 1	玉造郡大口村川渡御百姓湯守願人・吉郎右衛門、同名子・利左衛門、同組頭・又右衛門	同村仮肝入・養助殿	縦継紙	1 通	
103		玉造郡大口村御百姓御湯守吉郎右衛門申上候御事（父嘉左衛門評定所へ登る件）	文化四年十月	1807. 10	大口村御百姓御湯守・吉郎右衛門、同組頭・又右衛門 同村仮肝煎・養助	仮肝入・養助殿 大肝入・千葉甚助殿	縦継紙	1 通	
104		玉造郡大口村御百姓御湯守吉郎右衛門乍恐御受繼願申上候御事（文化七午歳より戊歳まで五ヶ年御役代九十貫文での請負願）					縦紙	1 通	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
105		玉造郡大口村御百姓御湯守 吉郎右衛門乍恐御受継願申 上候御事（文化七午歳より戊 歳まで五ヶ年御役代九十貫 文での請負願）	文化六年 十二月	1809. 12	大口村御百姓 川渡御湯守右 願人・吉郎右衛 門（印）、同右 吉郎右衛門之 分口御名子受 合人・利左衛門 （印）、同組頭 受合人・五右衛 門（印）、同村 肝入・養助（印）	大肝入・千 葉甚助殿	縦継紙	1 通	
106		奉指上御請状一札之事（文化 十一年、嘉永七年両度作成の 案文か）	文化十一 年、嘉永 七年	1814、 1854	玉造郡大口村 川渡御受湯守 並組頭・吉郎右 衛門（印）、同 郡同村受合人 親類・養右衛門 （印）、惣左衛 門、同与頭・又 右衛門、同肝 入・久兵衛	大肝入・遊 佐甚之丞 殿、金山下 代十五品係 り・笠原嘉 吉殿	縦継紙	1 通	付紙7点あ り。
107		乍恐御受継願申上候御事（丑 年より卯年まで三ヶ年御役 代九十貫文での請負願い）	文化十三 年二月	1816. 2	大口村御百姓 川渡御湯守右 願人・吉郎右衛 門、同村右受合 人親類并組 頭・養右衛門		縦継紙	1 通	本書史料番 号【10】。
108		玉造郡大口村御百姓御湯守 吉郎右衛門乍恐御受継願申 上候御事（亥より丑、丑より 卯まで計五ヶ年御役代九十 貫文での請負願い、文化十一 年、十三年両度作成の案文 か）	文化十一 年、文化 十三年	1814、 1816	大口村御百姓 川渡御湯守右 願人並組頭・吉 郎右衛門（印）、 同村右受合人 親類組頭・養右 衛門（印）	仮肝入・兵 左衛門殿	縦継紙	1 通	付紙2点あ り。
109		玉造郡大口村御湯守吉郎右 衛門乍恐奉願上候御事（湯銭 一夜九文への変更願い）	文化十四 年七月	1817. 7	川渡湯守願 人・吉郎右衛 門、親類請合 人・養右衛門		縦継紙	1 通	本書史料番 号【18】。

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
110		乍恐奉願上候御事（午年より 戌年まで五ヶ年御役代百三十 貫文での請負願い）	文政四年 二月	1821. 2	玉造郡大口村 川渡受人・吉郎 右衛門、同組頭 受合人・礼助	仮肝入・勝 之丞殿	縦継紙	1 通	
111		乍恐奉願上候御事（午年より 申年まで三ヶ年御役代百貫 文での請負願）	文政五年 三月	1822. 3	大口村川渡御 湯守御受負願 人・吉郎右衛門 （印）、同組頭 并御役受合 人・礼助（印）	仮肝入・勝 之丞殿	縦継紙	1 通	付紙2点あ り。本書史 料番号 【11】。
112		乍恐奉願上候御事（午年より 戌年まで五ヶ年御役代百三十 貫文での請負願）	文政五年 四月	1822. 4	玉造郡大口村 川渡受人・吉郎 右衛門（印）、 同組頭受合 人・礼助（印）	仮肝入・勝 之丞殿	縦継紙	1 通	
113		乍恐〔 〕候御事（午年 より五ヶ年御役代百十貫文 での請負願）	文政五年 四月	1822. 4	玉造郡大口村 川渡受人・吉郎 右衛門（印）、 同郡同村組頭 受合人・礼助 （印）	仮肝入・勝 之丞殿	縦継紙	1 通	本書史料番 号【12】。
					右村仮肝入・勝 之丞（印）	大肝入・千 葉甚助殿、 御金山下代 主立・山本 忠太夫殿、 同係り下代 ・大竹左 右助殿	縦継紙		

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
					御金山下代・大竹左右（印）、同主立・山本忠太夫（印）、大肝入・千葉甚助（印）	善之進様、又衛門様、源之進様			
114		乍恐奉願上候御事（午年より五ヶ年御役代百十貫文での請負願）	文政五年四月	1822. 4	玉造郡大口村川渡受人・吉郎右衛門、同組頭受合人・礼助	勝之丞殿	横切継紙	1 通	
115		玉造郡大口村御百姓吉郎右衛門出湯御受継願申上候御事（亥年より三ヶ年御役代百十貫文での請負願）	文政十年二月	1827. 2	大口村御百姓川渡御湯守右願人・吉郎右衛門（印）、同親類受合人・礼助（印）、同組頭・喜平衛（印）	肝入・勝之丞殿	縦継紙	1 通	棒引抹消箇所あり。
					同村肝入・勝之丞（印）	大肝入・千葉甚助殿、同金山係り下代・熊谷利左衛門殿			
116		玉造郡大口村御百姓吉郎右衛門請継願申上候御事（申年より五ヶ年御役代八十貫文での請負願）	（天保七年）	1836			折紙	1 通	
117		玉造郡大口村御百姓吉郎右衛門請継願申上候御事（申年より五ヶ年御役代八十貫文での請負願）	天保七年正月	1836. 1	玉造郡大口村御百姓川渡御湯守右願人・吉郎右衛門（印）、同親類受合人・惣左衛門（印）、同組頭・萬之助（印）、同肝入・勝之丞（印）	大肝入・遊佐甚之丞殿、御金山係り下代・松坂大之助殿、同・桜井仁右衛門殿	縦継紙	1 通	端裏に「天保七年受継願下書」とあり。本書史料番号【13】。

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
118		玉造郡大口村御百姓川渡 〔 〕（御湯守吉郎右衛 門力）御請継願申上候御事 （亥年より五ヶ年御役代九 十貫文での請負願）	天保十年 五月	1839. 5	大口村御百姓 川渡御湯守右 願人・吉郎右衛 門、同親類受合 人・惣左衛門、 同与頭・萬之助	肝入・勝之 丞殿	縦継紙	1 通	
119		（書状、吉郎右衛門難渋につ き壱ヶ年四拾両にて□□貸 渡願）	天保拾年 二月	1839. 2	大口村肝入・勝 之丞（印） 玉造大肝入・遊 佐甚之丞（印）			1 枚	前欠。
120		玉造郡大口村御百姓川渡御 湯守吉郎右衛門御受継願申 上候御事（亥年より五ヶ年御 役代六拾五貫文での請負願）	天保十年 十一月	1839. 11	玉造郡大口村 御百姓川渡御 湯守右願人・吉 郎右衛門、同親 類請合人・惣左 衛門、同与頭・ 萬之助	肝入・勝之 丞殿	縦継紙	1 通	付紙 1 点あ り。本書史 料番号 【14】。
121		玉造郡大口村御百姓川渡御 湯守吉郎右衛門御請継願申 上候御事（辰年より五ヶ年御 役代九十貫文での請負願）	天保十四 年十月	1843. 10	大口村御百姓 川渡御湯守右 願人・吉郎右衛 門、同親類受合 人・惣左衛門、 同与頭・萬之 助、同村肝入・ 勝之丞	大肝入・遊 佐甚之丞 殿、御金山 下代拾五品 方係り・松 坂大之助 殿、同・星 武左衛門殿	縦継紙	1 通	端裏書あ り。
122		□□郡大口村御百姓川渡御 湯守吉郎右衛門御請継願申 上候御事（酉年より五ヶ年御 役代九十貫文での請負願）	嘉永元年 十二月～ 二年正月	1848. 12 ～1849. 1	玉造郡大口村 御百姓川渡御 湯守右願人・吉 郎右衛門（印）、 同親類請合 人・惣左衛門 （印）、同与 頭・又左衛門 （印）、同村仮 肝入・久兵衛 （印）	大肝入・遊 佐甚之丞 殿、御金山 下代十五品 方係り・笠 原嘉吉殿	縦継紙	1 通	付紙 3 点あ り。

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
					玉造大肝入・遊 佐甚之（印）、 御金山下代・笠 原嘉吉（印）				
123		□□郡大口村御百姓川渡御 湯守吉郎右衛門御請継願申 上候御事（寅年より五ヶ年の 請負願）	嘉永六年 十二月	1853. 12	玉造郡大口村 御百姓川渡御 湯守右願人・吉 郎右衛門、同親 類請合人・惣左 衛門（印）、同 組頭・又左衛門 （印）、同同村 肝入・久兵衛 （印）	大肝入・遊 佐甚之丞 殿、御金山 下代拾五品 係り・笠原 嘉吉殿	縦継紙	1 通	
124		（書状、戌年より五ヶ年間の 湯守請負願）	文久元年 十二月	1861. 12	玉造郡大口村 川渡御湯守御 請継願人・吉郎 右衛門（印）、 同親類組合御 役請合人・惣左 衛門（印）、同 組頭・喜平治 （印）、同同村 仮肝入・繁次郎 （印）	大肝入・遊 佐甚之丞 殿、御金山 下代拾五品 係り・笠原 嘉吉殿		1 枚	前欠。
125		玉造郡大口村御百姓組頭川 渡御湯守〔 〕（吉郎右 衛門力）御請継願申上候御事 （卯年より五ヶ年御役代七 十五貫での請負願）	慶應式年 十一月	1866. 11	〔 〕組頭 川渡御湯守御 請負願人・吉郎 右衛門、親類組 合御役請合 人・惣左衛門、 同組頭・養右衛 門、同同村肝 入・庄左衛門	大肝入・遊 佐甚之丞 殿、御金山 下代拾五品 係り・笠原 本次郎殿	縦継紙	1 通	
126		玉造郡大口村川渡□□□開 届被仰渡承知仕乍恐口上書 を以申上候御事（弾正様御仮 屋自分入料にて修理の件）	慶應三年 四月	1867. 4	大口村川渡御 湯守・吉郎右衛 門、同村仮肝 入・養右衛門	大肝入・遊 佐甚之丞殿	横切継紙	1 通	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
127		扣（御役代七十五貫文での請負願）	□□□年 二月	2	玉造郡大口村 御百姓組頭川 渡御湯守御請 継願人・吉郎右 衛門（印）、同 親類組合御役 請合人・惣左衛 門（印）、同組 頭・養右衛門 （印）、同同村 肝入・泉之助	大肝入・遊 佐甚之丞 殿、御金山 下代拾五品 係り・笠原 本次郎殿	縦継紙	1 通	
128		〔運上増願、当午年より末三 ヶ年壹ヶ年拾壹両ヲ以御請 負〕	（明治3 年、11 月）	1870. 11	御湯守請継 人・吉郎右衛 門、親類組合御 役請合人・支倉 惣左衛門、村 長・高橋新助	大肝入・遊 佐甚之丞、 鉾山方附 属・伊藤宗 五郎			
					大肝入・遊佐甚 之丞、鉾山方附 属・伊藤宗五郎	鉾山方御役 所			
129	1	（入湯客数書上、月毎、男女 別、明治二十九年分か）					横切継紙	1 通	
129	2	止宿人員御届（止宿人員一千 九百八拾人延人員一万二千 五百八十六人）	明治卅年 一月七日	1897. 1. 7	宮城縣玉造郡 温泉村大口百 拾八番地平民 鑛泉浴場営業 人・藤島吉郎右 衛門	宮城縣知事 勝間田稔殿	罫紙	1 通	
130		（書状、卯年より五ヶ年御役 代七十五貫文での請負願）						1 枚	前後欠か。
131～ 133		（欠番か）							
134		（断簡、物語致指遣候件）	五月廿二 日	5. 22	高橋安之丞、 〔 〕、 高橋和喜兵衛、 三浦左助、高橋 □蔵			1 枚	前欠。



No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
135～ 139		（欠番か）							
140		（大口村御百姓御湯守吉郎 右衛門口上書）							
141～ 143		（開披不能につき判読でき ず）							
144		（書状、居広間大破につき造 替のこと及び殿様御父子様 御縁者様御入湯の件）						1 枚	後欠か。
145		（書状、吉郎右衛門川渡出湯 の件）	正月廿二 日～二月 十三日	1. 22～ 2. 13	森喜市	今村常治 様、御同役 様中	横切継紙	1 通	
					今村常治	赤坂慶治様			
146	1	写（温泉場にて他所者商売禁 止の達など）	十二月廿 一日～廿 三日	12. 21～ 23			横長帳	1 冊	包紙あり （146－1～ 3 を含む）。 目録カード の番号は 146。
146	2	（書状、御殿普請につき数箇 条仰付）	寛政三年 六月廿三 日	1791. 6. 2 3	権兵衛、弥右衛 門、新左衛門、 五郎兵衛、助兵 衛	御出入衆中	横切継紙	1 通	目録カード の番号は 146－1。
					大内久左衛門、 菅谷伝九郎、遊 佐新右衛門、斎 藤口助、永沼新 内	御宿十之助 殿、同役衆 中			
					福田作太夫、御 宿十之助	大口村肝 入・遊佐兵 吉殿			
					大口村肝煎・遊 佐兵吉（印）	川渡御湯 守・吉郎右 衛門殿			
146	3	（書状、川渡湯元仮屋立ての 件御届通に許可される）	寛政六年 六月晦日 ～七月十 八日	1794. 6. 3 0～7. 8	大口肝入・兵吉 （印）	川渡湯守・ 吉郎右衛門 殿	横切継紙	1 通	目録カード の番号は 146－2。

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
					大肝入・渋谷三右衛門	大口村肝入・兵吉殿			
					□文太夫	大肝入・渋谷三右衛門殿			
					佐七郎左衛門	□津文太夫殿			
					矢□助	佐藤七郎衛門殿			
					美濃	熊谷□□殿			
147		(欠番か)							
148		(達書写、川渡湯元伊達大丞殿御休所御普請之儀難成由別紙之通御奉行衆より被仰渡候ことなど、吉郎右衛門口上書もあり)	寛政三年七月七日～九月十八日	1791. 7. 7～9. 18			横長帳	1 冊	
149・150		(欠番か)							
151		大口村御百姓御湯守吉郎右衛門乍憚口上書ヲ以御披露申上候御事(古広間大破につき造替の件、案文)					折紙	1 通	棒引抹消箇所あり。
152		(書状案文、広間造替の件か)					折紙	1 通	
153		□□候儀ケ條申上候御事(卯時代、御役人宿泊の件など村方扱いの規定)					横長帳	1 冊	
154		(書状、古広間普請及び殿様御父子様御縁者様御入湯の件)					横切継紙	1 通	
155	1	御朱印之写(領知宛行及び松平の二字御名乗之一字ヲ被下置候こと)	年号月日		徳川家斉	油利代・片倉小十郎江	縦紙	1 通	
155	2	(知行高書上、山城守様御事五百石など)					折紙	1 通	
155	3	(金子受取証、献上金七切受取)	寛政三年八月廿七日	1791. 8. 27	伊藤惣左衛門(印)	大口村・吉郎右衛門殿	切紙	1 通	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
156・ 157		(欠番か)							
158		(断簡、半読不可)						1 枚	
159		(断簡、嘆願書か)						1 枚	
160		(御湯守吉郎右衛門願、御中 奥様来春御入湯二付)	(寛政 7・10 月)	1795. 10	吉郎右衛門	肝入・兵吉			
161		(玉造郡大口村吉郎右衛門 申上候御事)			吉郎右衛門、組 頭・養助	肝入・兵吉			目録カード には 161 (2) とあるが、 161 (1) は 見つから ず。
162		(欠番か)							
163		(達書写、御制外之普請ハ難 成品々被申渡候条など)	寛政三年 七月七日 ～九月十 一日	1791. 7. 7 ～9. 11			横長帳	1 冊	
164		大口村御百姓御湯守吉郎右 衛門乍恐口上書を以御内々 相窺申上候御事（広間造替、 肝入兵吉の所業の件など、下 書）	寛政三年 九月廿一 日	1791. 9. 2 1			横長帳	1 冊	棒引抹消箇 所あり。
165		(願書、吉郎右衛門宿鷹狩川 狩の際の旅宿普請について の下知願い)	寛政三年 十月～十 一月二十 七日	1791. 10 ～11. 27			横長帳	1 冊	
166		手扣(玉造郡大口村川渡屋敷 御湯守吉郎右衛門乍恐奉願 上候御事、来春御中奥様入湯 につき湯小屋湯坪等立替材 木下賜願)	寛政七年 十月	1795. 10			横長帳	1 冊	本書史料番 号【22】。
167		玉造郡大口村川渡屋敷御湯 守吉郎右衛門乍恐奉願上候 御事(来春御中奥様入湯につ き湯小屋湯坪等立替材木下 賜願)	寛政七年 十月	1795. 10			横長帳	1 冊	No.166 とほ ぼ同文
168・ 169		(欠番か)							

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
170		（□村より指出候願書相口被成候事、裏に「大肝入方之見分計也」とあり）							
171～ 178		（欠番か）							
179		玉造郡鳴子大口両村御湯守共奉願上候御事（木賃代等は迄之通被成下度願い、末尾に「川渡扣也」とあり）	文久貳年十一月	1862. 11			横長帳	1 冊	
180		覚（享和三年以降藤嶋喜作経歴書上げなど）					横長帳	1 冊	
181		此度島正作様被仰渡趣記（島及び御小人目付廻村につき通達、風俗取締の件など）	文化拾年九月十九日	1813. 9. 19			横長帳	1 冊	
182		下書（玉造郡大口村吉郎右衛門乍恐奉願上候御事、湯銭一夜九文づつ所務仕候様奉願上候）	文化十四年六月	1817. 6			折紙	1 冊	本書史料番号【19】。
183		奉願口上覚（新田起方願）	文政元年十一月	1818. 11			横長帳	1 冊	
184		玉造郡大口村御百姓川渡御湯守吉郎右衛門御請継願申上候御事（寅年より五ヶ年御役代六十貫文での請負願い）	嘉永六年十二月	1853. 12	御湯守		折紙	1 通	
185		玉造郡大口村御百姓川渡御湯守吉郎右衛門当請明ニ付欠御役願申上候御事（寅年より五ヶ年御役代六十貫文での請負願い）	嘉永六年十二月	1853. 12			横長帳	1 冊	本書史料番号【15】。
186		（欠番か）							
187		玉造郡大口村鳴子村両村御湯守共乍恐奉願上候御事（木賃代十文増湯銭と合わせ計七十文への増額願い）	安政六年四月	1859. 4			横長帳	1 冊	本書史料番号【20】。
188		写（木賃代十文増額願いと許可の達書の写し）	安政六年七月～（七年）三月十日	1859. 7～ 1860. 3. 10			横長帳	1 冊	本書史料番号【21】。

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
189	1	玉造郡大口村川渡出湯御運 上代増欠取調申上候様被仰 渡承知仕左ニ申上候御事（こ れまでの御役代額の書上げ）	嘉永とら 七年二月	1854. 2			横長帳	1 冊	本書史料番 号【16】。
189	2	玉造郡大口村川渡御湯守吉 郎右衛門御聞届被仰渡承知 仕乍恐口上書を以奉申上候 御事（藩主ら来訪の際の居所 について申上げ）	慶応三年 四月	1867. 4			横長帳	1 冊	本書史料番 号【25】。
190	1	玉造郡大口村御百姓組頭川 渡御湯守吉郎右衛門奉申上 候御事（御仮屋の建方につい て仰せ上げられたき旨請願）	慶応三年 五月	1867. 5			横長帳	1 冊	本書史料番 号【26】。
190	2	玉造郡大口村御百姓組頭川 渡御湯守吉郎右衛門奉申上 候御事（御仮屋の建方につい て仰せ上げられたき旨請願）	慶応三年 五月	1867. 5			横長帳	1 冊	付箋あり。 No.190（1） とほぼ同文
191		〔 〕大口村川渡屋敷御 百姓御殿守藤嶋吉郎右衛門 口上書を以乍恐奉願上候御 事（御中奥様御入湯につき諸 普請のため材木等の下賜願 い）	九月	9			横長帳	1 冊	
192		扣（大口村御百姓御湯守吉郎 右衛門乍恐口上書を以御 内々相窺申上候御事、家屋造 替本陣用意可仕旨被仰渡候 処肝入兵吉兎角ヲ申聞につ き御内に申し出候文書）					横長帳	1 冊	
193～ 196		（欠番か）							
197		大口村川渡御湯守御殿守藤 嶋吉郎右衛門口上書を以乍 恐奉願候御事（御中奥様御入 湯につき諸普請のため材木 等の下賜願い）	九月	9			横長帳	1 冊	棒引抹消箇 所あり。
198		（欠番か）							
199		湯小屋材木（五寸角柱拾七本 など用材本数書上げ）					横長帳	1 冊	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
200		(欠番か)							
201		(達書、御役代何程上納可仕と申出候こと)	正月十四日～十八日	1. 14～18			横長帳	1 冊	
202		(書状、御奉行御横目様廻村通行につき組頭共寄合諸事取調べるよう通達)	四月廿二日	4. 22	肝入・泉之輔	善右衛門殿、吉郎右衛門殿、久左衛門殿	横切継紙	1 通	
203		御分領中御湯守共老統登仙之上上追願申上候御事(物価高騰につき木賃代の増額願ひ)					横長帳	1 冊	棒引抹消箇所あり。
204・205		(欠番か)							
206		(書状、御役代の儀は旧冬申渡しを以早速吟味可被申聞候)	二月廿一日～廿五日	2. 21～25	肝入・兵吉	湯守・吉郎右衛門殿	横切継紙	1 通	
					大肝入・樋渡藤吉	兵吉殿			
					本伊右衛門	大肝入・樋渡藤吉殿			
207		(欠番か)							
208		玉造郡大口村川渡御湯守吉郎右衛門承知申上候御事(湯元にて他郡の者木綿古手五十集仕儀売物により御判も所持仕私義指支可申様茂無之ことなど湯元での商いについて申上げ)						1 枚	後欠か。
209		(断簡、運上代のことなどか)						1 枚	
210		乍恐奉願候御事(湯守請継願ひ)	正月廿日～二月十三日	1. 20～2. 13			横長帳	1 冊	
211		御下知写シ(御役代年九十貫文にて請負の下知)	十二月～正月十三日	12～1. 13			横長帳	1 冊	
212～218		(欠番か)							

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
219		御神託諸入用覚（金式百疋、外に百四拾八銅宿札神納、行藏院法印様御取次）	巳九月廿四日	9.24	八聖山別当・瀧泉院納所（印）	大口村・吉郎右衛門様	縦紙	1通	
220～235		（欠番か）							
236		（奉願口上覚）							
237		（欠番か）							
238		乍恐大口村川渡治左衛門奉願上候御事（未納分年貢についていか程上納すればよいかの指示を願い出る）	安永三年八月	1774.8	玉造郡大口村川渡・吉郎右衛門		縦継紙	1通	
239		玉造郡大口村川渡御百姓御湯守吉郎右衛門乍恐奉願上候御事（肝入養助水車にて堀へ悪水下し難儀につき吟味願ひ）	文化六年六月	1809.6	大口村川渡御百姓御湯守願人・吉郎右衛門		縦継紙	1通	
240		（書状、久米八不調法有之欠落の件）						1枚	後欠。
241		玉造郡大口村川渡御湯守吉郎右衛門乍憚奉申上候御事（御中奥様御入湯に際し仰せの通御殿居家間所絵図指上の段仰せ渡されたく申し出）	同年同月同日		御湯守・吉郎右衛門、組頭・善内	肝入・兵吉殿	折紙	1通	
242		（願書、年貢上納残石何程と被仰渡度段願ひ出）	安永三年八月十一日	1774.8.11	大口村川渡願人・吉郎右衛門（印）、同村仮組頭・十右衛門（印） 大口村肝入・久兵衛（印）	肝入・久兵衛殿 千葉正右衛門様、御宿正兵衛様、猪又登蔵様、牛坂嘉内様	縦継紙	1通	

No.	枝	表題（内容）	日付	西暦	差出人	宛名	形態	点数	状態・備考
					牛坂嘉内（印）、猪又登藏（印）、御宿庄兵衛（印）、千葉庄右衛門（印）	遠藤弥右衛門殿、遊佐惣太夫殿、菅文左衛門殿、国井十郎左衛門殿			
243		大口村御百姓吉郎右衛門口上書を以申上候御事（川渡屋敷三四郎分田代三百三拾七文上納のところ重高に成候につき申し上げ）	寛政四年九月廿八日	1792. 9. 28			横長帳	1 冊	
244		乍恐奉願候御事（午年より戌年まで御役代百拾貫文での請負願い案文）	文政五年六月	1822. 6	吉郎右衛門、礼助	肝入			
					肝入	大肝入	横切継紙	1 通	
245		大口村御百姓吉郎右衛門乍恐口上書を以申上候御事（助四郎抱地川渡屋敷三四郎分三百七拾文二重高石銘金銀行違ひにつき申し上げ、下書き）					横長帳	1 冊	棒引抹消箇所あり。
246		玉造郡大口村御百姓吉郎右衛門乍恐奉願候事（田代三百七拾文について金銘石銘両様下知を下された件について）						1 枚	後欠か。
247		御口立写（西岩井より受取人我等方へ遣候様申遣候につき治左衛門廿一日迄に我等方に罷出ることなど）	十月八日～十三日	10. 8～10. 13	大肝入・渋谷平右衛門	大口村肝入・久兵衛殿	横切継紙	1 通	
					菊丈之進	大肝入・渋谷平右衛門殿			
					峰又左衛門	菊地丈之進殿			
248		奉願口上覚（嫡子同姓駒藏跡式無御相違被下置度親類加判ヲ以奉願候）	文政三年九月十六日	1820. 9. 16	藤嶋吉郎右衛門、親類・佐々木萬藏	仲之丞殿、曾口理殿、助左衛門殿	縦紙	1 通	端裏書あり。



東北文化資料叢書 第二集  
川渡温泉史料

発行  
二〇〇七年三月三十一日 発行  
東北大学大学院文学研究科  
東北文化研究室

代表者 原 純輔  
〒九八〇・八五七六

編集  
高橋 陽一  
仙台市青葉区川内二七番一号

印刷所 (株)東北プリント  
〒九八〇・〇八二二  
仙台市青葉区立町二四番二四号